



名古屋市立大学都市政策研究センター  
「CUPRE」(ワーキングペーパー)

vol.2

(2025年3月刊行)



## 目次

- ・オーラルヒストリープロジェクト No.1 . . . . . 1  
「子ども青少年局の発展期を支えて」石井久士さん（第2代 名古屋市子ども青少年局長）
- ・オーラルヒストリープロジェクト No.2 . . . . . 36  
「子どもたちをめぐる顕在化した課題に立ち向かって」下田一幸さん（第3代 名古屋市子ども青少年局長）
- ・オーラルヒストリープロジェクト No.3 . . . . . 61  
「名古屋にプレーパークを立ち上げて」竹村万知子さん（特定非営利活動法人 てんぱくプレーパークの会元代表）
- ・オーラルヒストリープロジェクト No.4 . . . . . 91  
「地域の親子の子育てに寄り添って」丸山政子さん（特定非営利活動法人 子育て支援の NPO まめっこ 前理事長）
- ・オーラルヒストリープロジェクト No.5 . . . . . 106  
「児童養護施設の子どもに寄り添って」籠橋芳孝さん（元名古屋市児童養護連絡協議会会長、元名古屋市民間児童入所施設連絡協議会会長）

# 子ども青少年局の発展期を支えて

石井久士さん

(2代目 名古屋市子ども青少年局長)

## <プロフィール>

# 石井久士さん

1950年、名古屋市北区生まれ。1973年に愛知教育大学教育学部卒業後、名古屋市立清水小学校、名古屋市立小碓小学校、名古屋市立あずま中学校の教員として教壇に立つ。その後、名古屋市教育センター、教育委員会教職員課を経て、名古屋市立丸の内中学校教頭、市立南天白中学校校長を歴任。さらに、教育委員会事務局の学校保健課指導主事、指導室主任指導主事首席指導主事、指導室長、学校教育部長、事務局教育次長を経て、2008年子ども青少年局局長（2代目）就任。保育園、養護施設、トワイライトスクール、教育委員会との調整等に尽力した。2011年3月に名古屋市役所を退職。



インタビュー日時：2024年11月20日  
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

**松村** では、石井先生、どうぞよろしく  
お願いします。

**石井** よろしくお願いします。

**松村** まず先生の生い立ち、歩みと  
いいますか、差し支えない範囲で結構です  
ので、教えていただけますでしょうか。

**石井** 私は、名古屋から出たことのない  
人間で、北区で生まれ、区内の中学校を  
卒業して、県立明和高校へ進学し、愛知  
教育大学へ進みました。

教員になりたいという特に強い意志は  
なかったのですが、一期校への入学が  
かなわず、自宅から通学できる公立の大  
学として愛知教育大学を選択しました。  
当時は、この地域の公立の文系学部は名  
市大の経済学部と愛知県立大の文学部と  
教育大学ぐらいしかありませんでした。  
法学関係を勉強したかったので、多少な  
り学べそうな、愛教大の小学校教員養成  
課程へ進学し、社会科の教室に所属しま  
した。進学後も特に教員への志望が強  
くなったわけではないのですが、周りの学  
生は教員志望も多く、自動的とは言いま  
せんが、教員になるレールが敷かれてい  
ましたので、教員への道に進みました。  
特に強い志望があったわけではないです  
が、教育実習などでも強い拒否感もな  
かったので、たまたま愛知教育大学に進  
学したのがきっかけで、教員になった  
というのが率直なところです。

昭和48年4月、初任は、北区の清水小  
学校で6年間お世話になりました。小学  
3年生から始まり、4、5、6、1、2年と学

年を一巡しました。1年生では、今も、印象に残る多くの経験をいたしました。

次に港区の小碓小学校へ転任しました。転任し、3年経たところで、中学校へ転任する気持ちはないかと教頭から告げられました。当時は、全国的に校内暴力等で荒れる中学校と呼ばれていた時代です。そんな時に、敢えて中学校へ赴任したいとは思いませんでしたが、教頭に説得され、教職10年目に東区のあずま中学校へ転任しました。全市的に見れば比較的落ち着いているほうの学校でしたが、今から思えば、それなりには荒れていました、初めての中学校で、7年間頑張りました。その頃は今と違って学校間暴力。生徒が公園に集まって、バットや角材などを持って、けんかをするのです。大学紛争とかで適用されていた凶器準備集合罪が、あの頃には中学生の学校間抗争事件に適用されたとも耳にしました。

松村 驚きですね。

石井 当時、授業中によその学校から生徒がやって来ました。1リットルのガラス製のコカ・コーラ瓶を振り回しながら来るのです。ガラス瓶で殴られでもしたら怪我をします。殴られないような距離をとるか、逆にクリンチで逃げるかでした。幸い生徒に殴られるという経験はなかったですが、取っ組み合いぐらいしたことを覚えています。比較的小となしい学校ではありましたが、それなりに生徒とのイザコザはありました。所謂、管理教育が華やかなりし頃でしたから。頭髮問題では、ずいぶんやり合いました。高校への進路指導の経験がなかったのと、

統一模試の実施内容に変更があり、進路指導の見直しを余儀なくされたことなどから暗中模索のなかで頑張った記憶があります。何とか中学校で7年を終えたとき、今度は名古屋市教育センターへの転任が告げられました。

初任者研修が始まる時で、その手伝いを含め、様々な教員研修のお手伝いをさせていただきました。ちなみに、教員の初任者研修ってご存じですか。

松村 知っています。

石井 初任者研修が始まった年度で、文部省が行う洋上研修のお手伝いとして派遣され、10泊11日の日本一周の船旅を経験させてもらいました。出張なのですが、豪華な船旅で、豊かな気分に合わせてもらう良い経験となりました。私は、付き添い・お手伝いということで、割と優遇され、研修の内容を含め、船上生活は今も強く印象に残っています。

教育センターでの教員の研修もさまざま自らの勉強になることが多かったのですが、学校事務職員の研修を担当したことで、とても多くのことを学ばせてもらいました。

教育センターで3年を経過したところで、教員人事を担当する教職員課への転任が命ぜられました。市立高校に籍を置いて、勤務は教職員課というやや変則的な形で、教員採用を中心に、教員の人事異動のお手伝いをしていました。教員採用の募集から採用内定、それに続く年度末の人事異動に向けての事務作業で年中結構忙しい思いをしました。

3年を経たところで、中区の丸の内中学校へ教頭として赴任しました。それまで、PTAとの関わりが少なく過ごしてきましたが、教頭は学校とPTAをつなぐ窓口ということで慣れない仕事に初めはとまどいました。阪神大震災の様子を学校で見ている、大変なことになったと思い、その後を心配していたことを思い出します。

教頭を2年経験し、天白区の南天白中学校へ校長として赴任いたしました。荒れる中学校の時代には、かなり大変だったと聞いていた学校でしたが、職員の頑張り、かなり落ち着きを見せてきていました。稲武の野外学習や修学旅行などでは得難い経験をいろいろさせてもらいました。

校長を1年終えたところで、教育委員会、学校保健課の給食担当の指導主事へ転任することとなりました。スクールランチが始まったところで喫食率が問題として取り上げられることが多く、学校へお願い行脚の日々でした。小学校のパンに異物の混入が心配されるとのことで、金属探知器で検査したこともめったにない経験で思い出されます。

給食担当指導主事を1年務めたところで、次に指導室の主任指導主事へ異動となりました。主任を2年、首席指導主事を1年、指導室長を2年務めました。指導室で5年過ごしたのは、勤務場所としては長かったと今感じるところです。その後、学校教育部長を2年、教育次長を2年務めました。その後に、子ども青少年局へ異動となりました。教育委員会での在任中で、最も印象に残るのは、やはり5000万円事件です。



松村 緑区ですね。

石井 全国的規模のすごい反響でした。私が、指導室の主任を務めているときでしたので、結構、大変でした。あれだけの規模のものを体験したことで、その後の事件に対する耐性が付いたのではないかと思います。5000万円事件以上に大変な事件は、それ以降、経験はなかったと思います。

もう一つ印象に残るのは虐待死事件です。小学1年生の児童が、母親が学校へ出さずにいて、結果的に衰弱して死亡した事件と記憶しています。名古屋で初めてとなる虐待死事件でした。児童相談所の関わり、学校における家庭での虐待への対応などが随分議論されたと思います。

自殺も心に残る出来事です。東区の中学校でも在校生や卒業生が自殺で亡くなり心を痛めたことがありました。指導室では、北区の中学校で自殺がありました。その原因や経緯など生徒への聞き取りなどで周辺事実を調べるのですが、大変でした。いじめがあったか否かの認定は、そうそう簡単にはできないと強く感じました。裁判となり、結審までにはかなり時間を要したと聞いています。

各学校では概ね1年に1回や2回程度は、これは大変な事件・事柄というのが起こるものです。それらが課業日に起こるとすると、200日程度の課業日で、名古屋の学校は360校ぐらいであるから、360から720件が200日で発生するとすれば、1日に3件から多いときは5、6件あるわけです。そうした、学校では大変という事件が指導室に報告されるわけです。すべて大変な事件ではあるけれど、命に関わる事件をまずは取り組んで、解決に奮闘していました。その頃にいじめ問題が大きな課題となってきたかなと思います。昭和50年代は校内暴力の時代。それが終わった頃に、今度はいじめ問題が大きく取り上げられるようになり、また一方で、不登校も徐々に増えだし、問題となってきた頃かと思います。1995年が社会の一つの転換点だと言われることがあります。ちょうど私が指導室に在籍したころに被るのかなと思います。

松村 そうでしたか。

石井 私が大学受験するときに東大の安田講堂事件が起きました。東京教育大学が前年に続き2年連続で入試がなく、急に東大の入試がなくなることになりました。東大へ行く能力もなかったのに直接の影響はないにしても、東大入試がなくなった余波として、東大以外の学校のいわゆる偏差値が急に上がりました。その意味で迷惑をこうむったとは思っていません。人には、東大へ行きたかったけど、なかったんで仕方がないと負け惜しみを言っています。それが一番、挫折ではないですが、人生の大きな選択の幅に揺れ

たときかと今は思います。結果、名古屋市教員になり、いろいろ大変な思いもしたのですが、多くの経験が得られたことは良かったのかと思えます。

最後の3年、教育委員会から子ども青少年局への異動となりました。教育の経験しかない私が、なぜ、市長部局への異動となったかの理由は分かりません。それが、人事なのではないかと今は思っています。

松村 行政職ではなかった先生が選ばれたっていうのは、先生以後の子ども青少年局長の方でも、あまりないケースなのかなというふうに思うのですけど。

石井 ないですね。

松村 多分、先生が唯一というか。

石井 現在のところはそうなりますね。

松村 そうですよ。さっき先生がおっしゃったように、例えば、虐待だとかいじめ、不登校などは、子どもや青少年の今日的な問題と密接に関連していると考えますが、そういった指導室でご自身が体験なさったことが、子ども青少年局長になってから生かされたとか、有意義であったとかということに関しては、どうですか。

石井 教育委員会って割と蛸壺みたいなところで、他局との関わりが少ないところのように思います。だから、他局から見ても、教育委員会は付き合いにくく、交流が少ないのではないかと感じていま

す。教員が行政職に異動するのは、極めて珍しいかなと思います。行政同士ならもちろんあるにしても。その時期、教員出身の松原市長であったことが、大きく作用したのではないかと思います。

**松村** そうですか。

**石井** 教育長を務め、市長に選ばれたのが松原さんで、その次に義務教育出身者で言うと、もう一人、教育長を経験した人がいます。それまで義務教育出身者が教育委員会には多くいたのですが、義務教育出身者で教育長を務めるというのはなかったのです。局長級の人事の全市的な兼ね合いがあったりするので、難しいのだと思います。私も、教育次長を務めていたので、めぐり合わせがあれば教育長への異動、なきにしもあらずだったのでしょうか、全市的な異動の中で、教育次長を務めた局長級の私の持って行き場に困ったのでしょうかね。

**松村** もうあとは、局長級っていうと、どっかの局長とか教育長。

**石井** 教育長とか、局長か、あとは区長などに限られていました。私の後、教育次長を務めた人の中には、区長になったのが2人ぐらいいます。学校へ校長として復帰したのは1人いると思います。私が教育次長のころは、学校へ復帰すると、県費負担職員になり、市の行政職の給与との調整ができなかったのです。校長だから、校長の給与表が適用されることで、局長級の給与で務めていたのに校長の給与が適用されると、格下げで減給

のようになるので身分保障の問題が生ずるので、難しいことだったのだと思います。

今は市費になったから、そのあたりの調整はできるようになったかと思えます。使い捨てみたいな感じの処遇にならないように、面倒を見る必要があったのだと思います。

**松村** いろいろあるんですね。

**石井** 適正な処遇を考えると、局長か区長になるのですが、その頃はまだ区長っていう選択肢はなくて、私が初めて教員出身からの教育長ではない局長になったのではないのでしょうか。義務教育の教員から、行政の局長になったのは初めてだったと思います。

**松村** 松原さんとは、松原さんが市長になる前からお付き合いとかはあったんですか。

**石井** 私が教職員課の手伝いをしていた時、松原元市長は、教職員課長を経て学校教育部長でした。資料整理などの雑用をよく仰せつかっていました。その後、丸の内中学校の教頭に異動したのですが、松原元市長も丸の内中で教頭を務めていたとの縁もありました。

**松村** その後、松原さん、立候補されて市長になられて。そのとき。子ども青少年局ができたときの市長、松原さんでしたっけ。



石井 私は平成20年度に子ども青少年局の局長に異動したので、松原元市長の下では1年務めていたこととなります。確か21年度に市長選挙が行われ、河村前市長に替わりました、だから、21年度、22年度は、河村前市長に仕えていました。

松村 市長が交代すると、子ども青少年局長って大変だったんじゃないかなって素朴に思うんですが。

石井 私は教員出身なので、基本的には子どもに関わる仕事をしてきたわけです。だから、子ども青少年局への異動が決まった時、子どもつながりで何とかなるのではないかと、あまり深く考えることもなく異動しました。当時、幼保一元化の問題が盛んに論議されていたと記憶しています、「子ども局」を新たにつくるということなので、保育園と幼稚園を担当する行政の部局を一本化してはどうかと具申しました。しかし、幼稚園関係の皆さんから、絶対に受け入れられないと言われました。幼稚園は学校教育法第1条に基づく学校だけど、保育園は学校ではないと。

松村 ご難儀したんですね。

石井 認定子ども園ができましたが、教育と保育の連携、必ずしも順調には進みませんでした。子ども局設立のときに担当部局の一本化を具申しただけど、結局、一本化はできず、幼保の担当部局は分かれたまま継続にいたっています。よく似たものとして、青少年問題もあったのですが、青少年に関しては子ども局へ事務

を移すことになりました。市長が交替すると、各局がそれぞれの担当する課題や事務内容を市長にレクチャーする機会があります。子ども局の経験が浅く、十分に理解できてないにもかかわらず、自身がレクチャーを受け、臨みました。

松村 分かりました。では、ちょっとまたその話に戻るかもですけど、ちょっと少し何点か確認させていただきたいんですが、子ども青少年局ができたときは。

石井 教育次長でした。

松村 そうだったですよ。そのとき、そもそもなんで子ども青少年局ができたとか、自分が局長に選ばれたかはよく分からないみたいな感じでおっしゃっていたんですけど、教育次長でいらした石井先生から見て、まず子ども青少年局って名古屋の人から見ると、子ども応援委員会もそうですけども、中の人から見ると当たり前っていう感じですけど、私なんか外から来た人間だと、どういう経緯で子ども応援委員会なり、子ども青少年局ができたんだろうっていうのはすごい関心があるところなので、ちょっとその辺りを教えていただけますか。

石井 子ども青少年局ができた経緯はよく分かりませんが、あの頃、最初に幼保一元化とかのことがあったりして、待機児童が多かったことが問題になっていた気がします。

松村 待機児童の問題が？

石井 男女共同参画の進展で、幼稚園より、保育園の需要が多くなってきていました。幼児教育の大切さも注目されるようになり、保育の質を高める声が上がっていたと思います。子どもの成長を総合的に促す仕組み・体制が必要との声もあったのだと思います。

それを最初に取り組んだのが、横浜市だと思います。横浜市が子どもの冠をつけた部局を創設しました。松原元市長はそれを参考にしながら、トワイライトスクールに次ぐ名古屋の子ども関連の目玉施策として作り上げたのではないかと思います。

先ほど話した虐待死もきっかけの一つになったのでしょう。虐待死を無くすためには、虐待の早期発見が大切です。当時、虐待は児童相談所が扱っていたのですが、虐待死事件の検証をやって、虐待の早期発見の窓口は学校ではないかとなり、学校と児童相談所が連携を深めることの必要性が言われたと思います。子ども局を作ることで、連携なり、虐待対応の一元化ができたりしないかとの議論があったように思います。不登校の問題も、不登校対策に終わり、ひきこもりまでの視野が十分でなかった頃です。子ども局を作ることで、不登校、ひきこもりの一連の取り組みができるのではとの期待もあったかもしれません。トワイライトに次ぐ、子どもを大切にする教育の松原を印象づける施策の一つとして、子ども局の設立も位置づけられていたのではないかと私は思っています。

松村 松原さんがってことですね。

石井 横浜が作ったから子どものことを重点的に大事にします。自分は、教員出身だから子どもを大切にする町をつくりたいという思いは強かったのではないかと思います。



函館の児童関係施設を視察した時の様子  
(写真提供：本人)

松村 子ども青少年局は、教職員も行政職員も所属する集合体ですよ。

石井 合体して。

松村 なかなか最初はいろんな価値観だとか、考え方の違いとかもあったようにもちょっとお話ししていたんですが、その辺りは、先生の中から見てどんな印象をお持ちですかね。立ち上げるっていうことにはなったけど、さっき先生がおっしゃったように、いろんな価値観だとか。

石井 具体的な事例で言えば、確かその頃に子ども条例ができたのです。子ども条例はいいことですが、理想論的な面もあると思っていました。学校はまだそんな理想論的なところまで至っていないわけで、子どもの言うことをそのままには

聞いてばかりおられない時代でした。子どもの人権が大切と条例には記されているのだけど、そんなのは聞けないことが多いってというのが、学校の姿勢だったように思います。愛知の管理教育って言われていたけど、名古屋もその一面が無いわけではなく、先生がそれなりの力を持って指導を進めている頃だから、人権を大切にしましょうという点での食い違いがあり、調整の必要がありました。子ども局から教育委員会に説明に来たのですが、中学校なんかでは思うように指導ができなくなると怒った記憶があります。そのときは行政の人は、良いか悪いかじゃなくて、上司に言われたことをきちっとこなすっていう考え方をするのだと感じました。私が子ども局へ異動したとき、私は外様な人間で、局の職務内容が分かっていなかったのですが、行政の人は、上司である私の命で動くわけです。仕事に対する考え方、姿勢が、教員とは違うのだなと実感しました。

子ども局に、教員出身者は少なかったです。教務主任になった教員で、子ども局に行った数も少ない。とにかく絶対数が少ない。教育委員会から子ども局へ異動した人は、教育、行政のことを分かっていても所詮行政マンです。上司の命で動く人間だから、その辺のうまい擦り合わせが必要でした。事業のジャンル、実施場所も違っていただけで、それを擦り合わせさえすれば仕事はできると感じていました。しかし、行政マンとしての姿勢・行動が必要で、それに倣って仕事に励んでいたように思う。私が異動したとき、職員に常にいちばんお願いしていたことは、教育も福祉も、子どもつながり

だし、主役は子どもだから、子どもにとって何が良いかで、お互いが歩み寄らないといけないということかな。

子ども局の設立の時、放課後児童クラブ、トワイライトは子ども局の所管となりました。学童保育とトワイライトの一元化が視野にあったことだったと思います。トワイライトスクールは、名古屋の女性会が大きな役割を担い、社会教育として出発しました。女性会との関わりが変化する中、トワイライトスクールも放課後児童クラブ、学童保育的な面が強くなってきました。トワイライトスクールや学童保育という観点から、様々な議論が展開され、各政党間の意見も異なっていました。紆余曲折のもと、今は学童保育も多くの政党との関係を深めることで、役割分担をしながら併存している状況になっているのではないかと思います。議員の皆さんの関心が高かった事案だったと思います。

松村 そうでしたか。

石井 私が。仕事を進める上では、教員出身だから細かいことよく分からないと職員に助けを求めていました。しかし、教員として行ってきたことや、教育次長だったりしたから、教育委員会の行政には言えることもあると話していました。

子ども青少年局の所管に児童養護施設があり。その中一つに、玉野川学園という教護施設がありました。そこで生活する児童・生徒は当時入所前の小中学校に学籍を置いたままで、学園で勉強をしていました。その勉強を教えていたのは教員免許のある教員ではなく、行政職の福

社士で、学園に勤務となった人が教えていました。一定の学力は身についたのでしょうか、十分な教育がされていたとは言えません。

法改正もあり、教護施設が自立支援施設に名称と機能の変更がありました。学校教育を保障しなければならなくなりました。玉野川学園を志段味中学の分校として位置づけ、教員の配置をすすめて本校と同様の教育がされるようにしました。中央児童相談所の一部を川名中の分校として同様に学校教育が受けられるようにしました。教育委員会は、当初、抵抗感もあったのですが、結果として引き受けてくれました。教育委員会のどの部署に声を掛ければよいか、教育委員会にいたからこそ分かり、学校現場の実情も理解しながら進めることができたかなと多少の自負はあります。

**松村** 先生が教職出身であったことが、活きたということですか。

**石井** 多少はね。かつての上司で、一応、教育次長を務めていたからこそ、聞いてくれていたんだと思います。

**松村** 反対に行政側からすると、これもちょっと変な質問かもしれないですけど、行政ではない先生出身の石井局長っていうところで言うと、お互いにちょっと気を遣ったりだとか、意思疎通とかなんか困ったりしたことも別に。

**石井** 分からないことが多かったので、教えてもらうことが多かったです。特に福祉の細かな制度などは分からなかつ

す。保育園のことも園児のことは、幼稚園とも通じるところが多少あるのですが、制度が複雑で当初は困りました。保育園は民間も公立も、いわゆる国の補助金というか予算で行われていて、経営の根本の基準は同じです。ところが、民間は補助金の交付を受けている中で、かなり裁量を効かして運営していました。公立も民間も、保育指針に基づいて、運営がされているはずなのですが、保育の内容的な管理は十分になされていませんでした。予算の使い方の管理・指導はかなり行われていたのですが、教育内容・保育内容、保育の質をどうするかっていうことに関してはあまり問題にされていないように感じました。

学校は、学習指導要領があって、それに基づいて教育活動が進められています。幼稚園にも教育要項があって。特に名古屋市立幼稚園は、それを順守して、いわゆる遊び中心の環境構成を中心にした活動を行っていました。それが当たり前のように感じていたので、保育園だって園の年間計画みたいなものや、園の保育方針を明らかにして、どのように保育を進めるかの経営案を作るべきと提案し、作成を促しました。それを担当課が集約し、内容に応じて指導することが始められたかなと思います。

当初、それは難しいとの声もあったかのように記憶しますが、行政の人の上司の命は絶対との心性から集約することになりました。それで保育の質を上げることができたかと言えば、未だ途上にあるような気がします。今は、名古屋も保育園が400以上に増えたかと思っています。その中で、待機児童は減ってきたけど、保

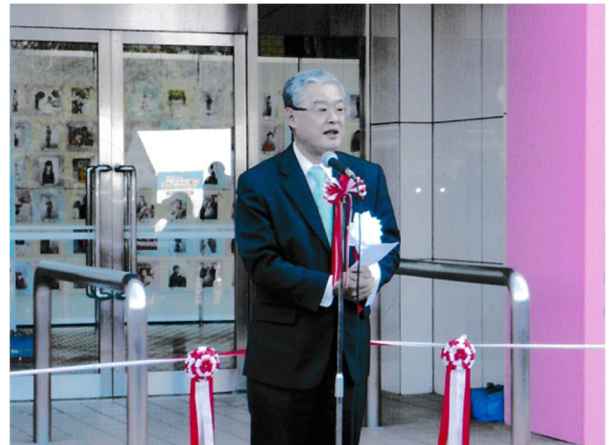
育の質が確保されているのでしょうか。増え過ぎて、指導が行き届かないような感じがしています。

名古屋には、市立保育短大が、郊外の尾張旭市にありました。名市大の幼児教育に統合されたと思います。かつては、保育短大出身者が名古屋の保育園を担っていたようですが、現在は、名古屋市立大学幼児教育出身者が、市立の幼稚園や保育園に就職していないように思います。

松村 そうなんです。

石井 市立大学出身の幼稚園や保育園の先生にあまり会うことはなかったです。かつては、保育短大出身者が保育士の中心を占めていて、そこには学閥らしきものもあったように思います。愛教大にも幼児教育科があり、県や名古屋の公立幼稚園に就職しますので、名市大と競合してるのでしょうか。幼稚園は私立が多く公立は極めて少なくなっています。幼児教育科があって、幼稚園免許を取得しても、それを十分に生かせる場が少なくなっていると思います。本当は、名市大の幼児教育科が名古屋の幼児教育を中心となって推進してほしいと思うのですが。

松村 分かりました。さっき、教職員と行政の職員との間のスタンスの違いに言及されてました。「子どもの権利条約」を踏まえて、学校の先生たちの子どもたちに対する姿勢について、お話していただけますか。



子育て応援団 すこやかフェスタの開会挨拶の時の様子（写真提供：本人）

石井 子どもの意見ばかり聞いていたのでは、指導ができないという声はありました。確かに、体罰に対する社会の目が大変厳しくなっていましたから、体罰はなくなっていました。子どもの権利条約で言えば、一番は、体罰の絶滅なのでしょう。だけど、20年前、絶滅したとはまだ言い切れなかったと思います。

しかし、やっとその頃には「愛のムチ論」がだんだんなくなっていたと思います。しかし、その感覚、心性は教員にまだ残ってはいたと思います。一つ、手綱を緩めたら、全部が崩れる的な発想は根強かったと思います。部活で水を飲ませずに活動していた時代だから、子どもの人権に十分目が届く状況ではなかった。当時は、部活の中には、年中、正月以外は毎日活動するのが当たり前許されていました。子どもの私生活がなくなることは、視野に入らない。確かに、子どもに勝利を味合わせたい、力をつけてやりたいと願う気持ちはありますが、その裏には、指導者が部活の世界で功名心をあげたいという思いもあっての、休みなし

の活動ではなかったかと思います。それが本当に子どものためになるかと言えば分からないところはあります。しかし、休みなし活動・練習によって、非行・問題行動に走りがちな子どもを引き留めていた部分もあります。野球部だとか、サッカーとかでね。大人になって立ち直り、懐かしむ声は多く聞きます。

**松村** 確かに。空いた時間に、望ましくない方向に走る懸念も指摘されていますね。

**石井** そうした部活動で子どもを引き留めていたのが、教員の働き方改革、今は部活動を学校から切りを離すことにやっきになっています。今は、過渡期ですが、いずれ新しい形が生まれるものと思います。当時は、子どものために休みなく部活動をするのが当たり前、そうした感覚が残っているときに、片一方で子どもの権利条約で子どもの意見を聞きましようと言われても、学校現場に行けば、何を言ってるのだと、無視されるに決まっていたようなわけです。感覚が違うのだから。

**松村** そうですよ。

**石井** 似たような事象として、不登校の問題がかつと大きくかわってきています。私たちが教員になったころには、不登校の子には声掛けをして学校へ来させようとしていました。だけど、だんだん声掛けをやめましようという時代になり、今は不登校の子どものための教室を学校の中に作りましようという時代です。私に

はその経緯が分からないので、理解がついていかないのが、正直なところです。しかし、今、教員になる若い人たちは、初めから不登校も一つの生き方だし、個性だというふうに教えられてきていると思います。不登校も個性だというふうにして考えたのは、子ども局ではないでしょうか。

**松村** 別の言い方をすると、確かに最初は若干、空虚っていうか、空疎な理想論を掲げていた行政のほうに、学校の先生たちも時代の変遷だとか、あと、さっきおっしゃった働き方改革だとか、部活の地域移行だとか、そういったことで結果としては近づいていったような、そういうイメージですか。

**石井** そうですね、子ども応援委員会が理想論として学校に入ったと感じています。私は、子ども応援委員会は機能していないと外から見えています。

**松村** 子ども応援委員会のお話も子ども青少年局に続いてお聞きしたかったので、じゃあ、ちょっと応援委員会ができた辺りのちょっとその前夜ぐらいからのお話をちょっと教えていただけますか。

**石井** 子ども応援委員会ができたときには、私は退職していました。経緯は分かりません。ただ、私が指導室に在籍していた時にスクールカウンセラーが配置され始めました。

**松村** 心の問題とか言われていた頃ですね。いじめとか。

石井 子どもの健全な成長がゆがめられるのは、ご承知のように戦後間もなくは社会が悪かった。社会が悪く、次は学校が悪くて、自己責任が言われるようになって、悪いのは個人にされてきました。一人一人の心の問題になったわけです。社会環境の問題じゃなくて、同じ環境でもこの子は貧乏でもいい子になったのに、この子は貧乏だったから悪い子になったと個人の問題となりました。貧乏が悪いのではない、個人の心の問題なのだというようになってきてしまった。それがいいか悪いかは私には分かりません。今は、闇バイトが貧困との関連で論説されようになってきました。やっと子どもの貧困でそういう子どもたちを取り巻く社会に再度目が向けられつつあります。個人の心の問題への対処、自分探しの時代でのアドバイスにスクールカウンセラーが出始めて、文科省が予算をつけ、試行的に始められた事業でした。地方に予算をつけると、一度では終われなくなります。

松村 そうですね。

石井 スクールカウンセラーの臨床心理士って公的な資格ではありません。今は、病院で働こうすると、国家資格の公認心理士資格が必要となっていますよね。

松村 おっしゃるとおりですね。

石井 当初、臨床心理士は、河合隼雄先生が考えて、学校を作り資格を授与した

のですが、卒業生の働き場がなかったように聞いたことがあります。社会心理士の資格保持者は、病院などに働き口があったようです。だから、スクールカウンセラーは、臨床心理士の働き場となったのではないかと思います。あの頃は、資格はもっていますが、臨床経験が十分でない、若い人が多かったように感じています。学校に1人在籍しても、経験がある程度あって、優秀な方は、団体の指導もできたりして、学校の助けとなったとは思いますが。6年の学生経験で資格を得た新任者は、一対一のカウンセリングしかできない感じで、時間が掛るばかりで、何人にカウンセリングで影響が及ぼせるかとの思いは強かったです。教員の非常勤講師は、1時間の単価が2800円ぐらいでした。スクールカウンセラーは、1時間、5000円程度だったと思います。

松村 高いですね。

石井 スクールカウンセラーよりも、非常勤講師のほうが教室に2人配置されたほうが、中学校の荒れた子どもに適切に対応できると思っていました。カウンセラーの人たちが教室に入ることはありません。相談室にこもって、来室する子どもだけを相手にしているわけで、広がりがない感じ。保護者を相手にしていることも多いと感じました。確かに間接的には、子どものためになるのだらうけど、広く子どものカウセリングをすべきと思っていました。今、名古屋市は、カウンセラーが全校配置されて、応援委員会があると思います。不登校の数が減ってき

ているのでしょうか？増えているような感じがしています。不登校にはあまり効果的でないように感じられます。いじめは減っているのでしょうか？いじめや不登校が、配置後も解決・解消されることはなく、減ってもいない。だから、応援委員会には、違和感が残るのです。私が指導室に在職していた時には、どうやってスクールカウンセラーの見直し、始末を図るかを考えるように、常に担当には言っていました。

**松村** カウンセラーが増えているのに、いじめや不登校が減っていない実状に。

**石井** 増えていきましたね。

**松村** 応援委員会について、ちょっと先生の考えを教えてください。

**石井** 応援委員会は、河村前市長がロスアンゼルスモデルに、外部から人材を招いて、いじめゼロを施策として推進するために設置したと思っています。スクールカウンセラーを所属させることは理解できますが、指導主事を新たに配置したのは理解できません。指導主事にどんな人が任命されたかということ、斜めの関係が大事ということで、ごく普通の女性が多く任命されていたと思います。斜めの関係の人も子どもには必要な場面もあるので、それを一概に否定するものではありません。しかし、学校の教員の指導と斜めの指導とは当然、違ってきます。そのギャップをどのようにして埋めているのでしょうか。私は、うまくいっていないとみえています。いじめ、不登

校、問題行動が必ずしも少なくなっていないのは、その証左なのかなと考えます。今、試行錯誤で各校配置から拠点校配置みたいな形にして、指導主事、カウンセラーの数を減らしているとも聞いています。臨床心理士は医師ではないので、医学的な診断はできません。そのあたりの限界があるのかもしれないと思います。

**松村** そうですか。

**石井** 精神科医の診断を受けないと、薬は服用できません。カウンセラーはじっくり話を、聞くことはできるけど、心的な問題の解決には必ずしもいきつけない。何のために学校に配置しているかと問われているのではないのでしょうか。そのために使っている予算が多過ぎます。その予算があるのだったら学校の非常勤講師を増やした方が、学校にとっては有効な対策になるのではないかと考えています。しかし、今はできません。非常勤講師のなり手がいません。予算をいくら回しても人がいなくてはできません。だから、費用対効果からいったときに、使われているお金に対して上がっている成果が見えないのが残念です。

**松村** そうかもしれないですね。

**石井** 逆に今はSW。スクールソーシャルワーカー。これが必要だと思います。今、子どもの、7人に1人は貧困にあえいでいます。貧困の救済としての生活保護の紹介などについてかつては、教頭がやったり、担任がやったりしていました。



ところが、難しくて分からないことか多くて、必ずしも十分な手当ができていなかったのではないかと思います。だから、スクールソーシャルワーカーの需要は高まっていると思います。しかし、大学卒業したての新任者がスクールソーシャルワーカーの資格を取得したからとしても、実務は簡単ではないと思います。生活保護事務などの実務をある程度経験した人たちが学校のスクールソーシャルワーカーとして入ってくるのが望まれると思います。そのためには、子ども青少年局にはそういう子どもの福祉を担当する部署もあり、事務の経験を積んだ人もいるのでから、そういう人たちが学校に配置して、資格を付与すると、より機能すると思います。だから今、必要なは気持ちばかり聞いて、心の問題の堂々巡りをしているだけよりは、スクールソーシャルワーカーのほうが、子どもの援助を具体的にすることができるとは思いません。

松村 なるほど。

石井 だから、よく言われるように、児童相談所とか養護施設で生活する子どもたちが社会に出たときに、生活保護の援助を受ける手続きの仕方が分からない。どこへ相談したら、自分が助けてもらえるか分からないと、闇バイトに頼ってしまうことになるのではないのでしょうか。生活が苦しい、お金がほしいで。

松村 分かります。さっき先生がおっしゃっていたように、社会問題として荒れる学校、校内暴力とかいじめとかひきこ

もり、虐待とあって、それは、全国的な趨勢でもあると思うんですけど。名古屋とか東海地方、もしくは愛知県でもいいんですけど、なんか特徴とあってあったりするんですかね。時代や地域を反映するような特有の問題もあるように思われますが、この辺りならでは何か事情だとか、特徴だとか、要因だとか、対策だとか、そういうものってあったりするんですかね。

ちょっと一つ思うのが、外国人がこの辺り、すごく多いじゃないですか、労働者の方が。そういうところで、イコール全てひきこもりとかに、もちろん直結するわけではないんですけど、多様な子どもたちがいるっていう点でいうと、もしかしたら、この辺、名古屋とかは課題先進的などころもあったりするのかなど思ったりもするんですけど。そういう多国籍とか、外国人ルーツを持っている子どもたちが今すごく増えている。特に愛知県はそれが顕著で、かつ、日本全体の人口が減っていく中で、どうしても労働力としてそういう移民的な人の賛否はあると思うんですけど、実態として増え続けざるを得ないようなそういう状況とかを鑑みると、この辺では結構そういういろんな子どもたちとか、世帯とか、いろんな問題とも結構、付き合いしてきた歴史があるようにも思うのですが、なんか先生の考え方とか印象おありですか。

石井 愛知県はそうだし、名古屋もそうだけど、一つは障害者に対して非常に優しくない。障害児に対してと同様に外国の子に対しても優しくない。異文化教育をしようとか、やろうというのは、必要

に応じてやるし、必要に応じて今、名古屋市教育館の中にそういうちょっとしたものはあります。しかし、そこでやるだけであって学校の中でそういうことを担当する人がいないと思います。

異文化教育担当を一つの役割として担う教員は各学校にいます。今は、外国籍の子が一定数以上在籍する学校には教員を増員して配置するとかはされていると思います。よく似た例として、不登校の子どもが一定数在籍すると不登校対応教員を配置することがありました。以前は、外国人の在籍で教員が配置されることはなかったと記憶しています。外国の子どものことを思った施策は少なかったと思います。

ブラジルの子どもたちはブラジルに帰ることを前提に日本に来ています。だからブラジル語などの母国についての勉強も必要とされていました。そこまではできなかったのが実情です。ペルーの子どもたちは、どちらなんでしょうか。帰国しないのだったら、日本語をきちんと教える必要があると思うのですが、その辺の振り分けに関しての基本的な方針とかが今あるのかは、私には分かりません。そうしたことも含め、外国の子どもに対して冷たいと思われま

**松村** 障害児や外国の子どもに対して優しくないとお考えになるんですね。

**石井** 障害児のための学校が少ないです。通常の学校にも、自閉症などの情緒障害の学級と知的障害の学級があります。東京など他の地域では、普通学級と障害児学級の担任を区別せず、年度ごと

にどちらも担任することになっています。名古屋は障害児学級を担当する人は、障害児学級だけを担任することになっています。だから、障害児学級と養護学校の中で異動をすることになっています。専門化して障害児教育の専門家となればよいのですが、必ずしも専門化することのない場合も少なからずあるので、そのあたりのところで本当の障害児教育になっているかどうかは分かりません。障害児は多様であるので、個別の指導計画が求められているのですが、なかなか個別化していないと思います。質の高まりは、十分ではないと思います。名古屋市立には肢体不自由の養護学校はありません。

養護学校は、県に設置義務があります。名古屋市には、市立の知的障害対象の養護学校が4校あります。県を助けていると言えますが、肢体不自由でいうと県立で名古屋養護学校と港養護学校があります。港養護は肢体不自由対象の学校なので、本来は肢体不自由ではあるが知的には優れた子どもも在籍します。教育課程が知的障害を伴う子どもたちとは異ならなくてはならないのですが、そこまでカリキュラムが確立できていたとは思えなかったです。肢体不自由のある子どもたちで知的には障害のない子どもたちは、地域の普通学級への就学希望が多くなり、引き受けざるを得なくなりました。地域の学校には、肢体不自由の子どもの就学に対応する施設は整えられていないので、就学が決まるとエレベーターなどを整備することになり、大変でした。

障害の多様性を踏まえたトータルの施策が県全体としては十分ではなかったと思います。障害児学校の定員、特に高等部の定員が少なくて進路指導が難しかったです。名古屋は、教員が頑張っていたのですが、知的障害の進路先が限られてきていて、就職先を見つけるのが大変でした。授産施設も、なかなか空きができないのですぐには入所できない状況でした。それが、高等部へ進学者が増えた一因かと思います。大変よいことなのでしょうが、知的障害に限らず、障害のある子どもたちも医療の進歩などで長命になってきました。しかし、高等部などの受け入れ先が新設されたり、定員が増やされたりするのが後手に回っていると思います。

**松村** そうですか。

**石井** 青い鳥学園という重度心身障害児の県の施設がありますが、子どものための施設なのですが、結構な年齢の身障者が在籍するようになってきていました。だから、新しい入所者の受け入れが制限を受けるような状況が生まれてきていました。

**松村** 高齢化っていうか、何っていうか。

**石井** 児童養護施設なのです。管轄は県なのですが、名古屋も対象となる施設で名古屋の入所がなかなかかないので、年齢超過者のために名古屋の入所が受け入れられないのは、違うのではないかと申し入れていました。そうしたことも含めて愛知は全体としては施設の数が

少なかったと思っています。障害者の数が多かったら、実態を適正に把握して、新施設の建設とか定員増をするなどして責任ある対応をすべきだと思っていました。今、かなり改善か進んでいるのではないかと感じていますが、私が障害児に関わっていた頃はそんな感じでした。

最近、名古屋市立若宮高等支援学校が開校し、職業教育を行い就労の促進を図っています。嬉しいことです。

**松村** 今の障害児のこともそうですが、逆に言うと行政が障害児とか子育ての面倒を見る必要っていうよりかは、子育ての社会化とかって最近、言われていますよね。子どもを社会全体で支えようみたいなそういうスローガンがある一方で、愛知県とかこの辺は結構、都会にしては地縁、血縁がまだまだ強いっていったらちょっと変な言い方かもしれないですけど、結構3世代同居が強かったりとか、家庭が子どもの面倒を見るっていうそういう文化が、もしかすると東京とか大阪とかに比べると強かったりするっていうことが、いい面も悪い面もあって。それゆえに行政の子育て支援とか、もしかすると、少し遅れていたとかっていうところもあったりするのかなと思うんですが。そういう愛知・東海の家族観というか、子育て観っていうんですかね。なんかそういうところってお考えとか、すみません。抽象的な質問で。

**石井** いえ、おっしゃるとおりだと思いますよ、私も3世代同居ではなかったのですが、スープの冷めない距離で、子育てをととても助けてもらいました。

子育てで感じたのは、名古屋には、子育てNPOの数が少ないのではないかということでした。

**松村** 人口に比して少ないですね。

**石井** それはみんなで助け合うという発想が育っていないことを示しているのでしょうね。松原元市長はNPOを育てることに取り組んだこともありましたが、結局、長続きしなかったという印象をもっています。私の関心が低いせいもあると思いますが、全国的な名だたるNPOがないでしょう。今、有名なのは栗田さんがやっておられるNPO法人レスキューストックヤード。よく新聞などでも取り上げられていました。その他に、全国区のもの、あるとは思いますが、私はよく知りません

子育て支援やなんかでも、あるとは思いますが、特にかかわりをもったことはありませんでした。

名古屋で特徴的なことは、町内会組織が強いことではないでしょうか。町内会と一体的な女性会も強いという印象があります。地縁が強いということでしょうか。それは、今も継続していると思っています。最近になって、そうした地縁的なものに見直しが多少、入ってきたのかなと思います。

市のPTA組織の見直しも始まるのでしょうし、女性会も高齢化が進み、続く若い人が入ってこない。町内会も見直しが進むと思います。名市大のある昭和区は比較的、古くからの地縁が強い地域だから入会しているけど、転入の新住民が多くなってきている緑区なんかでは町内会

に入らない家庭が結構増えてきていると思います。

**松村** 外国人に限らず、日本人でもこの辺に来た人たちは、あまり入ったりしないってことですか、若い人とかあんまり。

**石井** 若い人は入会勧誘がない場合があってそのままになっていて入会してないこともあるのでしょうか、マンションは、そこだけで管理組合があるので、特に町内会を必要としないので全体が入らないのではないかと思います。

**松村** そうですか。

**石井** 私の場合がそうです。マンションに入居したとき、地域の町内会からの勧誘はありませんでした。回覧板が回ることもなく、便利です。『広報なごや』さえ配布されれば、ごみ出しを含め概ねのことは分かります。管理組合でごみ出しの管理もしているし、必要なことは掲示板で告知しています。

**松村** マンション単位ですか。

**石井** マンション単位です。名古屋市は町内会に入る必要性が、マンション自体には、ないと思えます。これまでは、町内会へ入会しなければならないとの圧力が強かったと思います。子ども会も同じです。そうしたものが、今はちょうど壊れていく時期で、その現象が、東京よりも早いのか、遅いのかは分かりません。

松村 子ども会は、この辺でも減っているって言っていますね。

石井 特に、子ども会の役員になる順番近くになると、退会する傾向があると聞いています。役員にならないといけないから初めから入会しない家庭も少なくないとも聞いています。

松村 そうかもしれません。

石井 人の世話をしたくないっていう人が増えているのが世の趨勢になってきているのでしょうか。お互いさまだからっていう考え方が若い子に減ってきているのではないかと思います。学校では、自分勝手はいけない、迷惑をかけないと道徳の時間や生活の中で取り上げているのですが、社会の変化でなかなか身に付けていくのが厳しくなっていると思います。

松村 じゃあ、地縁が強かったこの辺りですら核家族化だとか、そういう単身世帯の増加とか、いろんな個人化みたいなことが進んでいく中で、これまでの地域の絆とかそういうことが弱まってきている中で、今、また新しく孤独死だとか、孤立した子育て世帯の虐待とか、そういう問題が顕在化しているってことですかね。

石井 過渡期だと思います。時代は常に変化しているので、いつも過渡期と言えなくもないですが、令和の今、少し顕著な過渡期に入っているのかもしれないと思います。

松村 確かにそうですね。

石井 いわゆる地域の安全で言うと、隣の人の名前と仕事に分からないといけなないと聞きます。隣の人がどういう人か分からないとなると心配です。そういう意味で言うと、教員とか警察官は、信頼を受けやすいと思いますが、中には例外もあり、犯罪に関わる人もいます。全体としては信頼を受けやすい。それと一緒にある程度、評判というか、社会的評価は大切なのだと感じています。

松村 この後お聞きしたいことは、役人人生を振り返られてみて一番苦労したこと。言える範囲で結構ですけど、苦労したエピソードとかもあればというのと、あとは、学校の先生の話もちょっと今日は、ぜひ先生なのでお伺いしたくてですね。さっき地域移行とか働き方改革っていうのはありつつも、子どもと先生の、もしくは家庭、保護者との距離感とかも結構、今、変わってきているような気がするので、ちょっとそこで先生のお考えっていうの二つ目で。

あと、最後は後輩たちというか、この刊行物の読者は、子ども関係のNPOなり、職員だったりするので、そういう名古屋の子ども関係に携わっている方へのメッセージみたいなのを、いただければと思うんですが。

石井 学校給食は、教育か福祉かが近年話題になることがあると思います。

松村 微妙なところですね。福祉なのかな。でも教育。福祉と教育どっちだろう。どっちでも関係しそうな気も。

石井 最近、格差が問われるようになり、給食は福祉との考え方が注目されているように感じています。教育福祉というジャンルが出てきました。学校給食がそれに該当するかは、私にはよく分かりませんが。朝食を食べることなく登校し、昼の給食だけが今日一日の食事。給食が命綱になっていると聞きます。そんな子どもが少なからずいるようです。ところが夏休みなど、学校が休みになると、一日、何も食べないことになるわけです。給食が福祉と呼ばれる所以だと思います。

松村 ありますね。そういう家庭も。

石井 命綱になっている給食をしっかり充実させること、それが福祉の充実かなと思います。給食がしっかりしていなければならないと思うのです。名古屋の給食はどうでしょう。次代を担う子どもの健康づくりに益々力を入れて欲しいです。

無償化するって言っても、今の安かろう、悪かろうの給食の無償化でよいのでしょうか。無償化さえすれば保護者は喜ぶ。それはあまりにも保護者をばかにしているし、それをさせてはいけないと考えています。そこを誰も言わないのです。

私は、今、学校給食を食育の観点からアプローチし、関心をもっているのですが、福祉の観点からも。実態調査などを

すすめ、給食の役割の見直しがされるべきと思っています。学校給食を所管する学校保健課といろいろと情報交換をしています。

松村 管理栄養士は、配置されていますよね。

石井 担当課には配置されています。学校に在籍する栄養教諭と一緒にあって、給食の献立を作成しています。給食の安全、安心を確保するためにも、摂取基準を守ることが大事です。給食は毎日のことなので、もっと目が向けられるべきだと思います。

松村 重要な点ですよ。

石井 子どもは給食を楽しみにしているのです。それに周りの大人が甘えているのではと思います。関心がないから、なかなか美味しさを含め、改善が進んでいないと感じています。

松村 分かりました。続いて、一番、苦労したことと、あとは、その反対のやりがいがあったこととか、素晴らしいと思ったこととか、ちょっと教えていただけます？ まず苦労した、大変だった思い出とか、エピソードとかがもしもあればお願いします。

石井 苦労であり、大変であったけど、やりがいと素晴らしさ、すべてを体験させてくれたのは、名古屋開府 400 年の 2010 年に実施した「なごや子ども City 2010」です。平成 22 年の 8 月、夏休み

中に15日間、吹上ホールで行いました。「自分の名前が言えて、一人でトイレに行ける、一人で買い物ができる高校生までの子ども」を対象として、子どもたちだけの手で遊びと体験のまちづくりをする取り組みでした。大人は入場禁止。市長選挙やハローワーク、さまざまなゲーム、お店を子どもたちが計画し、運営しました。2万人余の入場者を集め、盛会のうちに終わることができました。期間中は、子ども局の職員が総出で支えた、子ども局の総力戦でした。関心のある方は記録を見ていただきたいと思います。継続していきかけたのですが、予算の確保、人的な手当て、会場の確保など課題もありそのままの形で継続できなかったのは、残念に思っています。



なごや子どもCity2010のパフレット  
(提供：本人)

幸い、子ども青少年局のときには、5000万円事件に類するような大きな事件・事故はありませんでした。一番の苦労は、予算の編成だと思います。税収などで予算の削減が厳しい時代でした。局への配当予算が毎年10%削減で示されてきました。だから、局内でその10%分をカットしなくてはならないのです。事業内容の見直し・縮小・廃止を何で行うのかで苦労しました。担当課のそれぞれは苦労して事業を実施してきたので、それが出来なくなるのは身を削る思いだったと思うのです。優劣をつけて、最終決断するには、つらい思いが付きまわっていました。

経費削減の一環として、保育園の民営化の計画づくりをしました。苦労しました。待機児童解消のために保育園の新設が必要でしたが、民営の方が国の補助金が多いなどもあって、民営化して数を増やすというのかな。職員の反対も多くあり苦労しました。

当時、中津川に子ども会のための野外施設がありました。子ども会がキャンプする専用施設でした、子ども会で使うわけだから。夏場が中心です。問題はそこに個室がなくて、水道が簡易水道でお風呂が十分に使えなかった。雨天でもキャンプができるなど施設は立派でした。しかし、個室が無く、シャワーなどが思うように使えない施設は時代にそぐわないと思いました。子ども会が利用するにしても、施設を維持するよりも子ども会に補助金を出して、自分たちで好きなところを選んで、山のキャンプに行くようにした方が経費節減につながると考えました。施設があることによって、不自由な

施設でも使わざるを得ない、子ども会の役員がお世話をするのは大変との声もありました。民間のキャンプカウンセラーに現地はまかせ、往復の引率だけにしたいとの提案もあったかと思えます。施設の廃止を決断しました。しかし、施設を作るにあたっては、裏事情があったようで、廃止するとなると、利害関係者もいるわけで、担当者は調整。説得に随分苦労したようです。

**松村** 最近子ども予算を増やしていく傾向ですが、減らしていこうっていう時期があったんですね。

**石井** 税収が減って予算の削減に迫られたころ、局に予算が配当されるように仕組みが変わりました。局で新しい事業を始めたり、一つの事業の予算を増額させたりすると、局内でやりくりする必要があったわけですね。古いものの予算を削り、新しいことに予算をつける必要がありました。

**松村** そうということですか。

**石井** 何を削るかという決断は厳しいです。市長は思い付きとは言いませんが何かをしたいとかやりなさいとか言えば、財政が予算をつけるわけですね。子ども応援委員会などは、市長の一言で予算が付けられたと思えます。少子化対策の一環として保育事業、保育園関連には予算がつけられていたと思えます。全体として予算は毎年、削減されて、当初の配当はされていきました。今回の市長選でのある議員の訴え、減税分で100億円あるか

ら、減税を止めれば給食費ならすぐに無償化できる、はよく分かります。予算が毎年10パーセント削減され、内容は局で工夫しなさいということです。

**松村** 結構、大きいですね。

**石井** その分を何かで、削減しないといけない。局内で。局の中の事業担当課の間での取り合いになります。どれを削るかは、大変です。

**松村** それは、なかなかみんなが納得する結論は難しいじゃないですか。なかなか折り合いをつけるのは。

**石井** 最後は上司の命、決断になるのかな。落とすところを見つけて。納得してもらおう。そうした予算調整が大変だったですね。私は1度、河村市長のときに保育の予算がどうして削減しきれない。それで、配当予算の増額を財政に要求するのですが、なかなか認めてもらえない。

「分かりました。それでは、保育料を上げます」、それで局に予算を増やしますと言ったのです。「値上げは、やめてもらえないか。石井さん」と言われ、財政に配当を増やしてもらいました。

保育料の値上げができないので、その分の新たな予算が配当されたわけですね。そうした削減の中で一つ失敗かなと思うのは、松原元市長の新たな施策で、専業主婦の家庭に一定額の給付を行っていました。保育園には保護者も保育料を負担するけど、公費の援助も多くされているわけですね。



松村 保育園に対して行政からですね。

石井 専業主婦は確かに先々、厚生年金の3号被保険者になり、保険料負担をすることなく、年金が給付されます。同じように、子育てをしているのに、保育園を利用する人は、保育料の負担はあるものの、それ以上の支援がされています。ところが、専業主婦には子育て支援を受けることはできても、子育ての多くは家庭内で行われています。しかし、その子育てに対して、保育士のような対価がないわけです。専業主婦による子育てと保育園等による子育ての間に、親の負担に格差があるのではないかと、専業主婦に対して、子育ての対価的な給付を支給しようとする制度でした。そうした制度があったのですが、予算を削減しないといけない。民主党政権になり児童手当の増額など改正がありました。国からの給付がされたことで、名古屋市独自の専業主婦の子育てに対する対価的部分が代替できるなら、市の予算は削減することになりました。しかし、今から思うと専業主婦の子育て政策への寄与を評価するならば、廃止したことは、急ぎ過ぎたかなと思います。専業主婦の受ける子育て支援の総体は、職に就く母親の受ける子育て支援の総体に比べ、勝っているとは感じられない状況ではないかと思います。103万円の壁問題が大きく浮上していますが、男女共同参画や、3号被保険者の課題を考えると悩ましい問題です。学生や専業主婦の労働力化でその不足を解決しようとするようになります。しかし、それが、子どもの成長にとっては理想なのかは、分かりません。

私は、子育て期間中は仕事休んで、成長したら、再就職できるっていうのが、子どもにとってはいいのかなと思います。ただ、女性のキャリア支援ということからいけば問題はあるかもしれません。子どもが学校から家に「ただいま」と帰ったときに、誰かが「おかえりなさい」と言うのが、お父さんでもお母さんでもいい。おばあちゃんでもおじいちゃんでもいいのだけど、お母さんがそれを担う手助けとなる制度を無くしてしまったと思います。全体の予算編成のためとは言え、失敗だったかなと、今なお悩むところです。

他の苦労としては、市議員さんとの係わりがあります。さまざまな要望を受け、いろいろありましたが、それは苦労というより、仕事のうちと考えていました。

松村 そこで工夫されたこととか、大事にしたこととかが、おありでしたか。

石井 子ども青少年局は確かに学齢期の子どもも所管事業に関わりはあるのですが、それを担う職員と学校の教員が直接かかわることは少なく、具体的に調整しなくてはいけないと思ったことは記憶にないです。

松村 そうですか。

石井 小学校のトワイライトスクールは、子ども局へ移管されたわけですか、教育委員会で作りあげられたものを基本的にはそのまま移管してきました。学校もトワイライトスクールに対しての抵抗

感が無くなってきていたと思います。学校の中にあることが当たり前を感じるまでに定着したと感じていました。ただ、その後、トワイライトルームとかは19時まで行われるようになりました。

一方で、今はトワイライトルームで勉強を教えるのはいけないと言われているみたいです。かつては、宿題などをさせていたと思うのですが、私は勉強を教えていいと思うのですが、できなくなった経緯については分かりません。遊びを中心に、子どもの自主性に任せて放課後の安全な居場所としての位置づけに終始しているのではないかと考えます。

**松村** 宿題とかも駄目なわけですか。

**石井** 最近、確認したところいけないと言われました。

**松村** トワイライトスクールは松原さんの肝いりだったんでしたっけ。

**石井** そう。

**松村** その思い、背景としてはどんなことがあったんでしょう。既に学童がある中でも、そことは違うものを学校の中に作ろうと。

**石井** 男女共同参画の進展で、放課後の過ごし方が課題になってきていたと思います。名古屋には公的な学童保育は各区に1館の児童館にあったのですが、住まいが、そこから離れていると行けないことも課題ではあったと思います。そこで、地域に子どもの放課後の居場所とな

る施設が必要となったのでしょうか。学校とは異なる学びができる場所としてはどうかとされたのではないかと考えています。

**松村** 社会教育に力を入れていらした経緯からですか。

**石井** 学童保育という子育て支援の必要もあったのですが、放課後に安全な遊び場が少なくなってきたときに学校内に施設を作り、そこで社会教育団体として実績を積み上げてきていた女性会の方々や地域のボランティアの方々によりお茶を点てるとか、花をいけるとか、将棋や囲碁などを学ぶ場、社会教育の場であり、異学年交流の場として始まったと理解しています。

**松村** それがトワイライトスクールなんですね。

**石井** 午後5時までの子育て支援としての預かり機能もありました。5時まででも、パート勤務の保護者には対応できていました。しかし、正社員などの勤務時間が長い保護者の需要には応えられなくなって、トワイライトルームのような午後7時までの預かりが生まれてきたと理解しています。名古屋には公設の学童保育所が少なかった。区に一つの児童館にあるだけで、東京のように学区に1カ所の設置にはなっていませんでした。

**松村** あんまり学童も盛んな地域じゃなかったのですか？

石井 そうです。

松村 それはさっきおっしゃったように地縁、血縁とかも強かったし、専業主婦が主流だったからですか。

石井 専業主婦が主流である時代が長かったと思います。一面では学童保育は、ダブルインカムの高収入の多い家庭が行くところという印象がありました。今は、さらに多様化していますが。

松村 そうですね。

石井 今はさまざまな職業、考え方の家庭が学童保育にいかれてます。しかし、昔は党派的なもの結び付いている印象が強く、学区などをまたいで支援者で私設・民間の学童保育が増えてきたと思います。東京は、学区に一つある児童館に学童を公設で設けました。名古屋の学童の出発は区に一つある児童館でしたから、地理的に遠いと利用しづらいことが多かったと推察されます。



松村 はい。

石井 公設は足りない。当時、共働きしている人たち、教員や看護師などが仲間うちで民営の学童保育を設立するなどして、増えていったと思います。

松村 素朴な疑問として、トワイライトは、学校に先生ではないいろんな大人が入ってくるじゃないですか。それって学校の先生のこれまでの自分が知っているマインドからすると、結構、警戒するところも正直あったりしないのかなと思って。

石井 トワイライトのまとめをする人は当初、校長のOBの方に担っていただきました。今も原則は校長経験者です。

松村 それは、いいですね。

石井 校長OBと地域の方々、地域の女性会の方々やPTAの役員経験者の方々にアシスタントパートナーを務めていただくようにしていました。パートナーに教員はつかなかったという、つけさせなかった、学校の延長になってはいけないということだと思います。

松村 じゃあ、顔が利くっていうか、気心の知れた人たちが。

石井 先輩の退職校長者が運営指導者だから、学校は多少の融通を効かせていた面もあると思います。それに、トワイライトスクールに在籍する子どもはその学校の児童なのです。当初は多少の行き違いもありましたが。

退職校長経験者は概ね立場をわきまえて、学校のことには関わらずにトワイライトスクール業務に専念するわけですが、一応、先輩なので、現職の校長からすれば、目の上のタンコブ的な存在ではあると感じている面もあると思います。

松村 そうだと思います。

石井 限られたトワイライトスクール施設内には、保健室はありません。事務室に消毒液など簡単な救急薬品は備えてあっても、養護教員はいません。アシスタントで分からないときは、学校の養護教員にお願いすることも出てきます。本来的には職務外になるので難しい問題もあるのですが、学校に在籍する子どもなのだから、「何とかお願いします」という場面も少なからずあったとは思っています。私は、運営指導者の経験はないのですが、在籍する子どもなのだから、学校も協力しないといけないのでは思っていました。

松村 そうですね。

石井 放課後子どもクラブ・トワイライトスクールが子ども局に移管されたとき、私は教育次長でしたので、校長には、多少の権限が及ぶこともあったので、そういう点では良かったですね。それと同時に校長の退職後の就職先がトワイライトスクールでしたから。

松村 再就職先ですか。

石井 再就職、当初は再々就職先でした。再就職先を後進に任せて、いわゆる第二の人生を終えた人たちでもまだまだ元気です。以前は概ね61から65歳までで終わります。元気なのです。65歳から70歳まで、トワイライトスクールで活躍できるのではないかと、もともと子どもが好きな人たちですから。

松村 そうですね。

石井 当初は。校長経験者とトワイライトスクールの事業運営者はお互いにウィンウィンの関係だったわけです。

松村 確かにその中で校長経験者だと、地元のママともつながりがあるでしょうから。

石井 勤務した学区は原則はずすことになってはいたと思いますが、経験は生きると思います。

松村 そうですか。

石井 保護者とのコミュニケーションの取り方は経験豊かなのですから。

松村 今もトワイライトは基本的に、じゃあ、元先生が？

石井 まとめ役は、原則 校長経験者。

松村 知らなかった。

石井 今は人材が少なくなってきて、教頭経験者や、本来的には小学校経験者が

望ましいのですが、中学校の校長経験しかない方も担っていると聞いています。

松村 トワイライトは、でも本当は、名古屋市の子育て政策の中ではかなり成功した事例として語られることが多いですよ。

石井 今、結果としてはいわゆる1年生の待機がありません。他都市では学童保育の待機が問題になっていることがあります。学童保育かトワイライトスクールへ行けば、そこである一定時間、放課後の生活を過ごすことができます。その振り分けが今は自然とできているのでしょうか。午後8時までとか9時まで生活できるところや、その他にさまざまな民間の学童保育ができて、5時までならトワイライトスクール、長時間ならそうした施設へ。ただ、ちょっと最近トワイライトスクールに外国籍の子も増えてきているし、経済的に恵まれない家庭の子が行くところみたいになってきています。

松村 お金は高いけどリッチな家庭とかは、いろんな経験とかをさせてくれる民間学童を選ぶ。

石井 習い事的な体験や勉強をさせたいなら、民間の学童保育が選ばれるのでしょうか。

松村 勉強も教えてくれる。

石井 勉強、教えてくれると思います。そこから塾へも行くでしょう。

松村 そういうお受験みたいな。

石井 お受験みたいのところへ行く。そういう面倒を見てくれるところもあるのではないのでしょうか。下校して学童保育へ行き、そこから学習塾へ行って、また学童保育へ戻るということもできているのではないかと思います。

松村 中にはありそうですね。

石井 逆に言うと、外国籍の子たちとか経済的に恵まれなくて行き場がなくて、問題を抱えがちな子どもたちが少なからずいると思います。

松村 ちょっとそこは本来、意図ではないけど、そういう社会階層とか、年収とかに応じてそういうなんか。

石井 悪循環的になっていったのかも知れません。

松村 結果としてなってきたって。

石井 地域差があると思います。トワイライトスクールは原則3年生までなのですが、昭和区の小学校では、それ以外の子どももいて、いろんな学年の子どもと交わって、様々な体験ができていないのでしょうか。

松村 いろんな子どもたちと。

石井 友だちができます。すると、私の孫はトワイライトスクール好きでずっと行っていました。一方で、乱暴な子とか

手に負えん子がいて困っていると聞くこともありました。トワイライトスクールで当初、困っていたのは障害児への対応です。基本的に、障害児を受け入れていなかった。障害児の放課後デイも少なく放課後の行き場がないと、状況に応じて受け入れざるを得ません。

**松村** そこでちょっとまたさっきの話じゃないですけど、ちょっと優しくないかもしれない部分があるっていうことですかね。

**石井** トワイライトスクールと放課後デイをともに子ども局が所管をしていましたが、担当課が異なっていて、障害児施策は、健康福祉局の所管の流れがあったりして、トワイライトスクールとは十分な連携ができてなかった気がしています。

**松村** 課題はまずそこですか。

**石井** 障害児も二局に関係していたと思います。障害児は個別指導計画を作り、健全な成長を支援していかないといけないのですが、学校は在学期間中しか視野になく、子どもが生まれたときから障害があったら、学齢期を含めて、その発達をフォローしていくのは健康福祉局の仕事ではないかと、教育委員会のころに、やり合った記憶があります。なかなか連携が進まなかったです。結局、今はできているのでしょうか、子どもの個別指導計画。学校は在学時を含めて、個別指導計画を作るには専門性が十分ではない。障害のある子どもの、卒業後までも含め

て、見通した計画までは、なかなか立てられないです。

**松村** じゃあ、そこを本当に空白地帯というか、責任を持ってする行政の部署があまりかちっと決まっていない？

**石井** 学校は校内の指導は責任もって行います。しかし、障害児が、放課後デイのどこへ行くかは、保護者が選びます。費用負担もあるので、学校があまり関わることはできない。在校時間は責任をもって面倒をみます。障害児に関連して、教育委員会時代に行った、学校生活介助アシスタント事業は、保護者にも学校にもすぐに受け入れられました。制度上は、障害児は障害の種類、程度に応じて、障害児学級なり養護学校に入ることになっていました。普通学級で学ばせたいとする親の願いやさまざまな事情で地域の普通学校に入る子どもが増えてきていました。

**松村** ありますね。

**石井** 想定外のことなので教員の手当てはされていません。担任すると教員は大変になるわけです。本人の学習を助けたり、安全を確保したりするために、学校は親の付き添いを条件に入学を認めることが多かったのです。保護者は家事等を犠牲にして付き添うことになります。そうしたお母さんなどの付き添い者の負担を軽くするためにアシスタントを派遣する予算を確保したのです。当初は、年間で、保護者の付き添い時間の概ね3分の1の時間が目安でした。今は、それ以上に

アシスタントの派遣がされていると聞いています。

松村 それは、じゃあ、障害児の家庭が払うのではなくて、学校がお金をつけた。

石井 名古屋市の予算です。多動傾向の子どもは、本人はもちろん周りの子どもの安全を確保するためには、常時、アシスタントと一緒にいる必要があります。

松村 大変ですからね。

石井 時間だけでなく、内容的にもさまざまな要求が増えて、形を変えながら充実してきていると思います。

松村 ちょっと調べてみます、後で。

石井 お願いします。

松村 でもそれは、そのお母さんのウェルビーイングとか、働きとか、再就職という点からもすごく望ましい気はします。

石井 男女共同参画が当たり前になってきて、両親、働いている家庭が当たり前になってきました。障害のある子どもの家庭には、なぜか単身家庭が少なくないです。

松村 そうかもしれません。

石井 母親も働くのが前提。養護学校への進学をもちかけても、インクルーショ

ンの考えも当たり前になり、なかなか入学に至るまでが難しくなっていました。加えて、養護学校の定員の問題もありました。

松村 地理的な問題もありますね。

石井 地域の学校で面倒を見るケースが多くなってきていました。アシスタントは、保護者、学校の双方の要望に叶う事業だったと思います。

松村 それは石井先生が局長になられた頃ですか？

石井 教育委員会指導室で、障害児教育を所管しているときでした。

私が指導室に在籍していたときを含め、教員やアシスタントなど人の手を学校に増やすのが、念願でした。いろいろな理由・理屈を考えました。例えば、不登校が多い学校には不登校対応の非常勤講師を派遣しました。その中の一つが、学校生活介助アシスタントでした。さまざまな種別の非常勤講師を予算要求して、各学校に内容は異なっても、一人は非常勤講師が配置できるようにと思っていました。

その当時、正規の定員は、県費負担職員なので、愛知県が職員定数を決めてきます。しかし、それでは手一杯になってきて、市立学校の定数を増やすのは基本的には教職員課の担当なのですが、指導室は非常勤講師などの派遣できる人数を割と持っていました。例えば、不登校児童生徒が一定数在籍する学校には県費での教員加配がありました。しかし、数的

には、それに及ばない学校でも苦勞している学校には指導室が非常勤講師で派遣するようなシステムを作っていました。

**松村** それ、松原市長さんの時代ですかね。

**石井** そうです。確かに、松原元市長は教員出身でしたので、教育には理解を示して予算を配当してくれていました。だから、そういうことで言うと、子ども局に行ったときには、最初にお話しした、児童養護施設やら、細かいことは記憶にないですが、予算がないので、規模の縮小をしたことがあります。予算削減の中で、大きなことはできない時代でした。

**松村** 分かりました。じゃあ、また後で何か思い出されたら伺うことにして、最後から二つ目の質問ですけれども。石井先生、先生出身ということで、ぜひ今日お伺いしたかったんですが、先生のまづアイデンティティーとして行政官というか、ずっと先生っていう感じですかね。変な質問ではあるんですけど。

**石井** 行政組織に19年、教員として19年で。19年のうち中学校の校長、教頭の経験が3年です。残り、16年の新任からの9年間を小学校で過ごしました。その後の7年間を中学校で教えていました。その経験は私にとって大きいです。原点と言えるかも知れません。教員出身ですので、教育委員会が長くて、最後の3年だけ子ども青年少年局です。いずれにしても、全部、子どもに関わっていたことになりませんが、教育委員会の指導室で、5

年間過ごしたことで、教員のアイデンティティーがしっかり培われたのではないかと思います。

**松村** 分かりました。じゃあ、ちょっとその上で今、先生たちを取り巻いている状況がすごく変わってきて、さっき先生がおっしゃったように、校内暴力から虐待、いじめ、不登校などがある中で、学校の先生が働ける限界とか、もしかしたら昔と違って距離感とかも変わってきているかと思うんですけど。結構、石井先生が局長でいらしたときにも、そういう新しいというか、子どもに関係する今日的な問題がどんどん発生していく中で、学校の先生の役割なども考えることがあったりしたのかなと思ったりもするんですけど。

**石井** 難しいおたずねですね。今、考えているのは、子どもは心身一体の個体だと思うのです。ところが、その個体を教員は一つのまとまりというか全体として、受け止めないといけないと思うのです。

**松村** 全体として。

**石井** 一人一人の子どもの個体を一つのまとまった全体としてです。

**松村** 先生は受け止めているわけですね。

**石井** その中には家庭の背景とか、能力とか、性格とか、習い事とかなど、いろいろあるわけです。それを全部、受け止



めてなくては、子どもと本当に付き合えないというのが私の考え方です。ところが、それを今、分断しつつあるのではないかと思います。部活は外部の指導者、心の問題はカウンセラーなど。中学校は教科担任制で担当教科以外のことは分からない、小学校でも教科担任制がいくつかの教科での導入が始められています。確かに利点も多くあるとは思いますが、それで子どもの生活や思いの全体像がつかめるか、心配に思うわけです。

**松村** かつてだったら、担任が全部を見られていたかもしれませんが、現在は細分化され過ぎて、却って全体を見られる人がいないと。

**石井** 確かに子どもの生活全体に関わろうとして、忙しかった面もあります。全体をつかまざるを得ないというか、そういう環境だから努力してきたと言えます。どちらが望ましいのかは、今は分かりません。働き方改革で教員の時間外労働が軽減され、リフレッシュできるようになるのはいいことだと思います。部活の問題でも切り離していいけど、これまで教員が部活を担当することで培われていた、子どもとのコミュニケーションを今後どのように構築するのが、今は模索段階です。

**松村** 確かに、部活の地域移行とかで民間とかに預けると、部活でポロッと見せた本当の気持ちだとか表情とかを、先生は逆に言うとかかめないですもんね。

**石井** 部活の中で救われてきていた子どもの気持ちも少なからずあったとは思いますが。忙しくはあったけど、教員が授業で教えるだけでなく、部活を指導していることで、「先生、忙しいから大変だね」との保護者の目があったと思います。

**松村** 確かにね。

**石井** 保護者はこれまで、忙しくて、大変だねといった目で見られていたと私は思います。部活を外部に任せて、必然的に心の問題も学校内の生活だけに限られることで、「先生は、何やるの、学習指導だけ」という保護者の声が大きくなると思います。学校の教員が学習指導、教え方で学習塾以上の成果が求められるようになることが予想されます。

**松村** そうかもしれないですね。

**石井** テスト対策、受験対策では、ノウハウがないので、学習塾の後追いになるでしょう。かといって、現在の受験システムが良いかどうかは分かりません。学校の勉強をしっかりとしていれば、受験対策をしなくても進学できるようになればと私は考えています。愛知は、高校入試がそうでした。

**松村** 内申が高かったということですか。

**石井** そう。公立高校が優位で、内申点重視の受験システムです。有名校と呼ば

れる私学が少なく、私立高校間の競争も少なかったと思います。

松村 そうだったですね。

石井 小学生の中学校受験もあまり多くなく、そのための受験塾も多くはなかったと思っています。

松村 そうかもしれません。

石井 やっと近年、大学の付属高校が男女共学化して特色を出して進学希望者が増えてきていると感じています。かつての、中京高校とか愛知高校、東邦高校や名城高校は、男子校が共学化したことによってレベルが上がった感じがしています。女子高は厳しい状況ではないでしょうか。桜花高校もバスケットなどの部活で特色はありますが、大変なのではないかと思います。逆に伝統のある女子高、金城、淑徳、椋山、南山の女子部は志望者が安定しているのではないのでしょうか。中学校男子では東海中学はこれまで同様に難しく、名古屋学院中学校も近年志望者が増えてきていると聞いています。

松村 そうですね。

石井 名古屋学院はサッカーが強くなって人気を集めていると思います。

松村 確かにそうですね。

石井 東海に並んで、名古屋学院、愛知、愛工大名電もこれから志望が多くな

り、難しくなるのではないのでしょうか。こうした私学受験の趨勢に、公立中学校はどう対応していくのか難しいところです。ギガスクール構想、タブレットの利活用で私学と肩を並べることができるのでしょうか。公立学校は人間性を大切に作る全人教育の場として頑張る、確かな道を築くことが求められているのではないのでしょうか。学校で闇バイトをやって良いとは断じて教えていません。犯罪に巻き込まれる危険のあることを教えていると思います。でも、結果、なぜか闇バイトに応募する若者が少なからずいるのか、真摯に考えなくてはならない状況ではないのでしょうか。

松村 確かに、かつてだったら部活とかで押さえ付けていたようなところもあったかもしれないけど、ずっとその子を気に掛けていたような先生たちとの関係性が今、切断されていますからね。

石井 教科のテスト結果など学習の評価のみが、教員との関わりになる寂しさ、危うさを感じています。

松村 そこで本当にその子全体を見て指導できる立場の人がいないかもしれないですね。先生はそうだった。かつてはそうだったかもしれないけど。

石井 それに代わるシステムがまだできていない。かといって先生に今まで同様に頼っていくことはできません。働き方改革は必要です。それではどうするかが、今は、見えないのです。野球なんかでも部活での活躍度などを鑑みて、進学

先を振り分けてきた面もあります。ある意味それが部活指導者の生きがいった側面もあると思います。誤解や疑惑を招く面が無かったとは思いません。私学と個人の思惑が結び付いてね。しかし、それはそれで一生の付き合いになっている子どもたちもいるわけです。今後、部活の外部指導者、地域の経験者とか、退職した教員などによる限られた指導者の中でできていくのか、と心配されます。では、もう一度、中学校の教員に戻すかは、また違うような気がします。

**松村** 本当、学校の先生の役割、難しいですね。過渡期なのかもしれませんが。

**石井** 働き方改革を通して、どのような教員を目指していくか、先が見通せない難しい時期だと思います。学習指導、教科指導だけに保護者の期待がかけられると苦しいです。タブレットの利活用に始まる情報教育、生成 AI への対応など、新しいことをこなすことも、忙しいことを言い訳にはできなくなります。それも苦しさを増すのではないのでしょうか。

**松村** そうですよ。

**石井** 小学校の英語活動。名古屋市は当初から英語アシスタントを導入して、担任が一人で指導することはありませんでした。音楽も今は、専科教員が配置され担任が行うことは少なくなったと思います。私は、小学校が新任でした。ピアノが弾けなくて、就職してから習いに行きました。

**松村** そうですね。

**石井** 簡単な伴奏を考えてもらい、練習しました。

**松村** でもすごい向上心というか、何というか。

**石井** 1学期に1曲ぐらいはある程度、弾けないと子どもの期待を裏切りますよね。時がたつと、だんだん便利になってきて伴奏カセットテープができました。随分、助けられました。5、6年生を担当したときは、ピアノを学んでいる上手な子どもがいるので、その子に伴奏してもらっていました。専科教員が配置されるようになって、音楽を教えることは、少なくなりました。

**松村** そうですね。本当に先生が音楽をされたのですね。

**石井** その頃は、子どもも、先生は音楽、苦手で、下手でもしょうがないかなって目で見ていて、保護者も大目に見てくれていたと思います。今は、そんなわけにはいなくて、専科の教員は大変だと思います。専門化していくと、要求も高くなるので、教員も苦しくなりますよね。

**松村** 専門家した分、担当されたところではかなり高いレベルを。

**石井** 要求が出てくるでしょう。

**松村** それはそうですね。

石井 今は、大学卒業したばかりの教員に、新卒なら教え方が上手くいなくても仕方ない、しばらく見守るかなとはならないですね。

松村 そうかもしれません。

石井 誰に担任されたとしても、しっかり教えてもらわなくては困るとの思いが強いと思います。保護者に新任の教員を育てようという気持ちがないように感じています。

松村 一方で、要求ばかりであると、20代とかの先生がちよっと。

石井 適応障害を発症したり、退職したりするのを見聞きします。

松村 そのような報道も増えていますね。

石井 そんな状況を見たりするから、教員志望者は減ってくるのでしょうかね。

松村 そうですね。

石井 給料は安いし、そうした働く環境を容易に見聞きすることができます。今は、情報化社会だから。そうすると、やりがいのある仕事とは思えなくなるのでしょうかね。中には、元来の子ども好きな人はそれでも希望はすると思いますが。中には、小学校の先生、中学校の先生が良かったから、私もなりたいと考え、教職に就く者もいます。教師として上手に

育てたいと思うけど、生半可ではなかなか難しいです。

松村 昔から、先生たちの過酷な状況は、おそらくあったとは思いますが。周りが、先生たちの個人的な思いにある程度依存というか、甘えていたようなところもあったのではないかと。今、それがだんだん変わっていく一方で、先生たちへの要求は高くなっていて、先生たちにとって本当に苦しい立場というか。今、如何に子どもを支えるかだけではなく、如何に先生同士で支え合っていくかという観点も必要かもしれないですね。

石井 それは本当にそう思います。それは、企業でも一緒でしょう。入って3年経たないですぐに辞めていくっていうのは。

松村 退職代行とかなんか。

石井 そういう時代ですから、石の上にも3年なんていう言葉は、死語とも言えるのかな。夢、見て、次へいけば何か良いことあると思っただけの転職なのかもしれませんが、転職してキャリアアップしていくことはなかなか難しいのではないのでしょうか。

松村 今、新しい、もしかすると望ましいかもしれない動きとして、中途の先生も増えてきています。30代とか40代で民間企業から先生になる人も、昔と比べて増えていると思うんですけど、その点について、何かご意見がありますか。

石井 あまりそうした方とめぐり合ったことがないので、途中転職で教職に就かれる方々の問題点は、よく分かりません。

松村 分かりました。

石井 キャリアを生かしてくれれば、中学生のキャリア教育のモデルになり得るでしょうし、学校という職場は割にチームプレイのところだから、そこになじめれば貴重な存在になるのではないのでしょうか。

松村 確かにそうですね。

石井 バランス感覚が大切だと思います。しかし、バランス感覚が良くて、周りが見える人はなかなか転職してこないのではという気はしています。少ない経験の中では、成功した事例をあんまり見せていません。事例が少なかったせいもありますが。

松村 そうかもしれないですけどね。分かりました。最後の質問ということで、名古屋市の子ども関係の行政職員だとかNPOだとか、子ども施策に広く関わる人に対する先生のメッセージとか期待とか要望とかでも、ちょっとお話しいただければありがたいです。

石井 先ほど触れたように、子どもはその個体で一つのまとまりを示していると考えています。いろんな面を持っているから、そのいろんな面をとにかく受け止めて。できる範囲は限られているかもし

れません。自分の仕事はこの分野だけ、決められた分野だけで見ていると、子どもの一つの面だけで見誤ることもあります。だから、多面的に、全体として受け止めてほしいです。どう伝えたらいいのか分かりませんが、その子どもを丸ごと引き受けるという気概が大切と思います。これはもう関係ないから知らないではなく、切り捨てたり、切り分けたりするのでなく、丸ごと引き受けて欲しいなと思います。

松村 だから、役割としては時代の趨勢としては確かに、細分化することはあるかもしれない。確かに先生の軽減負担は重要かもしれないけれど、全体として子どもを見るっていうことの重要性だかっていうことを忘れないでほしいっていうことでもありますかね。

石井 そうです。細分化して、見る目は必要でしょうが、そこに終始するのではなく、人として、全体として見てほしいっていうことを強く思います。

松村 分かりました。本当にありがとうございました。



(了)

子どもたちをめぐる顕在化した課題に立ち向かって

下田一幸さん

(3代目 名古屋市子ども青少年局長)

## <プロフィール>

# 下田一幸さん

1955年名古屋市生まれ。1978年名古屋市役所入職、熱田区役所税務課市民税係。1981年総務局給与課労政係、1989年係長昇任して名古屋高速道路公社出向、1991年総務局給与課労政係長。1997年課長昇任し、建築局主幹（公社統合）、2000年給与課長。2004年に部長昇任し、教育委員会生涯学習部長、2007年に住宅部長。2009年に局長昇任し、人事委員会事務局長。2011年に子ども青少年局長に就任。在任中は、子どもをめぐる様々な諸課題に対応することに尽力した。その後、2013年に教育長、2016年に定年退職。



インタビュー日時：2024年12月20日  
（第1回）、12月30日（第2回）  
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

## ■第1回インタビュー

（2025年12月20日実施）

**松村** はい。では、どうぞよろしくお願ひします。

**下田** よろしくお願ひいたします。

**松村** お忙しいところ、ありがとうございました。とても楽しみにしておりました。まず、可能な範囲で結構ですので、下田さんの生い立ちを伺えればと思います。名古屋市役所に入庁する前に、例えばですけど、公務員に関心を持ったところとか、子ども政策とか、それ以外のことでも関心があったこととか、親御さんの影響とか学校の先生の影響とか部活とかも含めて、そういった点をお聞かせください。名古屋市役所では、すごく活躍されたことを、佐合さんからも伺っておりますが、改めて退職に至るまでの歩み等を最初にお話ししていただければと思います。

**下田** 分かりました。まず、最近の子たちって、若いときから自分の人生設計みたいなものをある程度考えるようになったし、学校も日常の学習でもそういう自己選択ということを導く時代になったと思うんですけど、私は、人生をどうやって何をするとか目標もあてもなく目の前に高校があるから高校受験、目の前に大学があるから大学受験という感じで過ごしました。その延長線上で市役所に就職することも決意したと思います。だから、あまり語るべきものがありません。

松村 いえいえ。

下田 今から思うと、もうちょっと子どもの頃から先を考えないといけなかったなとは思いますがね。

松村 お生まれは名古屋市で？

下田 名古屋市で生まれて、ずっと全部、名古屋市です、小、中、高、大。だから、名古屋からは出たことがないですね。



松村 それは名古屋市にすごく愛着があるとか。

下田 名古屋市のことは嫌いじゃないけど、他の都市を知らないですからね。

松村 なるほどですね。分かりました。すみません、名古屋市に入所をされたのは。

下田 1978年です。最初は区役所で税金をやらせていただきました。3年間、熱田区役所にいて、労政係に変わりました。その後そこに8年もいたんです。ここで色々なことを学びました。

下田 係長昇任したときに、名古屋高速道路公社に給与係長ということで出向しました。その後給与課の労政係長に戻り、6年勤めました。同一係長6年も結構長いんですよ。

松村 長いですね。



下田 課長昇任は主幹でした。私が担当になったのは、公社を統合するという主幹でした。統合にアレルギーを感じる公社職員には、事業の多様性ができるし、組織も大きくなって経営が安定するし、よいことばかりじゃないかとメリットを説得しながら統合を進めました。

面白いことに誰かの知恵で、両方の公社の係長級ぐらいのプロパー職員が送り込まれて3人でチームを組んだのです。3人で、それぞれの公社のプライドを大切にしながら「対等の統合」をキャッチフレーズにして、スムーズに統合できるように努めました。

松村 すみません。2つの公社の名称は。



下田 1つは「名古屋市住宅供給公社」で、住宅供給公社法に基づく特別の法人です。もう一つが、市営住宅を管理する「名古屋市住宅管理公社」です。40くらいあった外郭団体の中の2つです。

松村 そんなにあったんですね。

松村 さっきアレルギーという言葉がありました。反発する人達を説得したことも伺いました。もう少し補足していただけますか。

下田 双方には、労働組合もあり、役員もいます。だから、気持ちよく、くっついてもらわないといけないので。統合後にいがみ合ってもらっては困りますしね。だから、なるべく話を聞いて、とにかく両方の会社の職員の本音の話を聞くってことです。最初の頃は部長級の話しか聞けなかったんですけどだんだん広がりました。あと、さっき言ったように、応援に来てくれた人たちが本当にいい人たちだったので、3人でとにかくあんまり隠し事をせずに正直に議論しようという感じでした。

松村 なるほどですね。その後は。

下田 3年後に給与課長に戻りました。また給与課です。

松村 このときも、あれ、確か佐合さんもそこにいたような気が。

下田 佐合さんの2代後の給与課長です。

松村 そうですね。なるほど。

下田 ここで4年やってました。課長の4年も結構長いんです。

松村 同じところで4年ですよ。はい。それから？

下田 教育委員会の生涯学習部長にさせてもらったんです。

松村 これをちょっと、これまでのご経歴とかからすると、あんまり教育っていう感じの畑ではなかったんですね。

下田 初めての畑です。それまでがほとんど労務的な仕事でした。だから、初めて、ようやく公務員らしい仕事になったなと思いました。

松村 この生涯学習部長っていうのはどんなことを。



下田 教育委員会の中に分野が二つあって、学校教育と生涯学習。だから、教育

委員会の半分です。学校教育以外全部。だから、図書館も入るし、生涯学習センターみたいなのも入るし、その頃まだ女性教育っていうのもあったので女性教育とか、それからあとスポーツです。

**松村** なるほど。この生涯学習部長のお仕事ですけど、どんな仕事を普段されていたんですか。



生涯学習部長時代、愛知万博時の金シャチおろしの様子（写真提供：本人）

**下田** その頃は、日常的なことっていうのはもう、みんな組織がしっかりしているんです。だから、あんまり生涯学習部長の働きどころがなくて、関係組織にご挨拶に行ったりとか、いろいろなもののイベントでのご挨拶が重要な仕事でしたね。挨拶では一つは笑いを取りたいと思っていました。

それから学校の関係でいくと、PTAが生涯学習の担当なんです。あとは、たまたま新しくトワイライトスクールっていうのを始めていて、これからお母さんたちが働くと子どもさんの面倒見る場が必要ということで、松原市長が公約に入れたんですね。

**松村** 学童クラブみたいな感じですよ。ね。

**下田** そう。もともとは、学童しかなかったんです。学童ってその頃はまだ補助金も少なくて運営が厳しかったんです。あれだけじゃ足りないだろうと。だったら学校の教室を使って安全だし、無料でそういう子どもさんを受け入れる放課後の教室を創ろうっていうのが、松原市長になるときの公約のメニューだったわけです。

**松村** マニフェストというか。

**下田** そう。その全校実施がまだ道半ばだったので、それをとにかく増やしていく時期でした。

**松村** さっきの学校教育側と生涯学習側でいうと、トワイライトの主務は。

**下田** 生涯学習側なんです。学校を活用するけど学校教育じゃないですから。

**松村** トワイライトスクールは、すっかり名古屋市の中で定着し、今では学校との関係も良好と思うんですけど。

**下田** 最初の頃は駄目でしたね。だから、双方が慣れてきたんだと思います。

基本的にはかなりの数の校長、教頭のOBさんたちがその指導員に入ります。

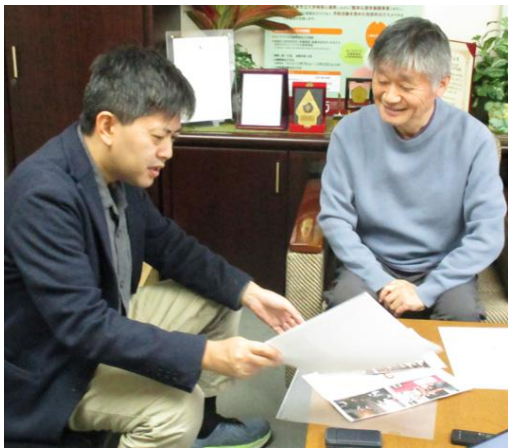
**松村** それはなかなか現役の先生も、物が言えないかもしれないとか。

下田 もしかしたらそれが嫌だったのかも。

当時、トワイライトには文科省もだいぶ力を入れてくれたので。本当に大都市ぐらいがようやく始めたばかりの時期だったので、お金はいっぱいくれました。

松村 補助事業モデル的なことにいっぱいお金が付いたと。

下田 そうです。



松村 なるほど。そのときに参考にした自治体とあって、横浜とかですか。

下田 横浜です。大体、横浜のほうが先進的だったので、よく見に行きました。

松村 はまっこスクールとあってことですか、今でいうと。

松村 トワイライトスクール。そうか。2000年代だから本当共働き世帯が増え始めた頃ですもんね。

下田 そうですね。

松村 今でいう、小1の壁とかそういうのが話題に出たりした頃でしたよね。



子ども青少年局長時代、児童虐待関係のイベントの様子（写真提供：本人）

下田 そうですね。

松村 このときに既存の学童、民間学童とかから反発とかなかったんですか。

下田 ありました。

松村 それは、その辺詳しく教えていただけますか。差し支えなければですが。

下田 やっぱり自分たちがちゃんとやっているのに、無料のトワイライトスクールを後からどんどん作るということで反発されたと思います。学童って月2万円ぐらいかかったんですよ。

松村 そんなにするんですか。

下田 だから、あんまり数が伸びないんです。運営が苦しいからバザーやったりしてました。頑張っ。だから、すごく親同士の団結力もあるんです。

学童から見ると、愛情を持ってやっているのに、行政マンが勝手なことをやっているという感じになって。

松村 それはそうですね。でも、そういう紆余曲折もありつつも、トワイライトの拡大期を担われたわけですよね。

下田 そうですね。子ども青少年局が作られる時に、健康福祉局にあった学童と教育委員会にあったトワイライトスクールを一つの所管にくっつけたんです。

松村 健康福祉局のほうだったんですね、もともと学童って。

下田 そう。福祉だった、もともとは。

松村 なるほど。じゃあ、この局ができたときに、目玉として、トワイライトスクールと学童をまとめて所管されるということになったわけですね。

下田 そのときの私の立場は、トワイライトスクールを新局に送り出すというものでした。

松村 そうなんですね。そのとき、教育側としてはどういう反応なんですか。

下田 トワイライトスクールは、やっぱり生涯学習の中の大きな柱だったので、学校教育との連携みたいな教育施策の充実を考えていました。学校という一つ屋根の下には学校教育も所管する一つの局が運営した方が良いのではないかと。私

たちは「一つ屋根の下理論」と呼んでいました。

松村 そうなんですね。

下田 だけど、結局、教育委員会に残しておくのは無理でした。その時、かなりの喪失感を感じた思い出があります。でも数年後、子ども青少年局長の時に、最後の仕上げの263校目のトワイライトスクールを開設する事になった時には少なからず因縁を感じました。

松村 いろいろ紆余曲折があるんですね。

下田 どこまでいきましたかね。生涯学習部長の仕事でしたね。当時は歴史の里を創る計画がありました。守山区には沢山の尾張氏の古墳群があるんですよ。ただ一個一個の古墳がちっちゃいので、文化庁は価値のある史跡として認めてくれなかったんです。後々には古墳群としてまとめて認めてくれたんですけど。

松村 まとめて。

下田 ほかには、当時は教育館の現地建替も課題でした。今は教育館って外堀通りに移転したんですけど、当時は、栄にあったんです。それを現地で建て替えるっていう計画がありました。ただ、議会から十分な賛同が得られなくてね。なんでこんな栄の真ん中に必要なのかと言われていて、なかなか決着がつかなかった

んです。栄の街の賑わいと教育を融合するのは難しかったですね。

松村 それは下田さんの的には頑張ろうとしたんだけど、やっぱり関係者の反発とかが強かったってことですか。



下田 結局、生涯学習部長の3年間は何も進まなかったもので、期待されていた目にみえる成果が出ませんでした。私の仕事ぶりには市長からも厳しい評価が下されたそうです。

しかし、その後、住宅部長に異動して、楽しく仕事ことができました。

松村 というのは。

下田 住宅部長は主に市営住宅の管理でしょ。目の前にいろんな課題があって、1個ずつ解決できるわけです。例えば高齢者の市営住宅の倍率が30倍だったとかっていう話があると、それだったら高齢者用の専用住宅をリニューアルでつくって、簡単な見守りもつけてというようなこととか。住宅部の元気なメンバーにも恵まれました。

松村 そうでしたか。

下田 前任の住宅部長が研究熱心な人で、もういろんなこと全部検討してあるんです。20センチくらいの高さまで未実施の検討事項が積まれてて、私は上から実行していただく。それがどんどん解決していくわけです。

松村 目に見える形で。今度はどんどん結果になっていくわけですね。

下田 というわけで、この住宅部長の2年間は、すごくやりがいがありました。

松村 そうでしたか。それから局長級のポストに就いたのですね。

下田 人事委員会事務局長に昇任しました。それまでの人事委員会は、職員の勤務条件を守るというのが本来の仕事だったのに、給与が下がる時代が変わって、マイナス勧告もするようになっていたんです。それで、その年に0.25%のマイナス勧告が国から出たんです。だけど、名古屋はマイナス2.5%だったんです。マイナスする金額が国の10倍だったんです。市内の民間給与の実態調査結果なんです。

松村 それは何でそうなったんですか。

下田 リーマンショックによるトヨタショックがありました。あのとき。愛知県も相当悪かった。

松村 それはどうしようも、できないですもんね、もう。

下田 タイミングの悪い事に、ちょうど河村市長が当選されていて、市民税の10%減税を行革で生み出した金でやるということで、市役所としては市民サービスに影響しない職員の給与を大幅に下げたいときだったのです。それで人事委員会の大幅なマイナス勧告は色々と誤解されましたね。

松村 同じように、カットっていう。

下田 人事委員会の2年間は精神安定剤が必要なくらい大変でした。その後、子ども青少年局長になるっていうことになって。子ども青少年局は、できてからまだ3年目。部長も含めて、ほぼ女性幹部で構成されていました。錚々たる顔ぶれで、みなさん自由にすばらしい活躍をしてくれました。

松村 なるほど。3代目局長に就任されたときの子ども青少年局の課題としては、例えばどんなことがあったんですか。

下田 ちょうど、陸前高田などが被災された頃で。

松村 東日本大震災の年ですね。

下田 2011年の3月でしょ。丸ごと支援がようやく始まる頃で、児童相談所から2人。それから保育園を建て直さないといけないので、保育企画やっていた職員を2人ぐらい送って支援してました。

また、前年度には、なごCityっていうミニ・ミュンヘンのような大々的なイベントで1カ月間も吹上ホールを貸し切って子どものまちを創ったんですね。これを引き継いでくれって、前局長から言われていました。でも予算300万円しかなくて。予算かけずにどうやって継承するかっていうようなことに頭を悩ませていましたね。最初の頃は。

それでNPOのやっている子どものまちみたいな事例を集めて話し合ってもらって「子どものまちサミット」っていうふうになんかちょっと変えたんです。

ただ、そうこうしているうちに10月中2の男子が児童虐待で死んじゃったんです。この名東区の中2の男子の件は児童相談所が関わっていたのに救えなかった。加害者は、ステップファーザーというか、家庭に入り込んだ男なんだけど、お母さんも止める力が弱くなっていました。

それで、検証委員会がつくられたんです。こういった場合に現場に責任を押し付けたかのような過去の例も見ても嫌悪感を感じてきました。自分が局長のときにこの問題が起こったでしょう。だから、これで現場の責任になすりつけたりしたら、自分の人生、何だろうと後悔するので、だから、とにかく自分が一番の責任を持って関わっていかうと決心して、相当にこの問題はやらなければいけないなと思いました。

ただ、またそのときもメンバーがよかったんですけど。部長も総務課長も一生懸命になったし、局が、かなり一丸とな

ってこの問題に取り組むという感じになって、本気で児童相談所を立て直そうという感じになったんです。

松村 ええ。

下田 私は、事件前は、児童相談所は専門職と見做していたので、あまり局長が口出ししないほうがいいと思っていました。だけど、当時の名古屋市の児童相談所は、とても忙しくて経験のある職員が少なかったことが、分かってきました。そうしたら、児童相談所の実情をちゃんと見てくれって若い職員達に言われて、3日ばかり、児童相談所の一時保護の部屋に泊まり込みました。生の現場が見えて、問題点がいっぱい分かってきて、とにかく専門職が50人ぐらいしかいなかったのです。事務計算をするとケースを100件ぐらい持っていて、とてもやりきれない。専門職が今の3倍は要る。3倍の150人がいないとその時のケースを処理できないと考えられました。3倍の人がいれば一人でケースを30件持てばいいですよ。それならきちんとした仕事ができる。

松村 ええ。

下田 持ち件数を30件ぐらいにすればちゃんとやれるなっていう計算で、人をとにかく増やさなければいかんって結論づけました。

それとやっぱり、「心技体」ってその頃言っていたんですけど、職員のノウハウが不足していて、それは副所長さんだったかと話した時に、「下田さん、本当

はね、今の児相は新規職員が多くて、ほとんどの人が最初の人事異動で外に出たきり帰ってこない。だから素人集団になっていて、「戦え」って言われたって、徴兵で集めた兵隊を文民の司令官が指揮しているようなもので、戦う力がなくて無理なんです」と言われて。目から鱗でした。だから、一時保護の意思決定を職員個人に任せていると一時保護は親との関係が悪くなるので、やっぱり担当職員の気持ちとしてはやりにくいんです。だから、それを個々人の判断に任せるんじゃなくて、所長を含めて組織として意思決定していく必要がありました。

なおかつ、児童福祉センターは、複合施設です。児童相談所もその中の一つで、専任の所長がない。センター所長が児童相談所長を兼務していたんです。その上、それが日常の医療業務も行う医師だったんですよ。当時も虐待事例が年々増えていました。意思決定をちゃんと一個一個ケースごとに見るのは、兼務所長では無理だから、専任化しないといけないとか指摘されました。

別の課題としては、一時保護っていうのは、短期の処置なので、どこかの時点で施設に入れるか、家庭に帰さなといけなけれど、移す場所がないんです。みんなパンクしてる。家庭や地域に帰りたいけど、区と児童相談所はお互いをよく知らなかったのです。連続性や一体感に欠けていました。

だから、児童相談所の兼務職員を区に2人ずつ置くことにした。そうすれば児相の専門職員同士で信頼して話し合えるじゃないですか。今も少しずつ増やしているはずなんですけど。

あとね、局の総務課長から、いまずぐに虐待対応の本庁組織を作りましょうって提言された。児童福祉センターって部長級がいるから、本庁組織はあまり口を出せなかった。これから児相を改革していく課長級を本庁に置く必要があると言われて、いきなりその年度の途中で臨時の本庁組織をつくった。白羽の矢の立った主幹に局長の特命事項を出したんです。結果的にこれはよかった。やっぱりすごく力になりましたね。

それと、児童相談所には緊急一時保護を担当するだけの「緊急班」をつくったんです。その班は、子どもの身体のこういう所に傷があったらとか、チェックシートに当てはまる危険項目があったら、まず一時保護することにしました。親に怒鳴られても、怒られても。そういうふうに変えたんです。要するに安全サイドに一時保護基準なんかも含めて児童虐待に関する児相のシステムをみんな変えたんです。

あと、職員の意識改革が必要ということで、当時の東京事務所に日本中から適任者を探してと依頼しました。直ぐに、横浜にずっと児童虐待のことをやってきた経験者、児童相談所の所長もやっていたOBがいると聞いて、担当の部長に横浜まで飛んで行ってもらって、三顧の礼でお迎えしてその人に来てもらうことになりました。

松村 名古屋市に来てもらう。

下田 でも今の仕事があるので常勤は難しいといわれて、非常勤の参与という形で。部長級で参与となりました。心の問

題とか意識の問題とか技術の問題とか、そういうのを研修してもらう事にしました。実践的でしょ、そういう研修なら。あと、警察を受け入れました。警察もやっぱりウソを見抜くノウハウがあって助かりました。組織がうまく機能したなと思いました。

松村 虐待防止対策が進展したんですね。

下田 そうですね。考え方を変えたし、外の血を入れたことだし、この取り組みを一過性で終わらせないためにも、長期の取り組みを条例にまとめたかったんです。結局、議会も党派を越えて、虐待防止条例が制定されたんです。

松村 議員立法で作ったんですね。

下田 他方で、短期的には、まず2012年をどうするかというものと、2013年をどうするかとか、そういう議論をしてたんですけども。児童相談所だけではできないので、地域と学校、保育園と児童相談所、それから保健所、そういう組織と話しを重ねて行ったんです。様々な案が出て、民生委員・主任児童委員さんたちにお願ひして、児童委員を増やしたり、地域の適材適所に、虐待防止対策のボランティアみたいな人を置いてもらったんです。そうすると、児童相談所も予防も保護も何から何までやる必要がなくなります。やることを特に専門的なことに限定していくと、ここは自分たちが特化する分野だ。ってなれば、やりやすいじゃないですか。



松村 確かに。

下田 その時に作った行動マトリックス図が、条例に基づく令和6年の報告書にも載っていて、まだ当時の面影を残しているのでびっくりしました。相談所もそのときは中央と西と二つしかなかったんですけど、緑区と守山区では子どもが増えていて、あっちのほうへ出動するとかかなり時間がかかっちゃうんです。だから、緑区に第3、守山区に第4児童相談所を作らないといかんねって言うところまで話し合っ、取りあえず第3児童相談所ができました。実現したのは私が局にいなくなってからですけど。

本当はもう一点、児童福祉職っていう子どもの福祉に関する専門家にしたかったの。50人から、増員して150人いれば職域としては一つの大きな塊なので、なおかつ、勤務場所も児童相談所があり、本庁があり、区役所がある。そうすると、人事異動もやれるじゃないですか。一生の仕事として職員の覚悟もできると考えていました。でも、これは総務局に反対されて実現できませんでした。別に専門職なんか作らなくても局の人事異動をきちんとすれば済むことだと言われて。危機感が伝わらなくて悔しくて、力不足を感じました。

松村 なるほど。

下田 当時の市役所は定数削減の嵐が吹いていました。逆風の中で長期的にどうやって児相の職員を増やして行くか。悩んでいました。一方で、公立保育園の民

間移管っていうのが行革事項としてあったんですけど、当時公立保育園が127あったんですよ。それを78にするっていう行政改革の叩き台が作ってありました。だけど、担当者たちも実現が困難で困ってました。反対が多くて遅々として進みませんでした。50園移管すれば局の定数減が500人。500人のうち100人ぐらい児相に返してもらえばありがたいことじゃないですか。だから公立保育園の民間移管を現実のものとしてやると決めて、それを市長の前で言ったんです。

実現のやり方はアイデアが二つあって、一つは6年前に公表する。

松村 6年っていうのは。

下田 とにかくその園に入ってくる人にこの園は、6年後に民間移管しますってことを公表してそれを了解して入園してもらおう。そうすると、「うん、いいよ」となりますよ。6年後なんで。移管する時には全員がもうみんな了解しています。移管が周知の事実になっていきます。

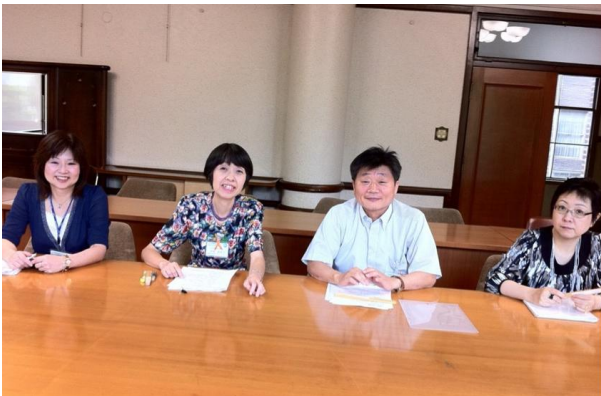
松村 そういうことか。

下田 名づけて、6年熟成方式っていうので。毎年、6年後の4園ずつ準備していくやり方に変えますということを総務局に言ったんです。またもうひとつのアイデアが、そのときの保育園の課題を解決するというのもセットにしました。残った公立保育園は、民間も指導するエリア支援保育所っていう名前にして公立保育園を充実するっていうふうにしました。というのは、当時の保育園は園長の下に

係長もいないし、事務職もいなかった。とても手薄でした。民間移管の実現には保育園長さんたちの応援が必要でした。これで園長さんたちも賛成に回ってくれたので、かなり環境が整いました。

**松村** これ、もともと公立を民営化するってというのは。

**下田** 行革の流れの一環で、市の職員数を減らすためです。見た目上の行政改革が進むという事です。



子ども青少年局長時代、局の幹部職員（副局長、総務課長、保育部長）と行政改革の総務局ヒアリングにのぞんだときの様子  
(写真提供：本人)

**松村** なるほど。民営化された実績にはなるわけですね。

**下田** なるんですね。それが全然、進んでなかった。だけど、やり方を変えれば少し全体が進むような感じになりました。実際、最近園長さんにお聞きしたら、現在、公立保育園はもう78になったそうです。

**松村** これは下田さんの発案というか。

**下田** そう。6年熟成方式を思い付いたんですね。どうしたらいいかなと悩んで。とにかく児相の専門100人を長期的にどうやって生み出すか。また、当面の専門職30人ぐらいをどうやって生み出すかという方法を考えに考えました。そのために、本当は最初、一時保護所を民間委託しようかと画策しました。だけど、児童相談所がそれはもう無理ですと。厚生労働省認めませんと。もう一度厚生労働省に聞いてもらったら、児童相談所を分離して一時保護所だけを民間委託はできませんっていう答えでした。今でも、そんなこと本当にだめなのかなと思うけど、とにかく国からも駄目だって言われて断念したわけ。そこで人数を生み出すのは無理だなと思って。とにかく人数を生み出さないと改革案が絵に描いた餅になっちゃうんですよ。

**松村** でも、実際に現在もこの条例に基づいて、毎年、報告したり、改善を図ったり。

**下田** ねえ。10年先のやつまで検討していてもだいたいの場合それで終わっちゃいますもんね。その意味で条例化、これは大きいと思いますね。

**松村** 分かりました。

**下田** それと、もう一個大きな問題になっていたのが、待機児童問題です。

**松村** お願いします。

下田 待機児童をどうするんだっていう問題が始まっていました。その頃、名古屋が日本で一番、待機児童が多かって新聞に載ったんです。だけどそれ、待機児童って、幅があります。隠れ待機児童って聞いたことありますか。

松村 いろいろ集計の方法とかで変わるんですよね。

下田 そう。多分、当時の保育部長が、裏の待機児童に回さずに、かなりシビアに表に出したんだと思う。

松村 名古屋市のほうからその実態を発表したってことですか。

下田 部長に直接聞いたわけではないけれど、多分そうじゃないかな。そして本当に数字がワーストになったの。その後、思惑通り、予算もついて、待機児童対策が本格化しました。

保育園を増やすことについては、もう一つは、株式会社参入の件が検討委員会で提言案の検討が進んでいました。それまで、名古屋市では、株式会社は保育園には参入していなかった。その株式会社参入の件が焦点化されていました。そうしたら、民間保育連盟も反対するわ。議員連盟があって、ここからも猛反対された。他方、検討委員会の人たちは、株式会社の参入に大賛成なわけ。私は、全く板挟み状態だった。だから、民間保育連盟の方たちをどうやって説得するか、私たちの考え方を理解してもらうには、どうしたらいいかに苦心した。切羽詰まって考えたのが、株式会社参入の制度導入

はします。だけど、本当に必要になるまでは実行のボタンは押しません。ボタンはいつ押すかという、新規保育園新設の募集の公募が2回連続で不調に終わった場合は、もうそれは致し方がない緊急事態なので、そのときに実行のボタンを押し、と。

松村 苦肉の策のようなものですね。

下田 そうですね。1年持ったかな。待機児童数がどんどん増えるんです。1900人くらいだったかな。もう無理だわ、民間保育連盟のメンバーだけでは、となつたのです。だって、保育園経営だって二つ目、三つ目、四つ目って無闇に保育園を作るのは怖いでしょ。そうすると、この状態でいつまでも株式会社の参入を止めていてもしょうがないなって思っていただけたんだと思う。いろんなことでこんがらがっていたものが、少し時間が経過して、みんな冷静になるでしょう、いろいろ考えて。でそれでね、何とかこの問題は通り過ぎることができました。



子ども青少年局長時代、保育園視察の時の様子  
(写真提供：本人)

松村 共働きが増えていくと想定される中でも、子ども青少年局としては、保育の受け皿とか保育の量を増やそうという考えだったのですか。

下田 そう。私が局に来る前からスタッフは考えていたと思う。だから、いろんな手段で、株式会社が入れるように画策していたんだと思うね。

下田 そのほかにも、いろんなことをやろうとしたの空家の市営住宅を使うとか、学校の空き教室を使う案も実現しなかったが、候補に挙がったり。

松村 学校の中の保育園ですか。

下田 空き教室や市営住宅を使うのはちょっと聞いた感じはいいアイデアのように見えるんだけど、なかなか本流にまでは発展しないですよ。でも、新たに参入してきた株式会社はかなり知恵があるので、例えばコンビニの跡地、空き店舗などを上手に居抜きで借りて。やっぱり知恵者はいるよね。

松村 でも、そうやって名古屋市でも民間企業が入って行って、ワーストではすぐなくなったんですか。

下田 待機児童ゼロになった。予算も付けてくれたしね。今、ずっと待機児童ゼロのはずですよ。

あと、もう一個、当時困ったのは、児童福祉センターの小児整形外科医が2年

ぐらい欠員になっちゃったの。医師ポストが埋まらないんです。

松村 そうなんですね。

下田 その医師がいないと機能障害のある子たちのいろんな医療的な指示ができないわけです。2年もいなくなっちゃって困ってね。何とかしてくれっていう話になったんだけど、どうしようもないんですよ。いろいろ聞いたら、結局、小児医師自体が少ないって。その中の整形外科医ということで、宝物を探すぐらいのつもりじゃないと常勤の医者は見つからないそうです。それでまずは、常勤ポストを非常勤ポストに変えて、持ち回りで個人病院を開業している先生たちで担当してもらおうとしたんです。それなら対応できるかもというアイデアをもらって、前代未聞、苦肉の策で、貴重な常勤ポストを非常勤ポストに切り替えたんです。それでも実際には埋めるのがなかなか難しい。

それで「なんかいい方法ないですか」と当時の病院局長に聞いたんです。そうしたら、名市大に寄付講座、1億か2億出せば講座が作れて、そこで小児整形外科医を集めれる。そうすると、非常勤ぐらいなら送ってくれるよと。

松村 そうなんですね。

下田 そうしているうちに、2億7千万円遺贈寄付してくれる方が現れたんです。息子さんもいい人で、「何に使いますか」って聞かれて、小児整形外科医を確保したいと答えたら「奇遇です、母親

も足が悪かったので、そうやって使ってもらえれば喜ぶと思う」といわれました。

松村 そんなことがあるんですね。その2億7千万円で寄付講座が設けられました。

下田 それも、なんか神様の采配を感じましたね。

松村 いや、すごいですね。

下田 本当に。できたばかりの小さい局だったので人も予算も、何にも足りなくてね。余裕がなかったですね、子ども青少年局は。でも、総務局も財政局も、他の局と同じようにやるわけ。予算の5パーセント削減。人員の5%削減。スライスするような普通の削り方していたら事業が成り立たなくなっちゃうから、抜本的に切り替えないと上手くいかないんです。自分の日記を調べたら、当時の名古屋市の「事務事業見直し額」の9割が子ども青少年局なの。ひどい話でしょ。

最後には保育料も値上げしようとしたんです。保育料の値上げは、市長は、本当に嫌がってね。だけど説得して、局には、もう金もないし。とにかくやらしてくださいって。予算提案したんだけど、議会で否決されちゃった。これはみっともなかった。

松村 はい、分かりました。

下田 あと、子どもコミッショナーっていうのとか、アドボケイトのことが少し

取組が足りなかった。当時もやっぱり議論になってただけど。今、子どもアドボカシーセンターNAGOYA と、子どもからの電話を聴くチャイルドラインあいちの理事なんですけど、今の問題意識に比べて、局長の時は、アドボケイトにも、子どもの権利条約のことも自分の中でちょっと抽象的だったな。今から思うと、新しいことに何もチャレンジしていなかったなっていう反省がありますね。

松村 でも子どもの、名古屋子どもの権利条約って、この頃はまだでしたっけ。

下田 子どもの権利条例は、既に作ってありました。

松村 あんまりその実効性とか政策、制度が具体的に。

下田 今は、子どもアドボカシーセンターNAGOYA が愛知県の児童相談所にアドボケイトに入っています。

松村 そうですか。

下田 アドボケイトが児童相談所に入って、子どもの声の聞き方を職員に指導しているんです。画期的でしょ。

松村 そうなんですね。

下田 児童相談所も、法律が改正されて子どもの意見を聞かなければならないし、事業に反映しなくてはならなくなったでしょ。ただ、アドボケイトなんて、急には正しいやり方が分からないので児

相も助かっていると思う。でも昔の児童相談所の雰囲気からすると、全くのNPOが一時保護所に入ってきて子どもの接し方に文句言うなんて考えられないことですけどね。

**松村** 話は変わりますが、現在または今後、子育ての社会化とかいわれていく中で、若い方だとか後進の方への、下田さんからのエールとかメッセージとかご要望などがあれば、お願いします。

**下田** 子ども青少年局長やらせてもらった後に、教育長もやらせてもらったんですよ。教育長になってからも、いじめで自殺しちゃった子がいたんです。そういうこともあって子どもたちの悩みをどうしたらいいんだろうなっていうのが退職してからもあって。で、チャイルドラインに、何か手伝えなかなって理事をさせてもらっています。アドボケイト名古屋のほうからも声が掛かって、それでそっちの理事もやっているんですけど、やっぱり子どもたちの声を聞いてそれを実現していくっていうのがとても新鮮ですね。自分がやっているときは、個々の子どもの声を聞くというよりは、大人が考えた子どものための政策を重点的にやっていく局だって思いながらやってたんですけど、今は子どもの声を聞いて、それにどう応えていくのか。それが、今、求められてるのかなって思っています。

**松村** 子どもの声を踏まえて、実際にそれを反映と。

**下田** 反映していくっていう。法律、この前改正されたんですけど、ああいうことが本当に求められていて。そうすると、見えてこなかったものがだんだん見えてくるのかと思うんですよね。

**松村** なるほど。

**下田** だから、当時は、ばたばただったんですけど、今、思うと、もうちょっとじっくりとやっていたほうがよかったかなって反省しています。

みんなにエールっていうのもなかなかなくてね。子ども青少年局のときは本当に職員たちが一生懸命で、もうやり過ぎぐらいの人たちばかりで、すごく楽しかったです。

**松村** ごめんなさい。私、さっき子ども青少年局で話、終わっちゃいましたが、その後、教育長時代の話をしてもらってもよろしいですか。教育長のときに子ども応援委員会ですか。

**下田** そう。

**松村** それはすごく大きな話なので、ちょっと教えてもらえますか、その辺りの。あれ、子ども応援委員会は、あれは河村市長さんとか、上から降りてきた感じですか。

**下田** あのね、いじめで1人亡くなっちゃったんです。またその子も中2で、南区の中学校なんだけど。そのときも大きな問題になって、第三者委員会ができて、いろんな改善策を作り始めた中に、

学校の先生だけではもう無理ではないかと。だから、学校の中に専門家を非常勤で入れて、先生たちを支援して、子どもたちを守っていこうと。実はそういう構想が前教育長の頃から少しずつ出ていた頃に、あの事件が起こったので、その検討を加速化しました。検討していく中で、市長のほうから、応援委員会の職員が教員と対等な立場になるように、中途半端な非常勤ではなくて、常勤化しろとか、組織の名称は「学校支援組織」でなくて、子どもに寄り添うかたちの「子ども応援委員会」にしろとか。そういう感じで今の新しい子ども応援委員会ができました。

**松村** その応援委員会ができたときの教育長が下田さん？

**下田** はい。

**松村** じゃあ、かなり大変なところもあったんじゃないですか。

**下田** それまで学校に入っている臨床心理師もみんな非常勤なんです。それで私たちが考えていたのは、非常勤でも週30時間の常設的な非常勤にした方がいいかなと考えていたんですけど、市長からは、思いもよらない完全な週38時間45分の常勤だと指示されたのです。

**松村** それ、もう。

**下田** そうすると職員の定数が必要です。中学校110校あるでしょう。臨床心理師とスクールケースワーカーとアドバ

イザー。1校に常勤を3人置くと330人必要なんです。330人の定数増ってべらぼうなんですよ。かと言って、市長が特別に定数を準備してくれるとは全く考えられませんでした。

**松村** なるほど。その子ども応援委員会の立ち上げ期の人員確保とかに、すごく汗をかかれたのですね。定員は準備できたけど、実際にその人たちを集めるのに難儀しませんでしたか。

**下田** 常勤対応は初めての試みなので、適材を集めるのは難しかったです。

**松村** 異質な学校に送る中での不和っていうのも多分あると思うんですけど、その辺りを教えてもらえますか。

**下田** 子ども応援委員会のことでは、どうやって常勤の専門職を集めるかが難題でした。専門職は既に仕事を持っていて非常勤なら兼務できるんですが、常勤となるとその仕事を辞めないといけません。でもそれよりも、たとえ適材を見つけるのは難しくても、私たちの感覚からいくと臨床心理士、それからソーシャルワーカー、ここまではきちんとスキルを持った専門職の中から見つけたいと思うんですよ。

**松村** はい。

**下田** しかし、市長の意向で、臨床心理士とかソーシャルワーカーというきちんとした専門職ではなくて、全部、普通の

市民、近所の商店街のおっちゃんみたいな人にして欲しいと言われたんです。

これは大慌てで、かなり必死になって市長を説得してスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーだけはきちんとした資格を持った専門職ということで何とか了解を得ました。が、その交渉の引き換え条件として、これらの専門職に加えて、スクールアドバイザーという形で、専門の資格を必要としない「普通の人」を採用する事になりました。

その3職種に警察OBを入れて、色々な紆余曲折を経て4職種で応援委員会の基本構造ができました。警察OBの方たちはスクールパトロールって名前が気に入っていました。

松村 そうでしたか。

下田 学校は、発達障害とかの対応で精一杯で手薄になっていたやんちゃな子どもの対応をスクールパトロールがしてくれたので、とても喜んでいました。想定外の副産物でした。

松村 そこから、増えていったんですね。

下田 最初は10校だったかな。今は、もう、110校全部になっていると思います。

松村 立ち上げのときからご覧になって、手応えだとか苦労とかそういうのはありますか。

下田 形が整えば、もっとボリュームが要ると思います。やっぱり先生たちだけでやるのは無理だと思うんですね。

松村 なるほどですね。

下田 だから、適切な専門職の助けが必要です。ただ、臨床心理士やソーシャルワーカーでもちょっと変わった人もいますのでね。

松村 そうかもしれないですね。

下田 応援委員会の4人中でちょっと変わった人がいるとそのチームの輪が乱れるんです。市長の要請で意図的に独立性をもたせた4人だけのチームなので影響が大きいんですね。

松村 そっか。人は確かにそろったかもしれないけど、その中のうまくチームワークとか難しいってことですね。



松村 予定の終了時間となりました。非常に有意義なインタビュー、ありがとう



ございました。今日お話を伺えなかった部分は、後日、お尋ねしたいと思います。

## ■第2回インタビュー

(2025年12月30日実施)

**松村** では、前回、私が聞きそびれてしまった母子保健システムの辺りについて、お話しいただけますでしょうか。

**下田** 母子保健システム自体は、保健所、健康福祉局が開発していたシステムで、保健所が主体となって入力するんですけど、母子の、健康診断をどういうふうを受けてきたかとか、それが入力されていくものなんですけど、その頃にいわれてたのが、やっぱりハイリスクな家庭は決められた1歳児半健診や3歳児健診を受けないんですよ。ちゃんと健診を受けている家庭は、割と安心できて。本来、受けるべき1歳児半とか3歳児の健康審査を受けてないと相当、危険なので、そういうハイリスク家庭もあぶり出されるシステムだということで、非常に注目をされていました。保健所が中心になって開発してつくってくれていたんですけど。

ただ、その頃はまだ、保健所と区役所が分離されていたんですよ。連携なんか、まだ必ずしもうまくいっていませんでした。その後、保健所が区役所に組み込まれましたので、そういう意味では、組織的には、その後に解決する部分もあるんですけど、区役所福祉部長の下に保健所が入りましたので。その頃はまだ分かれていましたが情報共有っていう意味

では、区役所も見えるようにしてもらっていたんです。区役所が分かった情報も入れるというようなこともあったんですけど。

ただ、このシステムはこのシステムでいいんですけど、情報共有っていうと、本当は児童相談所と区役所と保健所、もっと言うと、学校だとか保育園で、保育園だとか幼稚園。そういうのがつながると、リスク情報がつながると発見が早くなるんですよ。そのことを課題として思っていました。このときは一方で、児童相談所の中央と西児童相談所の連絡用の共有するシステムはあったんですよ。その頃、まだ区役所に児童相談所の職員置いてないので、両方とも不信感というか心配っていうか。法律でだいぶ解決されたと思いますけど、虐待については個人情報共有していいっていうのが。

だけど、なかなかね、ぎくしゃくしてたんですよ、個人情報共有していいのかどうか。個人情報保護っていうのが、すごく強くいわれ始めていた時代なので。今もいわれてますけど、本当に必要な業務上の情報共有さえ、いかなのじゃないか、みたいな。ちょっとおかしな時代だったんですけど。で、困ったなあって言ってたんですよ。それで、そのときに、中川区が16区の中でも一番ハイリスクな状態だったんですよ、児童虐待に関して。すごく危なくて、小さいインシデントだと、もうすごい数が出てたんです。もう他の区とは比べ物にならないくらい。

そこに結構、虐待対応のプロフェッショナルなメンバーが一番そろっていて。超人的な働きをする人がいて、その人が1

人で本当に中川区の児童虐待を抑えていたぐらい、24時間働いてた人がいたんですけど。その区で、情報共有のシステムをつくりたいって言い出したんです。それで、予算を付けましてね。情報共有システムなんていうと、本庁がつくって、それを区にやらせるっていうのが普通の考えでしたけど。このときは中川区がやりたいって言って、中川区にやってもらったんです。西部児童相談所は中川区にあるんですね。西部児童相談所と、それから区役所。区役所の担当と、それから、保育園、保健所が、情報を共有するシステムが出来上がったんです、2012年に。本当はその予算、付けたときは、全市に広げるっていう考え方でした。取りあえずは一番、困っている中川区で開発するけど、そのシステムを全市に広げるっていうことで予算要求をして、そういう答弁をしていました。私は広げるつもりで開発してもらって、いいものできたんですけど。その後、広げようと思うと、またそっちでお金が必要なんですよね。システムを合体するためのお金が。それが、その後、出なくなって。この前、あれってどうなったって、担当していた人に聞いたら、「あのままだ」って言っていました。今も。だから3システム併存。保健所を中心とした母子保健システム。それから、今は3つになった児童相談所間の情報共有システム。それから、中川区だけでやっている情報共有システム。それが3つ、私が局長だったときと同じ状態で残っているそうです。

本当は、くっつけるか統一するかする方がいいんですけど。ただ、区によって温度差はあるんですよね、あとは、通報数

の差とかね。でも、私のときも通報数がすごい勢いで伸びてたんですけど、今はもっと伸びてるので。本当は全区に広げるほうが多分いいんですけど。

局長もちょうど2年で異動、道半ばで終わらせたやつが結構あって。で、大きく反省しているのが、この情報共有システムを全市に広げるっていうのができなかったことと、それから、児童虐待のための職員を専門職にしようとしたんですけど、これはこの前もお話したんですけど、結局、総務局の反対にあって。頼みの綱の人事委員会も「総務局が反対するならなかなか無理だね」って言われて、できなかったんですけど。まあ、今ね、その後、だいぶ職員数は、児童の専門職、本当に100人増ぐらいいってると思うので、そろそろ、もう一度考えてもいいんじゃないかなっていう気はするんですけどね。その二つがちょっと心残りっていうかですね。

**松村** なるほどですね。ありがとうございます。局長時代に、ちょっと総務局とか、人事所管してるところの反対とか、同意が得られなかったっていうことで、その時代にすぐ職員が増えたわけではないんですね。

**下田** あ、違います。

**松村** 下田さん時代にそういう働き掛けとか、もっとそういうネットワークをつくってこう、職員を増やしてこうっていうことが、後に結実する礎というか、ルートになったっていう部分は大きいのではないかってふうに、今お話を伺って

思ったのですけれども、いかがですかね。現場の方から上がってきた思いというか、熱意も含めてですね。

**下田** あのと、本当にスタッフが一生懸命、アリバイ作りじゃなくて、本当に実現、いろんなことを実現しようとして。なおかつ、かなり網羅的にいろんな問題点、いろんな職員が全部に関わって。この前、見ていただいたようなマトリックス図がありましたよね。あの項目、全てに、こういう情熱をみんなかけてくれる人たちがいて。それがちょうど条例で、ああやって毎年報告されるので、それも引き継がれていることが、すごく心強いですね。人数も増やしてもらっているのを、報告書を見て、ちゃんとやってくれるなと思っていますので。そういうのがちょっと心強いなという感じがします。

**松村** ごめんなさい、あれですね。議員立法で作った条例でしたっけ。

**下田** そう。

**松村** あの条例自体が、ちょっと、すみません。今すぐ出てこないんですけど、あれも下田さん時代でしたっけ、でき上がったの。

**下田** あれはね、もう、対策を考え始めてすぐにみんなで条例を作らなあかんって言い出して、局内で検討してたんですよ。議員立法には、私たちの考えていた内容は全部、取り入れてもらっています。党派を越えて議員さんたちが一丸と

なって制定されたものと捉えています。そう意味でも、本当に画期的でした。

**松村** はい。ちょっと今、私も記憶を思い出しましたが、『名古屋市児童を虐待から守る条例』。平成25年2月、定例会で議員立法により成立し、25年の4月から施行された条例ですよ。

**下田** そうですね。

**松村** 施行されたのは退任後かもしれませんが、まさにそのやりとりというか、成案に向けて奮闘していたのは、下田さんではないでしょうか。すみません。この間もお伺いしてしまったかもしれませんが、名古屋市提出ではなくて、議員立法であることの意義だとか、そのことの良かった点、悪かった点とかってというのはどう考えればいいですか。

**下田** まず、画期的だということですね。議員さんが一丸となって賛同したことで、児童虐待防止の熱意が伝わるじゃないですか、議会の熱意が。

**松村** はい。

**下田** 議会の関与の仕方が、行政が作ったものを認めるというよりは、自分たちで作ってくれたので、議会の関与が非常に強くなるわけですよ。だから、毎年、議会に報告することは、市全体の義務だと考えられます。だからぴりっとしますよね。

松村 はい、なるほど。面倒くさいですとか言われませんか。

下田 はい。議会に報告する以上は、みんな内容をかなり精査すると思うんですよ。そうすると、やっぱり虐待の数が増えているのに応じて、ちゃんと職員数増加してるのかとか、きっと議会に報告する前には、かなり行政としてはチェックすると思います。

松村 分かりました。あと、私、この条例を一つのケースとして、すごく面白いなと思ったのが、他の政令指定都市でも虐待に限らず、特に近年ですね、子ども、子育て関係、少子化、虐待では、議員立法するケース、聞かなくはないのですけれども、結構、この平成、2013年だと、割と今日ほど子育て少子化とか、虐待がいわれていない中で議員立法を目指すというのは、もしかすると、先進的だとか、もしくは何らかの名古屋の、他の政令指定都市としては違う特殊性だとかそういうのもあったりするのかなと思ったりするんですが。その辺どう感じられますか。

下田 ちょっと、そう、多分ね、それどころじゃなかったもので、他都市との比較は考えることがないぐらい、何ていうか、のめり込んでたので、他都市とは比較をしませんね。

松村 じゃあ、それはもう典型的には中川区を一つの例として、本当にいろんな虐待っていうのが市の中で発生していたので、これに取り組んでいかなきゃなら

んという、そういう機運とかが醸成されていたので、もう。まずはそこをやらうっていう。

下田 2011年の事件がありましたよね。第三者委員会が立ち上がって、児童相談所の責任をずっと追及されていたので。それに名古屋市がどう立ち向かい、対応していくのかっていう、そういう時代でしたから。背景がもう、何としてもその児童虐待による死亡を二度と起こさないというその感覚は、局の中ではすごく強かったし、議会との関係も、ごく、緊密だったということだと思います。

松村 はい。例の2011年の、名東区の中2の男の子の事件を、やっぱり結構、名古屋市全体にセンセーショナルに報じられ、議員としてもこれは何とかしなきゃいけないし、行政としてもしなきゃいけないって、そういう空気感がすごく強かったってことですか。

下田 私の中ではもう一色でしたね、その頃は。

松村 そうですか。そこまでだったんですね、その事件が持った影響性っていうのは。

下田 はい。

松村 分かりました。

下田 で、この前も申し上げましたけど、児童相談所の責任だけにとどめるっていうのは思ってなかったです。やっぱ

り名古屋市が変わるべき。局、児童相談所も変えるんだけど、名古屋市自身が変わるべきだっていう発想なので。そこに議会も加わってくれるとなると、ありがたかったですね。

**松村** これ、下田さん自身の経験とか思いついていうところに少し寄せて話すと、自分が在任中にこういう非常に痛ましい事件、まあ、象徴的な事件があって、虐待に対する制度が整っていくっていつきの局長を経験されていたわけですよ。

**下田** ええ。

**松村** これは非常に貴重ともいえることだと思うんですけど、振り返ってみてどんな、まず迷いとか葛藤とか苦労があったんでしょうかね、このとき。第一報を聞いてから、動きだすまでですね。

**下田** 児童相談所ってすごい専門職だと思ってたので、アンタッチャブルってどうか、局長としても横から専門家でもない者があんまり口出ししたくない、出すべきではないんじゃないかなってというのが、事件が起こる前の私の頭の中でした。事件が起こり、第三者委員会でいろんなことが、問題点が分かってきて、児童相談所の苦しみというのか、足りなさとか、素人集団みたいな部分さえもあるということが分かってきて。これは児童相談所の責任もあるけど、やっぱり一番大きいのは、名古屋市の組織のバックアップが全く足りないっていう、その反省ですよ。だからもう、局を挙げてこの

問題に取り組むっていう、そういう、それをみんなスタッフが理解して、ついてきてくれましたね。本当にみんな必死でしたよね。担当部長も総務課長も、担当の課長もみんなそういう感じでした。

**松村** ええ。

**下田** マスコミも結構、厳しかったんですけど、ある日からマスコミが児童相談所の中をうろろろしているの「どうしたの」って聞いたら、「いや、オープンにしました」って。すごいことやるねって、私はびっくりしたんですけど。その代わり、マスコミが信用するようになったんですよ。児童相談所が何もかも見せるもんだから。

**松村** マスコミを中に入れてもらって、その実態をまず知ってもらってというところ。

**下田** そうしたら、マスコミのトーンが変わりましたね、その後。

**松村** そうですね。

**松村** この、人が足りない現状を広く社会に知ってもらう機会にもなったわけですね。

**下田** そうですね。

**松村** 全体としては市役所全体の定員は減っていったとは思いますが。子ども青少年局の人員、特に、今、おっしゃってくださった、その児童相談所の定

員は増えていったような方向なんですか。

下田 児童相談所は増えたと思います。

松村 なるほどですね。分かりました。でも、そしたら、本当に下田さん時代、先日お話ししたことも含めて、いろんなまた出来事というか、効果的な、また新しい取り組みとかが生まれたとしますけど。きょうお話ししたその母子保健と、特に児童虐待っていう点でも、佐合さんや石井さんの時代とはちょっとまた違った、一つ新しい動きが生まれたっていう印象を感じていますね。

下田 事件が起こったのが大きくて。潜在化していた問題が顕在化しましたね。このことは、もう何としても現場任せにせず、局全体で取り組むっていう気持ちでした。

松村 なるほどですね。でも、分かりました。そして本当に3代目の下田さんのときに、またその児童虐待とかが具体的な事件ってことをきっかけとしながらも、大きく転換をしていった時期っていう印象をすごい感じたところです。ありがとうございます。

下田 児童相談所は本当に大きく変わったと思います。みんな、本人たちがもう変わろうと思っていたからと思うんですよ。

松村 うん。もう、こういうことは繰り返さないようにしなければならぬって

う、そういう意識が強まり共有されていた。

松村 分かりました。本当にありがとうございました。母子保健、虐待などについて、本日はお話ししてくださいました。他にも話が尽きないのですが、このあたりで終わりにさせていただきます。

(了)

# 名古屋にプレーパークを立ち上げて

竹村万知子さん

(特定非営利活動法人 てんぱくプレーパークの会  
元代表)



<プロフィール>

## 竹村万知子さん

1947年東京生まれ。早稲田大学卒業後、東京都職員として保健所、福祉事務所に勤務。結婚して名古屋で子育ての中、チュールップ幼児教室、天白公園を考える会、天白おやこ劇場と出会い、こどもが育つことの面白さに目覚める。1997年、夫と死別し、子どもたちの手が離れたのと、期を同じくして天白公園の工事が進み始めたため、思い切って、1年でもいいからプレーパークをやってみようと、名古屋市との公園関係の方に相談した。場所について理解を得られたので、人件費のめどはつかないまま、当時羽根木プレーパークで1年間ボランティアをしていた青年に来てもらえることになり、1998年に、てんぱくプレーパーク開園にこぎつけた。2012年まで、てんぱくプレーパークの会の代表を務める。



<参考>てんぱくプレーパーク HP  
<https://tenpaku-playpark.net/>

インタビュー日時：2024年11月27日  
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 では、竹村さん、どうぞよろしくお願ひします。

竹村 よろしくお願ひします。

松村 まず、最初の質問というか、プロフィール的なところをお伺ひしたくてですね。差し支えない、言える範囲で結構ですので、竹村さんの生まれですとか、出身ですとか、もしくはプレーパークに出会うまでの歩み的なもので、お願ひします。

竹村 分かりました。私、生まれは東京で、世田谷区の羽根木という所で。羽根木プレーパークが今ある所は、私が子どもの頃は根津山とって、根津さんという人の持ち山でした。私はあんまり外遊びする子じゃなかったけど、でも、学校の宿題だとかなんかで虫を捕らなきゃいけないとかっていうと、そこに行ったりしました。大学出てからは、また世田谷で、福祉事務所と保健所と。保健所のほうが先で、4年間で、福祉事務所は本当に半年ぐらいなんですけれども、保健とか福祉とかには関心がありました。

それで、結婚することになって、突然。夫がそれまでは東京のほうで仕事してたのが、日福大に移ったので、それで私も付いて、天白のほうに住むことになりました。その頃は割合、天白も、ちょうど子どもが増えていくときで、家が次々と建って子どもが増えてくという。今ちょうど、その逆になってきてるんですけれども。それで、いろいろな活動してる方が多くて。私自身は天白生涯学習センターの講座とかで、子育てや公園



づくりなんかの講座を、奥田睦子さんたちが、企画してみえたのに参加しました。当時の社会教育主事も優秀で、いつ見てもロビーで住民の方と打ち合わせをしていました。それと、住宅の中で未就園の子どもたちと一緒に遊ばせたい。結局、狭い団地の部屋の中で子どもと一対一でいると、みんな煮詰まるというところから、ぜひ欲しいっていう声があった。砂場なんかでも、みんな遊んだりはしてたんですけども、やっぱり天気の悪い日もあるしってということで、集会室を借りて始めたら、そのまた先生に来ていただいた方が、すごいすてきな人というか。

**松村** その先生というのは、保育士さんとかってことですか。

**竹村** はい。元は幼稚園の先生だったんだか、保育園の先生だったかで、経験のたっぷりある人で、金城の幼児教育を出られて。だから、非常に自然の中で遊ぶこととか子どものやりたいと思うことを大事にするっていうところでは、もう本当に目からうろこっていう感じで。多分、こども NPO さんの人たちも同じ先生で、向こうはさらに、幼稚園なんか行かないでこのまま続けたいって、3 歳児、4 歳児、5 歳児と続けたから、もっと学んだと思うんですけど。私たちはみんな、それぞれ幼稚園に行ったり保育園に行ったりして。でも、2 年間とか、子ども 2 人いると 4 年間ぐらい、4 年間か 5 年間か、ずっと子どもが育つところを目の前で見せてもらって、すごいカルチャーショック

とすべきか、すごいことだなって思ったもんですから。



**松村** それは今お話伺ってた将来のプレーパークの、自由な子どものやりたいことを尊重することとも、ちょっと先の質問になっちゃうかもですけど、関係してそうなの。

**竹村** つながってきます。要するに、子どもが育つかっていうか、子どもがやりたいと思うことを第一にするっていうか。それと、自然の中でたっぷり遊ぶって。本当は 9 時から 12 時までの保育時間だったんだけど、子どもたちがどこどこに行こうとか言うと、そのまま一緒に行っちゃって。それこそ真冬の、1 月の 25 日かなんかの小雪がちらつくような日に、「東山動物園に行きたい」って子どもが言ったっていうんで、一緒に付いてって、みんな。すごいもんだなと思ってね。

でも、そのとき見てたら、やっぱり 3 歳、4 歳の子、3 歳児だからもうその頃 4 歳になってるんですけど、その辺の子たちは半袖で全然平気だし。逆に 1 歳ぐらいの、うちの子はちょうど下の子が 2 歳

前ぐらいで、一緒に連れて歩いてたんだ。母子のグループをつくって。それこそ、寒いと、もう、わあわあ泣いててね。地下鉄の階段、最後、帰るとき、下りて、風が来なくなったら、ぱっと泣きやんでね。すごいなと思って。これだけ子どもって、1歳、2歳って、みんな同じように思って、2、3歳の違いなんてそんなに思ってなかったけど、生活の仕方によってこれだけ違うんだなと思ってね。

**松村** 竹村さん自身も今お話くださった先生たちの取り組みとかに共感するところがあって、そういうところを探していたら、たまたまそういう先生に出会ったって感じですか。

**竹村** 多分、私が選んだわけじゃないんだけど、もうちょっと上の世代の人で選んでくれた人がいて。いい先生がいるっていうんで呼んでくれたんだと思いますけれども。本当に、大人だったら「順番、順番」って言って止めるようなところを。それこそ、集会室の折り畳みのテーブルかなんかを立てて滑り台にしたような所に、子どもたちが、わっと寄ってきて、並んでる子もいれば横入りする子もいるんだけど。親が慌てて止めようとしたら、「並んでる子、何にも言っていないよ」って言われて。「だから、親がそんなに先回りするんじゃない」って言われてね。

**松村** 本当にそこでは子どもが主役というか、子どもがやりたいことだとか、子どもの自由な気持ちとかを尊重しようっ

ていう、そういう保育方針があるんですか。

**竹村** そうです。それはもう徹底してました。その代わり、割と、やるべきことはきちんとね。毎日やってると、子どもたちは大きい子を見て、自然にまねしてっていう感じで。つるしている洗濯挟みに、ハンカチやタオルを掛けるとか、お弁当を出したりとかっていうのを、いちいち言われなくても割と流れに沿って、どんどん子どもたち、できていくようになるんで、すごいもんだなと思ってね。大人がいると何でも口で言って聞かせようと思うから、すごいうっとうしくなるんだけど、子どもたちはちゃんと、ちょっと大きい子がいると、すごく何でもまねしてね。だから、最初3歳の子を入れてたお母さんたちが、下の子を置いてくわけにもいかないから付いて送ってくると、そういうのをどんどん子どもがまねしてるのを見て、「こういうのいいね」って言って。「親も付いてくから一緒に連れてってください」って言って、ついていったんですけれどね。「どこまでついてくるかは、自分たちで判断してね」って言われましたが。

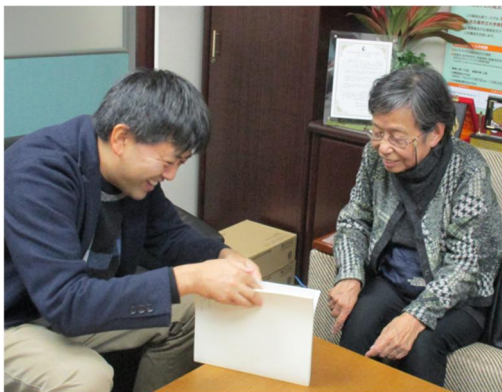
**松村** それは竹村さんのお子さんが保育園の年齢に。

**竹村** 上がる前ですね。だから、3歳のときまでですね。3歳じゃなくて、4歳になるまでですね。4月に4歳になったところまで行ってたんですが、その後はうちは保育園に入って。めばえ保育園って、これもいい保育園だったんですけれども。

でも、その時期は私も子どもがだんだん手が離れたなっていう感じで、それから先のことをいろいろ考えて。

その頃に奥田さんやなんかと、生涯学習センターの講座やなんかで知り合っ  
て。奥田さんの住んでみえた場所が公園になるというので、奥田さんが、公園になるんだったら、せっかくのいい環境を子どもたちの遊び場として残したいということで。その運動が『おーい天白公園』なんです。その冊子なんですけれども。

**松村** こちらが最初のところなんですかね。



**竹村** そうですね。まだ、要するに、公園になってない。ただ、ちょうど1982年に名古屋市が公園の計画を最初に出したんですけれども、その後バブルに入ったのかな、土地の買収が進まなくて、長いこと、10年ぐらい、公園予定地としてそのまま放ってあったんです。こんな状態だったんですけれども、どういう公園にしたいかっていうのは何回もワークショップをしたり、地図を描いたり、いろいろなことをやって。そこで集まった人たちの中に、白石公二さんっていう。これ

は造形教育やなんかをしてみえて、雑木林研究会にも入って、あと、金城幼稚園の園庭の整備だとか、いろんなことを手掛けた人で。子どもと自然というところが共通の、そういう公園にしたいねっていうことで。その3人がずっと、天白公園を考える会から、天白公園をつくる会にしようとかいってやってきたんですけれども。

**松村** 確認なんですけれども、この公園自体は市のものですよ。

**竹村** そうです。

**松村** この場所を公園にするに当たって、市民側というか、そういう人たちが自分たちの考えを、団体としてまとめたのですね。

**竹村** 提言もしました。それこそ、IPAっていう子どもの遊ぶ権利のための国際的な団体NGOやなんかの人にも、日本で集会か総会かなんかやったときに一緒に来てもらって、見てもらって。この公園をどうしたらいいかという、この土地をどんな公園にしたらいいかという。

**松村** 竹村さんがこの市民団体っていうんですか、団体に加入されたのは、いつ頃ですか。

**松村** ちょうど1984年ぐらいから。

**竹村** ただ、この頃はまだ下の子が2歳になるかならないかぐらいだったので、夜の会議には出られないしっていう感じ

で、出られる範囲で参加していたっていう感じで。

**松村** 竹村さんの、この考える会に入った思いや、こういう働き掛けをしようっていう動機とか経緯というのはどこにあるんですか。

**竹村** 一つは、私自身はすごい子どもの頃はインドア派で、本ばかり読んでる子だったんですけれども。中学、高校のときに少し山岳部やなんか、それもあんまり体力もなくて付いていけないことも多かったんですけども、そこで自然とか考えたのと。あと、大学生のときに、早稲田だったんですけれども、岩手県の小繋という所で、入会権の問題で裁判闘争なんかしてるのを法社会学の先生やなんか支援してて。卒業生がそっちに住んだりしてやっていたので、夏休みに時々、1週間、夏休みとゴールデンウィークかな、私も行ったのは2、3回なんですけれども、そういうところで。つくづく私も体力がないのと、何も知らないのと、自然とか何も知らないことに気が付いたけど。でも、すごく刺激になったっていうか。そういうものが、人間にとってすごく大切なものなのに、都市の生活では切り離されてしまっている。

**松村** 市のほうにそういう提言だとかをするということは、当初もし行政だけでやっていたら、子どもたちのための、そういう緑がある場所が、つくられていなかったかもしれないね。

**竹村** そうですね。今の原っぱになってる辺に野球場ができて、その向こうにテニスコートができてっていうふうな、スポーツ公園のイメージだったんですね、82年に出されたのが。それを普通だとなかなか市民までよく知らないんだけど、奥田さんは地権者だったので、そういう説明を聞いて、これではいけないと思って。

**松村** 野球場とか、ある種、人工的ともいえるものではなくて、そのままの緑とかを生かしたプレーパークとかをつくりたかったっていうことなんですか。

**竹村** 奥田さん自身はその場所で子どもを育ててたもんですから。

**松村** 天白区で？

**竹村** 天白区どころか、今の公園の中です。プレーパークの一段上がった所、そこで育てて。それで、子どもたちが「お母さん、来て。今、葉っぱに露がたまって、すごくきれいだよ」って言って、呼ばれたりしてね。そういう子どもたちの感性みたいなのにすごく感動して、そういうのを残したいなというふうに思ったとおっしゃっていました。

**松村** 天白区自体は、元来、天白村というのがあったようですね。1955年に名古屋市に編入されてからは、名古屋市のベッドタウンとして、急激に人口が増えて再開発が進んだようです。その中で、緑を守って行こうという動きですか。

竹村 それこそ、私たちのとこの幼児教室がよく遊びに行ってたのは、平針。今、ここも農業センターなんで、農業センターの所は残ってるんですけども、その裏手あたりに、いつも崖滑りしてた所がありました。相生山の辺にもあって、八事裏山のほうにもあってっていう感じでね。そういう所にみんなで遊びに、よく行ったりしたもんで。これは公園になった所は残るけど、その周りはまだ全部なくなるなっていうのは感じたので、公園の中だけでもそういう所を残したいし、残せるなどは思ったんですよ。羽根木公園もよく知ってたから。羽根木プレーパークができて、元の、うっそうとした林の感じはなくなったんだけど、でも、その木にいろんなロープを掛けたりなんかして遊んだりする公園になった。

松村 私はまだ2年前に名古屋に来たばかりで、あんまり理解できていなくて恐縮なんですけど、羽根木パークというのは天白プレーパークとは全く別なんです。

竹村 そうです。別っていうか、モデルにしたんですけどね。この頃はまだ世田谷の羽根木ぐらいしかプレーパークっていうところはなくて。まあ、プレーパークができたのは私がこっちに来てから後だったんで、知らなかったんですけど。いとこやなんかが行ってるよっていう話だったんで、資料を送ってもらったりはしたんですけども。

松村 じゃあ、世田谷に昔、お住まいで、学生時代も早稲田で東京とかにいるときから、もう。

竹村 羽根木のプレーパークができたのは1972~1973年頃だと思うんで。

松村 ただ、存在は知っていて、ここをモデルにしたということですか。

竹村 そうですね。もうこの頃から羽根木には視察がものすごく全国から来てました。

松村 そんな有名な場所だったんですね。

竹村 16ミリの映画やなんかも撮った人がいたりしてね。知られてはいたんですが、知ってる人には。

松村 そこを一つモデルにしてやっていこうっていうのは、奥田さんや竹村さんたちの、グループの共通の思いとしてあったわけですか。

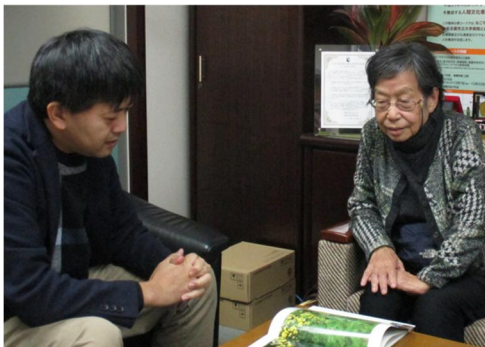
竹村 そういう感じですね。共通のイメージとしては、そういう感じ。それが、いつ来て、いつ帰ってもいいっていうこと、常設でということ。あと、子どもがやってみたいことを自分の手で実現できるっていうことと。そういうことを大事にしたいっていうことなんですよね。本当に子どもの日常の遊び場として、いつでも誰でも、子どもだけで来られるっていう場所。もちろんちょっと離れてる人は子どもだけでは来れないし、乳幼児っ

ていうか、あんまりちっちゃい子は一人では来られないから、お母さんと一緒になるんだけど。テーマパークが「ハレ」の遊びとすれば、プレーパークは「ケ」の遊び場なんです。

**松村** 時代的には、この80年代って、まさに再開発だとかってことがどんどん進む一方で、お母さんたちだとか、市民活動とか、ちょっとそれに反対の声も全国各地で上がっていた時代ですよ。

**竹村** そうですね。実際に遊んでいた所が、開発されて、なくなったとかね。でも、そうは言っても、他人の私有地は何ともならないけれども、せめて公園とかにでも造りたいねって。ただ、まだこの時期は本当に視察にはいっぱい来るけども、実際、次が動かないでいたんだけど。その後、川崎だとか富士とか仙台とか、それぞれに、種はまかれていったっていう感じですね。

**松村** 全国各地でプレーパーク的なものを造ろうとか、緑を大切にとか、子どもが本当にしたいことをさせようという声が強まったその当時に、各団体間でのネットワークとか協働っていうのはあったんですか。



**竹村** 最初の頃は、IPA っていう国際組織の日本支部の中に「冒険遊び場情報室」というのができて、その IPA の最初の日本支部長が、羽根木を始められた大村璋子さんという方で、2代目の支部長が奥田さんだったんですけどね。でも、もう今は「NPO 全国冒険遊び場協会」として、ずっと続いています。

**松村** IPA っていうのが国際レベルでの、プレーパークとか緑の中での子育てとかを提言してるネットワーク。

**竹村** ていうか、最初は、IPA は国際プレーグラウンド協会だったのかな。それで、プレーパークの最初は、デンマークのエンドラップの冒険遊び場っていう、戦後すぐの頃、廃材遊び場で、子どもたちがいきいき遊ぶのを見た、イギリスのアレン夫人が紹介し、その後子どもの権利条約の制定もあって、「遊ぶ権利のための協会」と改名しました。

**松村** わかりました。

**竹村** ヨーロッパの冒険遊びを見て、大村夫妻が、IPA の日本支部というのを立ち上げられたと理解しています。

**松村** IPA については、後でネットとかでも調べてみますけれども。じゃあ、その精神を体現したというか、そこに共鳴する形で。

竹村 日本で非常に発達したみたいですけどね。日本の子どもたちや、子育ての問題点に応えるものだったのかな。

松村 日本の中でも、こういう全国各地でプレーパークとかを推進されていらっしゃる方で、ネットワークづくりとか、横のつながりだとか、意見交換をしているケースは。

竹村 30年ぐらい前かな、今から。多分、全国集会を開いて、急速に広がったんだけど。ただ、常設っていうのか、週4回以上開くというのはなかなか難しく。行政からの何らかの支援がないと。羽根木では、運営は住民、土地と人件費は行政という風にできたときからしていましたが、うちは見切り発車で突っ走ったもので、交渉力不足で。

松村 補助金とかそういうことですか。

竹村 そういことですね。プレーワーカーの人件費です。だから、そういうシステムができないと続かない所が多いのかな。

松村 すぐにNPO法人としてスタートしたんですか。

竹村 いえ、98年にプレーパークができたんですけども、その前は天白公園を考える会とか天白公園をつくる会という形で、学習したり提言したり。

松村 NPOができる前ですね。

竹村 そうです。NPOはこの段階ではまだできてなくて、98年では。2019年になって、やっと法人格を取得したんです。

松村 任意団体で、法人格はなかったってことで。

竹村 そうなんです。事務仕事が増えるから、とて。ちょっとやめとこうということで。1998年はちょうどNPOが次々できてた年なんですけどね。何しろ「とりあえず1年やってみよう」と始めたので。

松村 てんばくプレーパークさんは、任意団体として、98年にできて。そのとき竹村さんはどういったお立場で。

竹村 そのとき私が代表で、とにかくもう言い出しっぺだからって感じで。できるだけ現場にいようと思って。何が起きるのか、何も起こらないのか、自分の目で見たいと思って。

松村 それで、奥田さんとか、白石さんとか。あと、全国とかと連携しながらってことで。

竹村 全国はまだ、その頃はIPAを中心になんていう感じだった時代なんで。でも、最初の冒険遊び場全国集会、開かれたのが2000年頃だったかもしれないですね。

松村 このインタビューの趣旨である、その当時の思いとか葛藤とかっていうお

話で言うと、公園の中でそういう場所をつくりたいっていうのが、まず、思い。

**竹村** それも常設でっていう。要するに、多いのは週1回とか、月1回とかだったら誰でも始められるんですが、それだと、それで始めた人の子どもが大きくなったら、自然と関心も少しずつ移っていき、それがうまく引き継がれることが難しいんですよ。だけれども、とにかく常設でプレーワーカーがいていたら、何かしらっていうか、そこで人が育っていかないとしょうがないかなというので、それで無理して始めたんですけれど。

**松村** 基本的なところで恐縮ですが、プレーワーカーって、どんなことをするんですか。

**竹村** 一番のプレーワーカーの仕事は、毎日っていうても、われわれ、せいぜい週4日しかできないんですけれども、月に20日ぐらいがせいぜいですが、とにかく、その場にいつでもいる人なんです。子どもたちが来て、本当に命に関わるような危険があるときは対応するし、子どもがけがしたりすれば、親に連絡したり、救急車を呼んだり、病院に連れてったり、そういうことはするんですけれど。それと、あと、子どもが遊びたいとなるような雰囲気をつくるっていうことが仕事なんですね。

本当は若い子で、わあっと、まだ本人も子どもの気分が抜けないような未熟さもあって、熱量もあってっていう子がいいと最初は思ったんですけれども。それ

は確かなんで。誰か大人が常に出られる状態でありさえすれば、それでもやっっていけるんじゃないかという、プレーワーカーを1人で、取りあえず1年間やってみようかっていうことで始めちゃったんですけれどもね。でも、本当はプレーワーカーが2人以上いないと、つまり、大人が常に出てるっていうのはかなり大変なので。

私は、2、3年はずっといようかなとは思っていたんだけど、開園するときにはね。だけど、それでも、私でも、病気の時もあれば、気が乗らないときもあるかもしれない。あるいは、どっかに遊びに行きたかったりするかもしれない。そういうときに出てくれるっていうか、そういう大人は何人が確保しないと始められないなということで、世話人さんという形で。それでも、本当は土日、空けたいんだけど、土日を全部空けるのは、子どものいるお母さんにとってはちょっとつらいので。家族でどっか出掛けたいときだってあるし。それで、あんまり無理のないようにというので、平日4日間の開催に、土日は月1回ぐらいとかいうふうな。それも結構いろんな状態で変わってはいったりするんですけれど。柔軟といえば柔軟、いいかげんといえいいかげんな感じでやってたんです。

最初の頃はプレーリーダーって言ってたんです。羽根木でもプレーリーダーだったんです。でも、だんだんとみんなが、リーダーっていうとレクリエーションリーダーみたいなイメージを思い浮かべちゃうし、どうなのかなっていうので、だんだんとプレーワーカーを使う所



が増えたんですけど。うちは別にプレーリーダーでもいいんじゃないという感じで、そのままプレーリーダーって言うってたんだけど。あるときに、その時のプレーリーダーの人が、他の人たちはみんな、子どもからはニックネームでっていうか、それも子どもが付ける場合もあるし、本人が「こう呼んで」って言う場合もあるんだけど。その人の場合は年齢もちょっと上だったし、プレーリーダーと呼んでほしかったのか。自分の呼んでほしい名前っていうのを言わないで、勝手に名前付けられたら、それも気に入らなかったみたいで。どうもお母さんたちにリーダーと呼ばせてみたいなんです、それはちょっとまずいかもしれないなっていう感じになって、うちもプレーワーカーにしたんですけどね、そのときから。

**松村** 最初の質問として、竹村さんのこれまでの歩みですとか、まず、これが立ち上がるまでの思っという質問は取りあえずできましたけど。一回、休憩します？ どうですか。

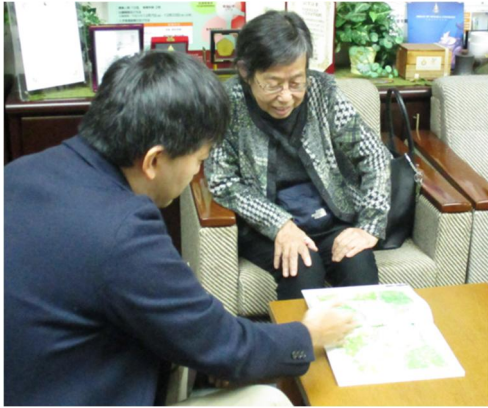
**竹村** そうですね。どっちでもいいんですけど。

**松村** じゃあ、もう一間、大丈夫ですかね。このまま続けさせてもらいますけれども。実際にスタートしたプレーパークですけども、素朴な疑問として、子どもたちって普段、学校があるわけじゃないですか。週4日とかっていうのは、放課後なのか。つまり、質問の趣旨としては、プレーパークという場所がどうい

場所なのかっていうことを。私の不勉強もあって、はっきりとしたイメージが、まだ浮かばなくて。その意味合いとかも、時代によって変わってきているのであれば、それも踏まえて、ちょっとお話しただいてもよろしいですか。

**竹村** 一つには、始めてみたら、プレーパークっていうのは小学生の遊び場というふうに関わりから受け止められて。しかも、まだ今みたいに公園として整備される前だったから、山の中に怪しい人がぼつんといる。小屋は建ててもらったんだけども、なかなか来なくて。それでも、小学生が2、3人で来て、気に入ったらクラスの子をみんな連れてきたりとか、そういうのはたまにあったりするんですけど。それこそ雨が降ると、3日ぐらい誰も来ないねっていう日もあったりしてね。3日目ぐらいで、こっちももう、「これできょうも来なかったら、明日また雨だったら休もうか」って言ってたら、その日になって常連の子が数人来てね。やっぱり子どものほうも雨が続いて飽きちゃってたみたいで、なるほどと思ってね。

**松村** その場に来たら、鬼ごっことかなんかする感じですか。すみません、全然イメージがなくて。



**竹村** 鬼ごっこは自然に始まったのかな。プレーワーカーによっても、学生時代、小学生と一緒に遊ぶサークルに入っていて、小学校の先生になりたいっていう希望で、でも、試験に落ちちゃったから、1年間やるっていうんで来たんだけど、結局3年間やってたんだけど。その人なんかは子どもも誘いやすいのか、「鬼ご、しよう」って言ってね。それが遊具の上を走ったり、「山おにご」といって山の中を走りまわってすり傷だらけになったり。われわれから見るとすごいと思うような遊び方してたけれども、鬼ごっこもするし。

それから、最初のときのプレーリーダーなんかは工作をしたりするのが好きだったから、自分で、他の人が、子どもたちが何をしよう、太鼓かなんかを作るんだって言って。大きな丸太の太いのが残ってたんで、切った輪切りにしたのがあったのを、これを太鼓にするって言って、上で炭を燃して、時間が長くなって作ったね。もうちょっと細かい木工みたいなのをやったりして、マイペースで割と遊んで。子どもたちは子どもたちで、それはそれで時々ちょっかいかけてたりしながら、子どもたち同士で遊んだり。いろんな道具があったりするか

ら、火もたけるしっていうこともあって、土も掘れるしっていうことで。

ただ、最初は子どもはみんな、そんなことやっていいかどうか分かんないから遠慮してるけど、だんだん、みんなやっていると、どんどん遊びは広がって。だから、最初の1年間はかなりプレーワーカーの人もつらかったと思いますけどね。子どもが、わあーと遊んでる状態じゃないから。

**松村** その場には遊具とか、この写真にあるような火をおこす何かだとか、いろいろあるんですか。

**竹村** 炉は作ってあって。コンクリートブロックやレンガを積むだけなんですけどね。だんだん、そうしたら、下がどんどん土が焼けてきちゃうから、レンガを下にも敷こうとかね。そういうのもだんだんとできて。それから、ノコギリだとか、くぎだとかがあって。金槌とかね。そういうのを使って遊び始める子も出てくるし。あと、シャベル、スコップもあったりするから、穴を掘ったりとか、だんだんとは広がってきたんですけど。最初の1、2年は、最初の1年目は特に、みんな何をしたらいいんだか分からないというところはあったんですけどね。

あと、要するに、日中、子ども、学校に行ってるわけですけど、就園前の子どもは暇なわけなんで。それで、最初は「森のひろば」にしたんだっけ、「森は友だち」っていう名前にしたのかな。それは生涯学習センターかなんかを通じて、最初は募集をかけたんだけど、その後はロコミやプレーパークの張り紙

で募集をして。要は、集まって、おやつを作って食べるというのがメインで、あとは勝手に遊んでってという感じで。それこそ、小さい子だと何してでも遊べるし。感想のアンケートで印象的だったのは、“「おやつ」（昼ごはんになる）が楽しみ”、“自然の中で食べたり遊んだりするのが新鮮”と並んで、「ここでは子どもにダメって言わないなくていい」が上位だったこと。

**松村** ここで、プレーワーカーはコミュニティーワーカーでもある、人と人をつなぐって言う、この辺を教えていただけますか。

**竹村** 教えていただけるっていうほどのあれじゃないけど、やっていてすごく思うのは、こうやって遊び場をつくってお母さんたちが集まると、だんだんとコミュニティーができてくるんですよ。ね、その中で。それもあつし、近所の公園を散歩してるおじいさんや、イヌを連れて散歩してるおじいさんが、集まってというほどじゃなく、1人ずつやってきて、おしゃべりして、お茶飲んで行ったりすることもあつて。小学生や中学生も来るし、いろんな世代の人が集まれる場所として。ここにも誰かが書いていたけれども、プレーパークの良さについて高校生だったかが書いてたのが、いろんな人に会える、非常にいろんな人がいるって言うことを言ってね。結局、それをつないでるのはプレーワーカー。いつもいる人なんですよ。

**松村** プレーワーカーっていうのは、本当に純粹に、目の前の子どもと遊んだりするだけではなくて、プレーパークっていう場にいらっしやつた、様々な方々をつないでいたり、その架け橋になったりするような、そういう役割も担っているってことですか。

**竹村** そういうことです。公園っていうのは実はいろんな人がいて。本当に困っちゃう人もいるんですけどね。うちなんかでも、小屋を3回、荒らされて、最後は火をつけられたんでね。でも、困ってる人やいろんな人を、退屈してる人も含めて。中には怒鳴っていく人もいるし。

**松村** 第一義的には、自分のイメージでは子どもです。子どもが来るんだっていうイメージは、それはあると思うんですけど。

**竹村** それはもう中心なんですけれども。

**松村** それ以外の大人や高齢者とかもその場に来るんですか。そこら辺、非常に興味があるので。一体、そういう人たちがどういう経緯とか目的で、その場に集まって来るんですか。

**竹村** それはすごくいろいろなんです。要するに、午前中やなんかで特に何もなくて暇な時間なんかには、プレーワーカーいれば、散歩してるおじいさんの中には話してくる人もいるし。だんだんこっちも名前も覚えて、イヌの名前も覚え

て、ゲンキのおじいさんとか。イヌの名前がゲンキで。中には、それで、ここをもうちょっと切ってやろうとか、手入れしてくれたりする人もいるし。掃除してくれたり、草刈ってくれたり、落ち葉掃いてくれたり、そういう人もいるし。中には、確かに、子どもが投げた泥団子かなんかの中に石が入ってて、眼鏡が傷ついたって言って苦情を言われたこともあるし。いろんなことがありますけどね。

**松村** プレーパークっていうのは、子ども、親子連れしか入っちゃいけませんよっていう場所ではなくて、いろんな人たちが、そこでいろんな人たちを呼び込んだりだとか、その中で交流とかが生まれたりする場でもあるのですか。

**竹村** そんなに積極的に呼び込むっていう感じとも違うかもしれないですけど。公園というのは、通り過ぎる人も含め、多くの人が利用するところなので。

**松村** 自然に。

**竹村** 来る者、拒まずだし。

**松村** そこら辺は、竹村さんの最初のきっかけとしては、自分の子どもの経験だとか保育士さんの経験から、緑の中で育まれる子どもたちっていうのがまずあったと思うんですけど。そういう地域の中での交流の場とかっていうことも、徐々に意識されるようになった感じですか。

**竹村** それは奥田さんなんかむしろ非常にいろんな勉強された方なんで、子ども

もを1人育てるには一つ村がいるっていうふうにおっしゃって。どっかのヨーロッパのほうの格言かなんかかもしれないですけど。私も出典はよく覚えてないけど。それはそうだなと思ってね。最初から羽根木も多分、羽根木はうちより20年ぐらい早く始めてるから、ずっと先に進んでたんで。それこそ近隣とのトラブルももちろんあるけれども、その中で非常に面白い出会いもあったりするみたいで。

**松村** そういうところは面白いですね。子どもが一人ひとり育つ上で、いろんな大人との交流とかが必要だっていうか。

**竹村** いろんな世代の人が。

**松村** さっき言ったように、多分、天白区の辺りは、戦後の再開発で、人口が急激に増えた地域でもあると思うんですけど。

**竹村** そうです、天白区は来年50周年になります。

**松村** その中で、これは私の憶測ですけど、もしかすると、かつてはあったかもしれない地域のコミュニティーだとか、地域の中で、一人ひとりの子どもを、いろんな大人が支えたりとかしていたのが、ちょっとずつ崩壊というか、そういうのが衰退していく中で、こういう場が必要となってきたっていうところもあったりするんですか。

竹村 古い農村の絆はあったとは思うんです。お祭りやなんかがあった時、そういう所には、餅まきするって言ったら地域の人もみんな来るんだけど。準備するのは地元の人で大変そうですが。ただ、本当に新しく入ってきた人たちは、最初のうちは皆さん、お友達を求めて。それが文庫の活動になったり、自主保育や幼児教室みたいな形になったりしたんだと思うんですけど。

松村 竹村さん自身も結婚されてから名古屋になってことだったので、特に天白区は、どちらかという若い子育て世代が、外から入ってきてた人が多分いたと思うので。必ずしも名古屋に地縁、血縁とか、友だちとかがない方たちも、ここで出会って交流とかしてたってことですか。

竹村 そうですね。今でも新しく入ってこられる方は、よそから来た方も多いですからね。

松村 そうすると、プレーパークが、全国各地に数ある中でも、名古屋の天白区って、再開発でいろんな所から入ってくる人たちの中でこそその意味合いみたいなものもありそうな感じですかね。

竹村 でも、どこも多かれ少なかれ、そういうところはあるような気がします。横浜あたりでもそうだし、東京の世田谷でもね。まだ、あの頃は、家が建ったりしてた時代だとは思いますが。

松村 どんどん人口が流入して、どんどん新しい新築とかアパートとかに人が入っていく中での、新しい子どもたちとか地域住民の交流の場みたいな、そういう側面もあったってことですか。

竹村 そうだと思います、多分。実は最近、ブレイディみかこさんっていう人が書いた小説で、『リスペクト』っていうのがあるんですけど。あれで、お母さんたちが、あの場合は家を占拠する。家を追い出されてなんですけど。集まっているいろいろやっていくうちに、いろんな人につながっていくっていう。そこが似たところがあって。私はあの本を読んで、プレーパークと近いものを感じるなって思ったんですけどね。もちろん、要求も違うし、展開も違うけれども、その中で、本当におじいさんたちで、いろんな技術を持っていて、いろんなことできるんだけど、生かされてなかったような人たちが生き生きとして働くところやなんかはすごく、いいところだなと思ってね。

松村 プレーパークでの文脈で言うと、地域の中で住んでて、もう引退とかしたおじいさんとかで、例えば、物が作ったりするのが得意とかの人たちが、ちょっと。

竹村 そういう人は結構います。みんな、空いている時に言葉を交わしたのがきっかけで。

松村 その人にとっても、自分を発揮っていうかね。

竹村 そうですね。こま回しだとかね。おじいさんよりも、もうちょっと若い世代、20～30代の人の方が、こま回して練習したりすると、すごくうまくなって、みんなが、わあー、すごいっていう感じになってね。

松村 そうすると、本当に80年代、90年代、天白区の辺りが急速に発展していく中での、新しい地域のつながりとか交流の場になっていたんですね、プレーパークが。

竹村 そうだと思います。

松村 プレーパークが、子どもの居場所になるという感じもあるんでしょうか。

竹村 そうですね、やっぱり、家庭にも学校にも居場所がない子どもたちというのは、多いんですよ。その全ては来ないとは思いますが、外に出て、近くに天白公園がある子やなんかは遊びに来る子は結構多くて。実は最初の頃、羽根木やなんかでは、中学生やんかがすごい大勢で、くぎ刺しなんかして遊んでるのを見てね。そのときに中に一緒に入ってた子が、プレーワーカーになって来てくれたの。最初、初代のね。呼んで、来ていただいたんですけども。そのときはボランティアで、V365っていう、1年間ボランティアがその頃はまだあって。つぶれちゃったんですけどね。それで来てた子が、それが終わって予定がないっていうから、じゃあ、来てくださ

いって言って、お願いして来ていただいたんですけども。

そのときには、一緒に遊んでる中学生のこと、特には何とも思わなくて、ただ、中学生がこういうふうに遊んでるといいなあと思っただけなんですけどね。しばらくして、小学生で来てた子たちが、3、4年して中学生になったりして、相変わらず来てくれる子どもってのは、結構、障害があったり、家庭の事情があったり。障害も、重い障害だとちょっと無理なんですけど、軽い障害の子が。全部じゃないですけど。「最初に思ってた中学生のイメージと違うわ」って言ったら、そのときのプレーワーカーが「それは間違っただけです」って言われたけど。いろんな子がいるし。逆に、外に居場所があって、外でしなきゃいけないことがいっぱいある子は、なかなか遊びに来れなくなるけれども、そうじゃない子が遊びに来てくれるのかなというのは感じましたね。

松村 今の、外とおっしゃるのは、プレーパーク以外に。

竹村 以外の場所ですね。例えば、学校で成績が良くて受験をしなきゃいけないとか。そういう子とかは、なかなか来る暇がないですよ。

松村 そうすると、学校とか塾、習い事とか、部活とかに属していないような人たち。

竹村 のほうが来やすいみたいですね、中学生ぐらい。

松村　すると、そういった子どもたちの受け皿って言ったらちょっと変かもしれないですけど、受け皿っていうか、居場所になっていたところがある。

竹村　それはあると思います。

松村　そこは意図されてた？

竹村　最初は、そこまでは意図はしていなかったんですけど。ただ、最初の頃に来てた子たちでも、誰だったかな。夏休みの朝一番に来てて、「どうしたの」って言ったら、お母さんとけんかして飛び出てきたんで、きょう、ここが休みだったらどうしようかと思ってたっていう子がいてね。その子はあんまり深刻な問題のない子だったけど、そういう子でもやっぱりそういうことがあるし。まして、学校ではしょっちゅう、いじめられてるとかね。軽い障害があったら大抵、そうなるんですけども。



松村　そうすると、そういう子どもたちの、駆け込み寺的な、一時的であれ、身を置くとか、その中でプレーワーカーと

か違う大人が、自分を気に掛けてくれて、相談できるような場でもあるっていうことですね。

竹村　そういうことですね。ごく普通のお母さんたちでも、これまた向き不向きがあって、中学生たちとすぐ仲良くなれるお母さんもいるし。お料理のすごく上手なお母さんがいて、お母さんのほうもいろいろなんだけれども。そういう意味で、逆に、いろんな人が、いろんないいところがあるっていうことを、実感できるのがよい点だなと私自身が思いました。他の所だと単一の尺度で測られることが多いけど、いろんなことができる人がいて。

松村　そういう場所に、不登校なり、ちょっと学校に居場所がないとか、家庭の不和な子が、そういう子どもたちが来るじゃないですか。そういうときに、学校に行きなさいだとか。

竹村　それはないです。それは言わないというのは、よそを見学したりして、それは言わないことにしようとは話してました。

松村　悩み事とか困り事を向こうから相談してきたら、ちょっと聞く程度の感じですか。

竹村　そうですね。向こうから言ってきたら聞くけど、こっちからは詮索しない。

松村　一番いいかもしれないですね。

竹村 だって、そうじゃなきゃ、こっちだって困るし。本当に、障害があったりして就職するのも難しいような子やなんかは、子ども・若者相談センターに紹介したり。

松村 金山のですね。

竹村 そう。今、金山なのかな。前は栄のほうだったんだけどね。まだ栄の頃だったけど。それ以来、そこもずっとフォローしてくれてるけど。私も、その子だけは、長い付き合いだから、月1回ぐらい、今でもお茶飲んでるけど。

松村 そういう気になる子どもたちの情報とか、プレーパーク、もしくは竹村さんたちスタッフの中で共有というか、何かされているんですか。

竹村 プレーワーカーには一応、共有しますが。人によっていろいろ。だから、今どのくらい共有してるか分からないけれども、今は理事会で、昔は世話人会だったんだけど、それだと、そういう話をあんまりしないほうがいいかなっていう人もいるしね。考え過ぎちゃうっていうか、入れ込み過ぎちゃうかなとかいうこともあるし。

松村 難しいですね。学校的な指導をする場だと、多分、子どもも来づらだろうし、そこまで子どもも求めてないかもしれない。

竹村 そうです。むしろ、そういうことがないから来られるんだと思います。

松村 いい意味で、ほったらかす、過剰に介入とか指導されないってことですよ。

竹村 そういうことです。ただ、ちょっと心配かなと思う子は、みんな気が付いて見てる人が多いんだけどね。私なんかは気が付かないほうだからね。夏なのにいつも長袖着てるとかいうのを、気が付く人は気が付いて、リストカットしてるんじゃないかっていう。そういうのは私は全然、気が付かないから、ずっと後で聞いて、教えてもらったんだけどね。

松村 でも、ちょうど80年代、90年代っていう、日本の学校の中でも、例えば、校内暴力とか、いじめとか、虐待とか、そういうことがどんどん社会問題になった。その背景には核家族化とか、いろんな日本の社会構造の変化もあると思うんですけど、そういった子どもたちの受け皿になっていくような性格をプレーパークとしても強めていったのですか。

竹村 強めていったわけではないです。どんな子でも受け入れるという話で。不登校の子とかも。

松村 繰り返しになりますが、天白区は、名古屋のその当時の歴史的な変化の観点で言うと、新しい人たちがどんどん外から入ってきたエリアだと思うんですが。その中で、どちらかというと、孤立してる家族だとか、ネグレクト的なママ



とかもいる。そういう人たちも、ここに来たりとか来なかったり。

**竹村** そうです。それは、何人かは間違いなくいますし、そうじゃなくて、特に何も言わない子は分からないけれども。

**松村** お母さん、お父さんっていう、保護者とプレーパークの関係性ってどうなんですか。

**竹村** 乳幼児からお母さんが連れてきてるところは大体、お母さんも気に入って来るし、お父さんも誘って、土曜、日曜やなんかのときに来るっていうのがあります。ただ、要するに、ちっちゃい子、1人で帰れない子、けんかして嫌だと思っても、帰れない子を送っていくのは無理だから、それはおいてったらそのまま迎えに来るまでここにいるしかないけど。それはそれでかわいそうだからと言って、親には説明するんですけどね。自分で帰れるとこの子だったら、けんかして帰っちゃうっていう子は当然あるんだけど。池に落ちてずぶぬれになった近くの小さめの子を、送って行ったこともあります。

**松村** 親同士のコミュニティーって、できたりするんですかね。というのも、名古屋でも、特にこの地域は、外から移ってきた方たちが多いので。このプレーパークの中で、お母さん同士のコミュニティーができたりとか、悩み事を相談したりとかっていうのもあったりしたんですか。

**竹村** 乳幼児のグループ、今は森のひろばだったかな、森のひろばでは、そういうのは多いです。ただ、前は10回がひとまとまりで、お昼ご飯っていうか、おやつっていうか、作る当番のグループは最初のときに決めて、献立も自分たちで考えて作ってもらったりしてたんだけど。それで、10回ずっと同じ顔で顔合わせするんで、割と仲良くなる人もいるし。難しくなる人も絶対ないとは言えないですけど。

**松村** プレーパークのほうで主催して、そのまま交流会みたいな形っていうよりは、そういう。

**竹村** だから、乳幼児の、今は森のひろばか、森のひろばは一応、こちらがセッティングして。10回だけあれするけれども、その後、気に入った人が、ここの雰囲気が好きっていう人は世話人やなんかで残ることも。そうでなくても、幼稚園が終わった後、遊びに来るとか、そういう形でつながっていくので。ただ、コロナのときにやっぱり森のひろばが続けてはなかなかできなくて、ばらばらにしたりしたもんだから、今どこまで続いているかよく分からないけれども。そうやって、逆にスタッフはみんな、森のひろばやなんかから、それから、幼稚園の後、遊びに来たり、子どものために来てた人たちが多いけど、中にはすごく気に入って、その後、世話人になったりして。

**松村** 森のひろばで、乳幼児は何をしてるんですか。

竹村 就園前の子どもたちだから、1、2、3歳児ぐらい。中にはもっとゼロ歳から来て、その辺のブルーシートの上で寝転がしてたりするんだけど。

松村 それはプレーパークとはまた別の団体が近くでやっている。

竹村 その分はプレーパークが主催して、募集して、それでやってるんですけども。

松村 竹村さんのところで、そういった学齢期というか、子どもたちに。

竹村 お知らせっていうか。それは別に、そんなに大したお知らせするわけじゃなくて、掲示板に貼ってたり、せいぜい幼稚園のお母さんの口コミだったりするんですけどね、弟や妹が。最初の頃は、近くの学校にお願いして、教室の後ろにチラシを置いてもらったりしたけど。最近では、インスタやHPぐらいかな。学校でのクチコミが一番大きいかな。

松村 分かりました。あと、今、虐待とか、発達障害とか、いじめとか、そういうケースが増えてきたっていうところで、関係機関と連携と人生の伴走者になるって、これ、どういうことですか。

竹村 それは、これがどこまでできるかは別なだけども、さっき言ったような、軽い障害やなんかがあって、就職やなんかもうまくいかなかったり、職場でストレスが多かったり、いろんなパニックを起こしやすいような子たちなんです

けど。私たちから連絡を取っている人も、そういう子が多いけれども。それは両方とも女の子だからね。男の子だとまた難しいんですよ。ちょっと違う難しさがあるのかな。でも、公式でなく、いろんなつながりはそれぞれあります。

松村 その関係機関は、子若センターのように、こっちからつないで相談する所ですか。

竹村 一緒に行って。親があんまりそういうことに熱心でないっていうか、障害があることをあんまり認めたくないっていうことがあるんだと思うんだけど。だけど、普通にではちょっと難しいかなというような場合は、長い付き合いができてるわけだから。だから、そういう付き合いのない人はなかなかできないんだけど。

松村 付き合いが長いと、やや踏み込んだ、ソーシャルワーク的なこともできなくはないってこと。

竹村 そうですね。あと、私たちですと仕事まで探すのは難しいので、子若と一緒に連れてって。子若も前のところはすごく人間関係を大事にして。ずっと向こうも伴走してくれるんだけど。私も月に1回ぐらい、向こう、彼女から電話があったり連絡があったりすると、一緒にお茶飲んで、おしゃべりしたりするんだけど。そうすると、時々パニックを起こしそうなときやなんかに、落ち着くかなっていう程度です。その程度です、できることなんて。

松村 いえ。そういう点で言うと、人生の伴走者としての。

竹村 そういうことなんですよ。

松村 本当に子ども期だけではなくて、その後の人生でつながっていくケースもあるってことなんですよ。

竹村 そうですね。それは別にシステムとしてしっかりできてるわけではないけれども。

松村 それぐらいの長い付き合いとか、個人的信頼関係が深まっている場合には、そういうこともあるっていう。

竹村 そういうことですよ。

松村 例えば、虐待とかネグレクトとか、さっきの長袖であれば虐待を疑うとかリストカットっていうことは、スタッフさんたちも勉強とか研修をしている？

竹村 あんまりしてなくてね。だから、私自身気が付いてなかったぐらいでね。みんなに、気が付いてなかったの？って叱られたんだけれども。

松村 でも、本当に、より多様な子どもたちの場所にもなっていたってことなんですよ。

竹村 児相に相談したのは、羽根木でもそうだったみたいですよけれども、話を聞くと。夜、帰る時間になっても帰りが

らない。全然、いつまでたっても帰ろうとしないっていうような子が、時々あるんですよ。そんなに深刻でなければ、朝に喧嘩して鍵を持たずに家を飛び出して、まだお母さんが帰ってこないからっていうのは。あまり夜遅く、ここに1人でいるのも危ないからっていうんで、住宅まで送って行って、その子のお母さんが帰ってくるまで待ったりしたことはあるんですけどね。冬の寒い時期とか、ちょっと心配で。エレベーターも前に変なおジサンが乗ってきたので、怖かったとか聞くとね。

あと、児相に通報したのは、やっぱり、夜、帰らないで。前の晩はそこで野宿したとかって言うのでね。それで、その子のときは、取りあえず、一晩、家に泊めたんですよけれども。

松村 お母さんが？

竹村 子どもが。小学校6年生の子。それはちょっとっていうんでね。

松村 児童労働に当たりますね。

竹村 そうなんです。でも、そのときは、一晩、家には泊めたけれども、それだと誘拐になっちゃうかもしれないって言われてね、助言受けたら。それで、取りあえず、その日はいったん帰したんだけど、今度、11月頃にまた同じことがあって。この季節に外で寝るのは無理だからって言って、児相のほうに。

松村 保護ってことですよ。

竹村 そのときのプレーワーカーが、弁護士さんに相談して、保護してもらったけど、でも、中3になったら帰されたみたいで。卒業間近になるとね。

松村 よくいわれる日本社会の変遷としては、家庭の機能がどんどん弱っていく中で、プレーパークであれ、違う所であれ、子どもたちもトー横キッズみたいなところになってるみたいになっていう。

竹村 行き場所のない子がいるんですよ。

松村 そういうことはちょっと感じますか、振り返ってみて。

竹村 それはあると思います。増えてるかどうかって聞かれると、それほど知らないわけだけれども、結構な数いますよ。いろんな意味で、親と子の関係がうまくいってないっていう。まあ、思春期は、そういうもの、とも言えますが。

松村 多分、プレーパークが、そういった子どもたちの受け皿として、本来スタートしたわけではないですよ。

竹村 ではないです。でも、子どもの居場所となるとは、そういうことも引き受けるということです。

松村 緑の中の自然とかっていうところですけども、結果として、そういう子どもたちのセーフティーネットとしての機能を、だんだん帯びてきているように認識しています。

竹村 それはありますね。要するに、子どもたちがだんだん大きくなってくると、いろんなことを聞くことが多いし。そして、うちの公園の中には、大変困ったおじさんたちがいて。若い子ども、女の子だったら小学校3年生ぐらいが狙われたりするんだけど。男の子だと小6～中学生くらい。自分たちのグループに引き込もうという感じでしょうか。

松村 変質者って意味でね。

竹村 変質者っていうか、要するに、その人自身も育つときに十分なケアがなかったっていうことかもしれないんだけどね。

松村 今、ケアって言葉が出てきたので、それにひもづけて言うと、このプレーパーク自体もケアの場ですかね。

竹村 広い意味ではそうですね。要するに、たまたま子どものそばにいた人だから、何か問題があるのであれば、そんなに過剰に勧誘はしないですけれども、言いたくないことを聞き出したりはしないけど、結構、聞いてると、ぽつぽつと、いろんなことを話す子はいるんでね。特に信頼されているプレーワーカーや大人には。

松村 一応、そういう子どもたちに耳を傾けたり、寄り添うっていう意味では、ケアのような機能もあるっていうところですかね。

竹村 実際にはあると思います。

松村 面白いですね。緑の中でのプレーパークっていうところから、かなり時代によって意味合いが変わってきて。

竹村 時代によってっていうか、そういうことも含めては。そういう子たちを特に選んでるわけでもないんでね。

松村 結果として、そういった子どもたちも入ってくるっていうことですかね。

竹村 それこそ、子どもたち、屋根に上った子が突然、ぱっと伏せたんで、「どうしたの」って言ったら、学校でいじめるやつが公園の中に入ってきた。

松村 逃げた。

竹村 隠れたみたい。だから、要するに、世間から離れてあるわけじゃないもんだから。

松村 そこは、ちょっと難しいですね。学校とは違う人間関係とか関係性を求めてくる子どもたちにとっては、学校、先生が入ってくるなんて、多分、論外だと思うんですけど。学校で、いじめっ子とか、その中での関係性とかが、プレーパークっていう場がその延長上みたいになっちゃうと、本来の機能ではない気がするの。

竹村 本来の機能とかってということもないような気がしてね。要するに、子ども食堂だって、子どもにご飯を食べさせ、

取りあえず、飢えないようにするってことは大事だけど、それだけじゃなくて、子どもがそこで話して大丈夫な大人っていうのと出会えるっていうことが、大事なかなっていうふうには思うのですね。

松村 でも、そういう頼られる大人が、プレーパークの場合は、プレーワーカーとか、竹村さんみたいな。

竹村 ごく普通のお母さんたちでも、話せる相手は向こうが選ぶので。

松村 その中に、なおかつ、地域のおじいちゃんだとかが、ちょっと入ってくるわけですよね。あんまり、お話聞いたりはしないかもしれないけど、物を作ったりとか、貢献というか、してくれるわけですよね。

竹村 こっちも別に、そういうところに何かを期待してあれするわけじゃないけど、できる人はものすごく上手だしね。中には元大工さんだった人が、カブトムシかなんかを竹や木の、木っ端で作って、「これ売っていいかな」って言われて、うーんって悩んだけど。人の少ないときには、戦争体験を聞かせてもらったこともあります。フィリピンでの体験とか、広島での被爆死者の遺体焼却作業とか。

松村 でも、子どもだけじゃなくて、いろんな人たちが社会とつながり、自分の強みとかを発揮できる場って、すごくいいですね。しかし、そういう場ってあんまりないですね。

竹村 私もそういうの、いいなと思ってね。別にそれは、そうしようと思ってしたわけじゃなくてね。

松村 リタイアされた方とかが、自分の強みとかを気軽に発揮できる場所って、プレーパーク以外で、子ども食堂ぐらいしか、今のところないかもしれないですね。

竹村 そうかもしれないですね。分からないけど。目的別に行政やなんかがやる場合は、対象を限定することが多くなるから。

松村 分かりました。次の質問ですが、このインタビューの一つの大きな目的なのですけれども、行政への要望、不満、期待、その他もろもろ。もしありましたら、お願いします。

竹村 場所については、すごくいろいろ配慮していただき、いいんですけども。一番困ってるのが、プレーワーカーの人件費なんです。これは本当だったら、1カ所のプレーパークに2人はいないと本当は回っていかないのを、今はボランティアのお母さんたちや常連の青年たちが、何とかフォローしてるんだけど、その生活がわれわれの頃よりちょっと厳しくなってるかなという気がしてね。プレーワーカーのほうも、ボランティアのお母さんたちのほうもね。そういう意味では、いろんな子どもたちの要望に応えるためには、2人ぐらいのワーカーを安定して雇用したいのだけど、はっき

り言って、もう1人分の給料にも足りないの。

松村 ここにも書いてました。冗談っぽく、男性プレーワーカーが寿退社をせざるを得ないっていう。そういう待遇というか、そういう現実もあるわけですね。名古屋市からは、年間6万しか補助がない。

竹村 これ年間ですからね、間違えないでくださいね。

松村 年間ですか。

竹村 これは確か、要するに、緑政のほうから出てる分だと思います。道具代だとか。緑政土木って、要するに公園の管理者のほうですね。そちらのほうは割と最初から協力的だったんだけど、子ども青少年局のほうか。その辺が私たちの根回しも悪かったんでしょけれども。

松村 でも、今、お話聞いてると、本当に単に子どもと遊ぶだけじゃなくて、虐待とかネグレクトとか、そういう子どもたちの受け皿になってるっていうのは、すごく行政課題じゃないですか、これはもはや。

竹村 そうなんです。

松村 なんだけれども、そこに対する補填がないってことですね、今。

竹村 そういうことなんです。だから、費用対効果から言えば、決して悪い話ではないと思うんですけどね。

松村 ここら辺の機能があることを、私自身も初めて知りました。

竹村 それは大変、残念です。私たちがあんまり効果的に広報してない。

松村 いえ。だから、こういうところを、このインタビューもそうですけど、そういうのをもっと発信する機会があってもいいかもしれないです。もう発信されてるとは思いますけれども。

竹村 してないわけではないけれども、やっぱり難しいところがあってね。多分、行政のプレゼンみたいなきにはしてると思うんですけども、必ず。普通のお母さんに対しては、なかなか難しい。熱心に来てくれるお母さんの中にも、要するに、不登校の子の「晴れた日は学校を休んで」を始めるっていうときに、プレーパークはそういう子のための所だっていうふうを受け止められると困るっていう意見の人も。

松村 子ども食堂を利用する子どもは、貧乏と見られるのと同じような、そういうスティグマですよ。

竹村 そんな感じですね。そういうところで難しいんですよ。

松村 でも、少なくとも行政に対しては、こういう大きな機能を果たしてるっ

てことを、もっと行政に伝えて、しかるべき補填というか、助成金とかをいただく必要があるのでは。こういう場が、もしもなくなってしまったら、この子どもたちって、本当にどうなってしまうとかっていうのありますよね。

竹村 っていうほど、そんなにみんなを救ってるかっていうと、なかなか難しいところなんですけどね。他のことはともかくとして、一番困ってるのは人件費なんです。大して収入なくても働いてもいいよっていう人が減ってきている、特に若い人でね。まだ1970年代生まれぐらいまでは結構、そういう若い子が多かったような気がするけど。多分、今は厳しいかなと思うけど、いないわけじゃないんですけどね。ただ、自分の子どもを育てるようにはいかないという悩み等、いろいろなんですけどね。

松村 リタイアした人たちは、時間あると思うんですけど、そういう人たちは、プレーワーカーじゃないですもんね。

竹村 全員が違うわけでもないんですけどね。この間、瑞穂の生涯学習センターでずっといろいろやってきた大工さんのおじいさんが、小屋づくりのワークショップがあるっていうときに来てくれたらしいんですけども。その人なんかは本当に子どもの言うことをちゃんと聞いて、上手に受け止めてたって言ってたからね。ただ、逆に、それこそ年金だけじゃ足りないから、もうちょっと収入が欲しいっていう人の場合は、必ずしも、そういうゆとりがないときが多くて。

時々、あつというようなことがあってね。

松村 確かに、そうですね。

竹村 それと、教えた人も多いしね、年配の人だと。プレーリーダー募集でやってきたときに、そういう人もいたし。悪意はないんですけどね。本人はすごく善意なんだけれども。子どもたちに伝えていきたい文化を持っているので。

松村 ちょっと合わないっていうかね。

竹村 ちょっと違うかなっていう感じがあってね。子どもから子どもに、文化が伝わっていく場になるといいと思うし、少しずつ、そうになっていってるとは思うので。

松村 指導が加わったとき、子どもが来なくなるようなことが、起こらなければいいですね。

竹村 その辺がね。もしかしたら、大丈夫な人がいるかもしれないけどっていう感じ。かなり経験のある、民間の児童館でずっと長くやってたっていう人も来てね。そのときは逆に、若くてちょっと楽しみな人がいたもんだから、お断りしちゃったんだけどね。ていうのは、どう考えてみても1人以上は雇えないんでね。本当は2人、採れるんだったら採ってもいいぐらいだなと思ったんだけど。そうすると、やっぱり若い人のほうがいいかなっていう感じでね。子どもに近いっていう意味でね。本当はそういう経験

のある人も一緒にやってくれと、それこそ、いろんな問題を抱えた子やなんかの対応も。そのときはまだ割と大人のスタッフばかりだったときだったんで、どちらかといえば若い人を、自分たちに足りない若さを求めちゃったんですけどね。そこは難しいところなんですけどね。

松村 分かりました。じゃあ、一応、予定していた最後の質問に入っていきますけど。少し抽象的で恐縮なんですけど、これから日本社会、また人口減ったりだとかして、どんどん厳しいこともいわれてますけども、子どもや子育て支援とかに取り組んでいらっしゃる方々への期待とか、メッセージ的なものをいただけるとありがたいですが。

竹村 いろんな人が、いろんな所で、いい活動をされているので、ぜひエールを送りたいとは思いますが、こちらも本当に自分のところで、あっぷあっぷしているんで。

松村 社会からのエールがまだ足りない。

竹村 そうですね。ただ、困っている人のそばに、話を聞いてくれる大人がいっぱいいてほしい。

松村 行政からのお金が十分でないってことは、わかりました。他にも、子育ての社会化とかっていわれてて、社会全体で支えようってことが、スローガンとしては言われてます。でも、プレーパーク



とかの実態とかをお伺いすると、それほど温かくない印象を受けますが。

**竹村** そういうことではないんだけど、どちらかという子どもを預かってほしいということのほうが、子育て支援でも出てきて、強いので、そこがちょっと残念かなっていう気はしますけどね。もちろん、仕事をするから預かってほしい人がいるのは分かるんで。ただ、それはもうちょっと、最初の頃の学童保育とかそういうものは、親も一緒に育てていこうっていうか。実はお金もなくて大変だったからなのかもしれないんだけど。何も無いところから始めてたせいもあるかもしれないけれども。そういう感じじゃなくて、子どもをしっかりと管理してほしいっていうか、それこそ監視カメラを付けてほしいというような声も出たりするっていう話を聞くとね。

あるいは、いつからでも、臨時の預かりでも何でも一緒にしますっていうと、家族みたいに暮らしているはずの所に不定期にいろんな子が交じってくるっていうのが、それはそれで保育方針とかそういうので大変なんじゃないかなと思ったりすることはあるんですよ。だから、子どもにとって一番いい形は何なのかなって思うんですよ。子どもは荷物ではないので、預けて事故さえなければいいというふうだと、それは違うし。一生懸命、保育してる人たちにとっても、なかなかつらいところがあるかなっていう気がして。それは一概には言えないので。でも、もうちょっと子ども中心の視点で。それは、それこそ行政に言うべきことなのかもしれないけれども。

**松村** さっき、親も一緒に育てていこうっていうのは、親を育てるのではなくて、スタッフと親と子どもがみんなと一緒に楽しんでいこうっていう趣旨ですよ。

**竹村** そうですね。私も一緒に子育てする中で、育てられたという実感がありますので。子どもの成長を実感できて、楽しい、心地よいという場じゃないと来続けられませんから。

**松村** その点で言うと、今、確かに、共働き世帯、子どもの1歳を待たずに復帰する人が増えている中で、親と子どもと一緒に遊び、共通の経験とかをするっていう機会は、時代の趨勢かもしれませんが、減ってるのは事実であって。そのことに対する懸念じゃないけど、思うところはありますか。

**竹村** 働きたいっていうことは当然なんだけど、逆に今それほど安心して、働きながら子育てできるっていう安心感がないから、子どもは生まれたいのかなという気はするんですけどね。だから、どちらを取るかっていう話になってしまったら、みんな悩むよなと思ってね。

**松村** 確かに、そうですね。そこは非常に難しいですね。お母さんが本当に働きたい、自分のキャリアとかでしたいことがあるので、どうしても預けて。すぐ早期復帰だったらいいけど、例えば、旦那さんの収入も減っている中で、もしくは、ひとり親とかシングルマザーで。

竹村 働かざるを得ない人は、いっぱいいるんでね。

松村 そういう人たちが、本当は子どもと一緒に時間を過ごしたいけど、働かざるを得ないので、もう1歳待たずに、すぐ預けてみたい感じだと、親にとっても子どもにとっても不幸な感じがしますね。

竹村 その辺は、私のような年寄りがいろいろ言うと、あれかなという気もして。大体うちは子どもが2人とも結婚もしないで、貧乏生活してるからあんまり言えないんだけど。その辺は、本当は、みんなはどう考えてるのかなっていうのは関心がありますけどね。

松村 プレーパークは、私の勝手なイメージだと、専業主婦の方の子どもが活用しているイメージなんですけど、そういうイメージで合ってますかね。

竹村 乳幼児で来るのは、それは専業主婦、または、育休中じゃないと来られないんですよ、森のひろばなんかの場合は。そういう人たちが結局スタッフとして残ってくれることは確かなんだけど、来る子どもたちは、逆にうちの場合は、小学生とか5、6歳ぐらいが多いかな。3~4歳でも、近くて1人で遊びに来る子もいるけど、そういう子は、こちらでも注意して見えています。子どもが1人で来られる子に関しては、別に親と一緒にできなきゃいけないということはないし、基本的にはお金も取らない。平日の午後、

特に、家庭訪問や面談の週は、子どもだけで来ることが圧倒的です。日頃は、子どもたちは「おけいこ」や塾で忙しすぎるのです。テスト週間なんて、常連の子どもたちばかりです。だから、行事みたいな、イベントみたいなときは一応、みんな、子ども幾らで取ってるものを、その子だけ取らないっていうのも難しいかなっていうのがあってね。鍋洗ってとかいう話のときもあるんだけど。

松村 働いて、みたいなの。

竹村 それがいいのかどうかはちょっと分かんないけど。ただ、私が「あんたはタダでいいよ」と言える筋でもないからね。皆の参加費で食べ物を持ち寄って、つくって食べるイベントだとね。子どもは100円ぐらいだけど。いっそ子どもはタダにしようかという話も聞いたから、変わるかも。

松村 取りあえず、今は専業主婦とか全然関係なく、いろんな子どもたちが使ってるってことですね。

竹村 確かに、人手は専業主婦だった人に頼ってますね。でも、それでも、ずっと専業主婦の人っていうのもいなくてね。これが仕事とってくれるか、少しずつライフステージっていうのが変わるもんですからね。そして、社会も優秀な人材を必要としていますから。

松村 子育てしやすい社会にするために、多分、いろんな論点とか考え方があるとは思うんですけど、竹村さん自身の

プレーパークでの貴重な経験を踏まえると、今、どんなことを考えられますか。

竹村 難しいですね。

松村 すみません、抽象的な質問で。

竹村 本田由紀さんが、『家庭教育の隘路』の中で語っていたのは、国によっては、放課後とか、どこでも、ほとんどただで遊べるような所がいろいろあって。だから、何を習わせなきゃいけないとか、そういうことをあんまり考えないで。それは考え方次第なのかもしれないけど。でも、仕事していても、子どもたちがどこで何をして遊んでたにしても、心配のない状態っていうのが。あるいは、習い事も含めてね。そういう所があれば、子育ては随分、楽になるんだけど。プレーパークもその選択肢の一つとしてあればいいかと。

松村 それはいいですけど。産んだら終わり、1歳になったら終わりじゃなくて、育児と自分のキャリアを両立させていく中で、いろいろ心配事が今たくさん、あまりにあり過ぎるかもしれないですもんね。

竹村 でも、思ったほど心配することはないような気はするんだけどね。ただ、貧困やなんかの格差とか、いろんなことが、あるいは、逆に教育虐待みたいな、そういうことが子どもたちに圧力になってるような気はするんでね。むしろ、そういうことをなくせば、もっと気楽に子どもたちが育っていけるんじゃないの

か。ある程度大きくなったら、子ども、ある程度っていうか、赤ちゃんのときから、子どもは自分の力で育っていくところは大きいのでね。子どもの育つ力っていうのが信じられると、随分いいんだろうけども。いろんなことから守らなければとか、「よりよい人生」のために、親がいろいろ選んで、お金をかけなくてはいとか。それがあんまり過剰だと、逆に、親子の距離感がつかめなくなっちゃう親が結構多いかなっていう気もするので。

松村 過保護じゃないけども、子どもが本来持つてて自分で育っていく力みたいなのを、過剰に介入することで、ちょっと。

竹村 それで毒親と呼ばれるような結果になるのかなという気はするんだけどね。

松村 そうすると、子育てしやすい社会ってことで今お聞きしてますけど、単にいろんな制度とかが充実とか云々ってことも重要だけど。

竹村 それはそれでいいんですけど。大事なことから。特に、高等教育の無償化とか、若い人の労働条件とか、将来に不安を持たずにすむような社会ですね。

松村 子どもとお母さんとの、お父さんもそうですけど、親子との関係性だとか、距離だとか、近さとかっていうことも、今すごくいろんなものがある中で、つかみづらい感じですか。

竹村 じゃないかなという気がするんだけれどもね。親ももうちょっと、お母さんももうちょっと、自分のやりたいことをやって、生きたいように生きてらいたいと思うんだけど。どの選択肢が正解というのではないから、人生は長いんだし、20年単位で考えれば、3回ぐらいチャレンジできるのでは。

松村 日本のお母さん、本当に忙しくて、時間もないって中で。

竹村 頑張っちゃってね。

松村 そういう疲弊、疲弊って言っちゃ語弊ありますけど、そういうお母さん、あっぷあっぷしてる今の現役の子育てママとかを見てると、今の学生とかは結婚とか出産に躊躇するのも、気持ちは分からなくもない。

竹村 多分、今の若い女の人は大変悩んでるんじゃないかと思いますね。

松村 昔みたいに、結婚、出産みたいな、そういう一つのライフコースではなくて、あまりにも、もちろん望ましいことなんだけれども、複線化し過ぎていて、果たしてどれが何か分からないし。それぞれのコースで、コースっていうか、その生き方で気を付けなければならないことだとか、障害とかある中で。

竹村 違うでしょうね、いろいろ。でも、お母さんたちも、自分のやりたいことを選んで、後悔せず生きられるよう

に、社会が援助しなければ、子どもが生まれず、滅びますよね。

松村 難しいですね。ここまでとさせていただきます。本日は、貴重なお話を、ありがとうございました。



(了)

# 地域の親子の子育てに寄り添って

丸山政子さん

(特定非営利活動法人 子育て支援の NPO まめっこ 前理事長)

## <プロフィール>

# 丸山政子さん

1950年生まれ、1973年結婚を機に名古屋に転居し、子育て支援ボランティア活動を開始。1998年名古屋市海外女性派遣としてイタリア・フランス。2000年「親も子ども主人公」をモットーにNPO法人子育て支援のNPOまめっこ理事長。2001年福祉医療機構社会福祉振興助成カナダ視察。2003年商店街に子育てひろば「遊モア」開設。2005年NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事。2013年理事長退任後名誉顧問として理事となる。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会アドバイザー。2015年名古屋市子ども・子育て支援センター長。2016年から現在は名誉顧問として理事として担う。



## <参考>

子育て支援のNPOまめっこ ホームページ  
<https://mamekko.org/>

インタビュー日時：2024年12月4日

聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 どうぞ、今日はよろしくお願ひいたします。丸山さんからお話を伺えるということで、とても楽しみにしております。よろしくお願ひいたします。

丸山 こちらこそお願ひいたします。

松村 では、質問なんですけれども、まず皆さんに、生い立ちですとか、可能な範囲で結構なんですけれども、教えていただけますでしょうか。

丸山 1950年生まれの私は、父が公務員、母が専業主婦の、いわゆる転勤族で3人兄弟の長女として、育ちました。群馬県の前橋市で高校を卒業し、そこで就職し、結婚しました。女性の幸せは、結婚とか良き母や妻になることが当たり前だったという時代で。まして転勤族って公務員住宅に住むものですから、女性の生き方のモデルは専業主婦ばかりでした。1973年23歳の時です。そのとき夫の転勤が決まり、名古屋で生活することになりました。群馬県の小さな町から名古屋市という大きな町に来て、毎日が戸惑う中、1976年に長女を出産し、78年に次女が生まれました。全然慣れない土地での子育てっていうのはとてもとても大変です。夫に相談したいときでも、ほぼほぼ家にいなくて……。

松村 そうでしたか。

丸山 いないので、前橋の母に電話をかけていました。すごく心細い、不安感が多い子育ての経験があります。

松村 ご自身の経験として、そういう苦労

というか、子育てが大変でいらしたと。おじいちゃんおばあちゃんがなくて、旦那さんが日中家にいない間は、本当に子どもと2人で向かい合わざるを得ませんよね。

**丸山** そうなんです。私は普段、自宅とスーパーと公園の生活です。この3拠点を歩き来していました。幼稚園に行くようになって近所のお友だちができました。

**松村** 今と違ってネットとかLINEとかもない時代ですからね。

**丸山** そうです。そんな中で子育てがスタートしたので、子育て不安ってということが身に染みていたというか。結局、子どもの命を全面的に私が責任持って育てなきゃいけないという、この「重圧」。

**松村** 分かります。

**丸山** たまに帰ってくる夫。子どもは慣れてなくて、パパのそばに行かないし、パパもどうやってやったらいいか分からないし、とても大変でした。

**松村** いや、すごい。お察しします。

**丸山** 不在の多い夫との子育て経験を経て、やっぱり私だけで育てるのはすごい怖い。怖いつてというか自信がない、不安だな、不安感の下、育てていたので、図書館に行ったり、生協活動をしたり、地域の子ども会に入ったりしていました。そこでボランティア活動することになるんですよ。そして、友だちがだんだん増えていきました。最初の子育て仲間を創ったのです。

子どもたちが幼稚園に行くときちょっと暇になるので、北区生学習センターを会場にしているパッチワークの会に入りました。そこで「託児ボランティアを募集してるから来ませんか」とセンター職員から誘われて「託児グループめだか」に入りました。保育士の資格がなくてもボランティアだし、研修とかあるので託児ボランティアができると誘われて始めたんです。

**松村** それはお子さんの年齢で言うと、おいくつぐらいですか。

**丸山** 下の子が幼稚園だから、上の子、小学生ぐらいですね。



**松村** 下の子がまだ幼稚園だと、完全にまだ目が離せない時期だとも思うんですけども、その中でもボランティアができたものですか。

**丸山** 子どもの帰宅時間に合わせて、ボランティアが帰れるような配慮があったので、私が自由に使える10時から2時ぐらいまでのボランティアをしていました。

松村 お母さん自身の、さっきおっしゃったような社会からの孤独感とか疎外感とかっていうことを解消しないと、親子の笑顔は失われますからね。

丸山 サークル活動を始めたころ、たまたま朝日新聞の社説に『あなた好みの女になりたい』っていう社説が載ったんです。

松村 どういう内容ですか。

丸山 奥村チヨという歌手が『あなた好みの女になりたい』っていう歌を歌ったの、知りませんか。歌あるんですよ。後で聞いてみてください。

松村 昭和歌謡みたいな感じの。



丸山 そう、まさに昭和歌謡です。それで、それと同じタイトルで、社説の記事を読んだんです。このあなたっていうのが国なんですけど、国はどんな女性を望むかっていうことが書いてあって。若い頃は学校へ行き、卒業したら結婚して、子育てして。その後パート労働して、おじいちゃんおばあちゃんの介護をして、最後に夫をみとってから死んでくださいっていうことを推奨していると受け取りました。

松村 なるほど。この社説は、今おっしゃ

ったように、国が望む当時の女性のライフストーリーみたいなのを、表現しているんですね。記事は賛同の立場で書かれたものではないですよ。

丸山 ええ、「専業主婦政策」に対して、これでいいのかという問い掛けの観点で書かれていたと思います。

松村 そうなんですね。じゃあ当時は、良妻賢母的な女性像が、望ましかったのですね。

丸山 そうです。

松村 そういう家族のケアを引き受け、自己犠牲を払い、自分のキャリアよりも。

丸山 もう一つは、子どもからの問い掛けです。私、子どもに、大きくなったら何になる？って聞いていました。そうすると、幼稚園の先生だとか、ケーキ屋さんだとか、花屋さんだとか言ってくるわけですよ。そしたら子どもから、お母さん大きくなったら何になるの？って聞かれたんですよ。

松村 ほう。

丸山 自分の生き方を問われたんです。この頃の新聞記事には、子どものいじめとか自殺がしょっちゅう話題に上がっていて。子育てをしている自分の子がいじめられても嫌だし、いじめても嫌だと思っただけですよ。多分みんな、どこのお母さんもそう思いますよね。でもどうしてそれが起きるのか、それは、育てている母親側に責任があったりするのかな。こういうことを考えな



がら、悶々とした子育て期を過ごしたような記憶もあります。

**松村** そうでしたか。そういうこともあったのですね。

**丸山** やっぱり自分の時間ができたってことが大きいと思うんですよね。「大きくなったら何になるの？お母さん」って言われた問い掛け、新聞には自殺やいじめが連日載って、そして、あなた好みの女になりたいという政策！この時に託児ボランティアに声掛けられたことが大きいです。

託児だけじゃなくてもう一つ、「赤ちゃんと一緒」という講座をしました。

人間の学習権というのは、生まれたときからあるんだというのを学んで、赤ちゃんだって学習権がある。それなら「赤ちゃんの学ぶ場が欲しいよね」ということで保育士である 2 人の女性と講座を実施しました。この講座を実施する上で、当初は生涯学習センターの職員会議では全員から反対されました。「赤ちゃんを連れてここまで来ない」とか「赤ちゃんは家にいるだろう」ということで。職員全員男性ですからね。粘り強くお願いして「一回やらせてほしい」ということで一回やったんですよ。そしたらなんと抽選ができるぐらいママが並んじゃったんですよ。赤ちゃん連れの親子が。

**松村** 嬉しい誤算だったのですね。

**丸山** その後、「赤ちゃん講座」は全区に広がったんですよ。

**松村** じゃあそこからどんどん広がって

いったイメージなんですね。

**丸山** 講座が終わった感想も、またこういうのしてほしいって声がいっぱい上がったんですよ。

**松村** 盛況ですね。このときは記念的というか、こんなに需要が、こんなにニーズがあるんだっていうことを、皆さんもう肌身で感じて、これは必要な事業だということでもどんどん広がっていった。

**丸山** そうなんですけど、生涯学習センターの講座は予算で動くんですよ、いい講座でも予算がないと削られちゃうんです。だから、それに嫌気がさして、私は託児グループを退会しました。

**松村** そうでしたか。

**丸山** その後親子教室のスタッフになったんです。ワーカーズコレクティブっていう働き方をしている方を知って。

**松村** 親子教室は、今で言う、応援拠点とかのはしりみみたいな感じですよ。

**丸山** 拠点とは違い参加費をいただいて運営します、すごい人気で、順番待ちだったんです。北区をはじめ千種区・名東区、西区、中村区、稲沢市に広がっていきました。

ここの親子教室は独自のプログラムを持っていて定員 10 組・10 時から 12 時、10 回コースで 2 万円かかりました。遊ぶ時間とディスカッションの時間。お互いにこどもを見合っただけのディスカッションの時

間を保証する。ディスカッションテーマは子育てのこと・夫婦のこと・生き方などを話します。親子がすごくリフレッシュする。それが人気で、7年間やっていました。

松村 7年間もですか。

丸山 その後、子育て環境が変わってきて、ママたちが主体的にサークル活動をするようになったんです。会場費を集めて、ママサークルが誕生しました。

松村 自分たちで、自発的に、自由発生的にママたちの仲間内のサークルができて、その中で場所借りて情報交換とか、交流するっていうのが増えていったんですね。

その背景には、どんなことがあるんですか。自然に拡大していったとか？

丸山 自然というか、やっぱりママたちが家庭に居たたまれないと思います。その中心だったのが幼稚園退職者の先生とか、保育園の退職者の先生とかでしたね。ママサークルが増えていきました。

松村 なるほど。

丸山 大阪の大学のI先生がその研究をしていました。

松村 分かりました、ちょっと調べておきます。

丸山 そんな時、びーのびーのさん（注：認定NPO法人（横浜市））の情報が入ってきたんです。

松村 ここで、びーのびーのさんが現れるわけですね。

丸山 そう、いろんな本を私も読みあさっていたので、カナダのことが書いてあった「サラダボールの国カナダ」という本を読んで、それが、びーのびーのさん、を中心に動かした大学のI先生です。この本を読んで、「横浜に見に行こうよ」って仲間で、びーのびーのさんを見に行きました。商店街の一角を借りて親子のひろば。これからの時代はこれなんだなって思い2003年に覚悟を決めて子育て広場を商店街に立ち上げました。

松村 びーのびーのさんも2000年だったような気がするので、じゃあ本当に、その後ぐらいですかね。

丸山 そうですよ。「とにかく開設して2週間しかたってないのよ」って理事長さんが説明してくれた。「ちょっと丸山さん待ってくれる？今、保育園に子どもを迎えに行くから」と言ってすぐ戻ってきた。子育て中のママがスタッフだった。

松村 では、別の団体も参考にしつつ、いよいよ2000年に「まめっこ」さんが設立されたというところですね。

自分たちで探すっていう発想っていうか。

丸山 物件を自分たちで探すんですが。家賃や耐震が何年度以降じゃないといけないとかや駐車場が何台ですとか、いろんな条件があつてすごく大変なんですよ。

松村 分かります。子ども、うるさいから貸してくれないとかいろんな人いますもんね。

丸山 経済産業省の空き店舗活用事業を申請して柳原通商店街になごや集いの広場を立ち上げました。商店街の理事たちから「何するんだね」って聞かれたので「親子で遊ぶ広場です」と答えました。

商店街理事長さんから「子どもはほっときゃ育つよ」「子どもは外で遊ぶもんだ」と言われましたが、「ここに来る子は赤ちゃんから3歳で、赤ちゃんはハイハイして公園では遊ばせん」って応えたら、「そうか」って理解してくれるわけですよ、そして商店街に広場を持つことができた。

松村 なるほどですね。



遊モアオープンの時の様子。地域の方を交えてのテープカット（写真提供：本人）

丸山 やりがいは、親御さんからは、「ここがあって助かった」とか「ここは親子の保育園だね」って言われました。

松村 親子の保育園。子どもだけじゃなくてってことですね。

親子、丸ごと入れるっていうのは、確かにこれまでの保育園とか幼稚園とは違いますもんね。

丸山 そう。そして毎日来て、楽しく遊んでおしゃべりできるから、子育てが楽しくなってきたって言われたんです。当初は商店街の理事以下全員男性ですから理解されませんでした。

松村 ご苦労もなさり、頑張りましたね。

丸山 利用者さんから利用料をいただいて運営をしていました。商店街からは、「一日何しているの」って聞かれて、「一日遊んでいます」って言ったら、「いい身分だね」って言われました。一方商店街には、肉屋さん、自転車屋さん、お弁当屋さん、床屋さん、があるのでママたちが買いものに行くわけですよ、そうすると商店街はお金が動くわけですよ。

松村 活気も出ますしね。

丸山 そう、活気も出るんですよ。そしてどんどん利用者が増えていって、商店街に、広場があることは有効なんだってやっと分かってくれて、認知はされました。

松村 ここでまた、大きな前進というか、

丸山 スタッフはみんな子育て中だったし、子どもに学費かかるから、ボランティアはやっていられないって残ったのは私だけ。でも今まで関わっていた女性たちが、私のサポートに入ってくれてやるようになって、それで何とかつないでいたんです。

あとは、いろいろ事業をすると助成金をもらえるのでその助成金でやりくりしました。

松村 そこら辺は経営的というか、戦略的なセンスとかも必要だと思うんですけど、正直、ずっとこれまで主婦とか子育て関係に携わってこられた丸山さんも、苦勞されたところとかも。

丸山 ここが一番苦勞ですよ。

松村 そうですか。

丸山 お母さんたちも、利用者さんなんだけど、スタッフみたいに一緒にやってくれた。大学生も何人か見学に来てたんです。その中の大学卒業生が、「虐待の予防のために働きたい」って言ってくれたんです。給料としては少額でしたが 5 年働いてくれたんですよ。

松村 すばらしい。

丸山 だから本当にいい人の集まり。

松村 きっと丸山さんの人徳ですから、これまでの活動をご覧になられた方が共感されたということだと思います。



子育てひろばの様子（写真提供：本人）

丸山 事業に共感してくれたっていうのがうれしいですね。

松村 最初は割と本当に、いい意味での草の根というか、素人感と言ったら変かもしれないですけど、そういう主婦たちが、NPO とはいえども経営とかお金とかを常に考えなきゃならない世界になるって、ステージが変わってくると思うんですけど、そこら辺の脱皮っていうか、そこら辺の移り変わりとか、難しそうだなって気もするんですけど、どうですか。

丸山 女性も自立をしないといけないっていうのがあったんです。それは精神的な自立だけじゃなくて経済的な自立ね。NPO 法人格を取るときに迷ったんです。NPO

法人でいいのか？って。

NPO 法人になったとき、非営利っていうことが、ボランティアって認識されることが多くって。一方で、名大の先生の勉強会に参加していました、非営利でもアメリカはちゃんと給料払って仕事をしている。事務局側は仕事で、その他の人はボランティア。全てがボランティアではないっていうのを学んでいたのです。ボランティアしたい人はボランティアを選択し、それをコーディネートする人は有償でいいと思っていました。「いつかはちゃんとお金を得るようにするぞ」という意識はずっとありました。

松村 そうなんですね。

丸山 子育て支援という事業は、お金を得るのはとても難しい。そこで広場事業以外で事務局費用が入るような愛知県や名古屋市の助成金事業に手を挙げて運営をしてきました。まさにいばらの道でした。

松村 そのときは、さっきの名大の方だったりとか、愛教大の方だったりとか、背中を押してくれた仲間とかスタッフはいらっしゃったんですか。

丸山 はい。仲間は背中を押してくれましたね。

そして「NPO って何？」って、あちこちから言われて。私はいろんな事例を学びそれを話して、理解者を増やしていきました。

松村 そういう、背中を押してくれた仲間がいつも、今伺っても、丸山さん自身がすごく主体的に行動された結果っていう気

がする。そういう側面、かなり強いような感じがしますね。

丸山 最初のこれですよ。お母さん、大きくなったら何になるのかという問い掛け。娘たちが社会に出て行くときに、私がプレゼントできるものは、身近な社会を変えることで、実は夫を変えることにもなるかと思ったのです。働き過ぎの夫を家庭に戻し、家事ができる夫になれば、退職した時、台所に立てるような男性にしたいって思ったので、途中から男性の生き方講座っていうのもやり始めるのです。

私が行動すれば、私の周りも変わる。

松村 すごい原動力っていうか、今のお話を聞いていけば、そうなんだっていう気がしますけども。

丸山 虎年なんです。

松村 いや、すごいです、はい。

丸山 商店街からはちょっとずつ認められるようになりました。そして 2015 年、法律が変わって「子ども・子育て支援法」ができた。そこから急に名古屋市も変わりました。

松村 そうですか。

丸山 はい。やっぱり法律が変わるって大きくて、後ろ盾ができるっていうことですよ。その後名古屋市子ども・子育て支援センター通称：758（なごや）キッズステーションが民間委託され、まめっこが受託しました。市内中学校区に 112 か所の拠点

が拡がりました。子育て支援環境も充実してきました。

一方で一時預かりも要望が高くて、広場に来ると、「ここで預かってもらえないんですか」という声がいっぱいあったのです。その当時の副市長が広場利用者にアンケート調査をしました。その結果一番要望が多かったのが一時預かり事業だったんです。そして各区に応援拠点として、預かりできる広場を設けることになりました。

**松村** それ、いつの話ですかね。

**丸山** 今から5年前スタートしました。現在、15区で事業しています。1年ごとに4カ所ずつ増やしていったんです。

**松村** そうなんですか。

**丸山** 名古屋市に16区応援拠点を開設するっていうのはとてもいいことなんだけど、基準のレベルは維持したいじゃないですか。そこをするには、ネットワークが必要だと思ったんです。5年前から応援拠点の4団体を取った時に、「応援拠点ネットワーク交流会」というのを作ったんです。これは行政の方は入ってないんです、自分たちだけなんです。当初の4団体に相談したら、私たちも初めてなので、一時預かりのある広場ってでも悩みなどを話し合いたいっていうことがあり、場所は758（なごや）キッズステーションで、代表とか世話人は輪番でやろうね。と自主活動をしています。

**松村** それは完全に、いい意味で行政から独立した自分たちの学びとか質の担保っ

て いうわけですか。

**丸山** そう。この5年間で応援拠点の仕様書の見直しなどをしてきました。



オレンジリボンイベントの時の様子（写真提供：本人）

**松村** 拠点側のネットワークとか、拠点側の声が反映されてきているということですかね。

**丸山** そうです。また重層と関わってきているので、応援拠点の職員のアンテナの高さが求められます。現場では、例えば、熱があるのに、無理に連れてきちゃった親に、どう伝えたらいいの？とか、「他の団体どうしてる？」って聞くと、たくさんの知恵や情報がもらえます。

**松村** 拠点同士の横のつながりの、悩みの共有だとかノウハウの共有ってすごく重要な気がしますね。

**丸山** そこが今、一番重要で、広場は広場の研修をするんですよ、全協から紹介される広場研修だったのですが、「一時預かりの研修」って、保育園の「一時預かり」の研修とも違います。保育園は集団保育をしている子どもたちの中で、ひとりひとり

の子どもを見るわけですよ。そうすると先生たちは、この子たちの日常の生活や成長を知っているから、子どもたちにとっては、泣くかもしれないけど何とか仲間に入れちゃったりするわけ。だけど、広場の「一時預かり」って、広場で親子が遊んでいる中に、親のいない子どもがスタッフと一緒に遊びに入ってくるわけですよ。子どもの置かれた環境が違う。

松村 なるほど。

丸山 ずっと泣いている子がいると、「え、ずっと泣かせているの？」って言って否定的に見るママがいる、泣く子がだんだん慣れてきて、遊んでいる姿を見ると、「泣くけど子どもって成長するのね」っていうことを知るんですよ。そこのつなぎをスタッフがするわけですよ。そうすると、それなりの研修が必要なんですよ。

松村 なかなか高度な。

丸山 高度なんです。今、10年目で拠点っていうのが認識されているから、応援拠点の重要性、スタッフのスキルの高さと、その中の一時預かりのスキルの高さを、一般の人に伝えることがすごく難しくって。これ、何とかしたいって、思っています。

松村 今、お話を直接伺って、ご丁寧にお話くださったので、やっと理解できましたけど、普通から見ると分かんないでしょうね。

丸山 そうなんです。だから、よく保育士資格のある方が、応援拠点に雇われた1年

目は、「え、広場でも遊ぶのですか？親子の所にママがいない子ども入れたらかわいそうじゃないですか、」という保育士もいます。「それは考え方だよ」って。かわいそうって見たらこの子はかわいそうだけど、この子だって力があって慣れてくるんだから、「広場の親子とスタッフと一緒に見守っていきましょうね」っていうふうに、そういう空気感をつくらないと、この子は孤立しちゃうからねって。私はこれこそ虐待の予防の場の仕事だと思っているんです。

地域で生活していると、スーパーで、バス停で「丸山さん！」って声掛けられるし、病院に行くと「〇〇ちゃんのママや、〇〇ちゃんのママに会いました。」ってよく聞きます。知り合ってつながっていくんですよ。そして、気になる親子がいたとき、名古屋市が今後取り組むアウトリーチ事業を生かしていくことができます。監視じゃなくて、支え合うっていう関係が、できると思っているんですよ。

松村 なるほどですね。

丸山 課題を感じる温度差はありますが、親子の広場や応援拠点を運営する者として、少しずつ共通の視点を持って支援していけるようにしていきたいです。

松村 了解です、ありがとうございます。

丸山 要望としては、子育てひろば全国連絡協議会が、「全国子育てひろば実践交流」を年1回開催しています。今年は山口県でした。参加したことありますか。

松村 私はないですね。

丸山 ないんですね。その実践交流会に行くと、厚労省の分厚い資料と、各地域の広場の事例検討があったり、またテーマ別に勉強会するセミナーが開催されます。そこで国の情報を知るんです。行政の人にはそういう情報を得る場所とか、支援の場には来てほしいと思います。長野県で全国実践交流会が開催されたとき、広場見学をしました。その広場の壁には「広場 10 周年記念」に市長が広場に来てスタッフと利用者さんと市長を囲んだ写真が飾ってあったんですよ。

松村 それがネットワークってことですね、今で言うと。

丸山 そうなんです。 「子育て広場全国連絡協議会」は全国の親子の広場スタッフのつながりができる場です。現場の課題や成功例など各団体の代表たちとの交流は心強いし、同じ目的で事業をしている仲間との出会いはモチベーションが保てます。名古屋でも「応援拠点ネットワーク交流会」を育てていきたいと思っています。私は思いが共有できるように毎回会議にオブザーバーとして参加しています。名古屋市だけでなく東海地方全体にもネットワークが広げられたらいいなと思っています。



松村 でも大事なことですね。名古屋だけじゃなくても、東海地方全体にそういう底上げというか、ネットワークは重要な気がしますね。

丸山 はい。私は子育て支援という言葉で抵抗ある人もいると思うけど、やっぱり「街が変わるな」って思っていて。私が最初 2000 年のときには、私をサポートしてくれる学生さんがいて、そこに親子教室を利用したママたちが応援してくれて、何とか広場を立ち上げてやった。その当時は本当に 2 人でわいわい言いながらやっていたのに、今認定 NPO になり、それから 758 (なごや) キッズステーションを受託して、予算規模もすごく大きくなって、スタッフも増えました。

やっぱり街は変わっていくと思うんですよ。北区在住のスタッフが 3 分の 1 いるんですよ。

松村 そうなんです、地元って感じですか、元利用者さんには。

丸山 元利用者さん。利用者で、その後スタッフになった人もいます。そういう意味では、人口減少になって、地域のスーパーが無くなったり、老人が多くなったり街が変わってきました。子育てや介護をしながら地域の中に働ける場があるっていうことが大切だと思うんです。柔軟に働ける地域社会。短時間でも社会とつながっている。子どもとの時間が持てて、介護も心を寄り添えることができるっていう、そういう地域をつくるのが大事だと思います。そういう場所を作りたい。そのために、「まめっこがそういう形を見せること



が大事だと今取り組んでいます。子育てに関わりながら、多様な働き方を創る拠点の役割があると思っています。

また、「あおぞら広場」っていうのもやっていて、親子が地域の公園に出て、地域の人たちや主任児童委員さんと遊びながら交流もできますし、公園で過ごすおじいちゃんやおばあちゃんたちも子育て仲間に巻き込むことができます。「あの人怪しいね」じゃなくて、「地域の子どもたちを、みんなで見守ろうね」という空気感を公園から創ります。また企業との連携ですが、そこで企画したのが「家族の絆レストラン」です。企業にまず寄付を求めます。この営業は大変です。その寄付金と参加費が原資になって、レストランと託児室を借り上げ「家族の絆レストラン」が実施できるのです。

松村 パパのクッキングですね、これ。

丸山 5組のパパが料理を作ります。その後2人で食事をして夫婦の時間をつくります。その間子どもは料理をしない5組の家族と一緒に遊んでいます。スタッフと学生ボランティアを入れて、みんなで遊び、見守ります。



松村 なるほど。

丸山 ママから離れた子はほとんど泣いています。抱っこしても泣き止まない子、中には諦めて遊ぶ子もいるんです。いろいろな子どもと過ごす貴重な体験です。

松村 なるほど、面白いですね。

丸山 いいでしょう。2人の世界は、ラブラブです。特に、よその子を見る機会がないパパにとって、よその子と遊ぶパパもいますし、自分の子を見ながらよその子どもの成長とか、遊び方を見たり、夫婦で子どもと一緒に遊んだり、相互子育て体験。これをやっていったんです。

松村 面白いですね。

丸山 今みんなが笑顔になる企画を、みんなで考える。そうすることによって、企業が変わると社会が変わっていくんですよ。一番は社会の労働力環境が変わらない限り、子育て環境は変わらないんですよ。また防災ですよ、ここにも力を入れて勉強し、このネットワークの中でも防災も取り組んでいます。特に港区とか南区は低い所なので、実際に防災、震災にあった団体を呼んで勉強会を開いたりしています。

松村 すごいですね。狭い意味での子育て支援に限定しないで、こういう家族の絆レストランだとか、防災だとか、今のこの社会、究極的には全部育児ともつながるかもしれないけど、そういう社会課題を解決していこうというNPOの思いというか、ミッションを感じますね。

丸山 肩を叩いてくれ、押してくれた。男

性中心社会なので、女性たちが共感しても、男性が動かないと世の中動かないんですよ。

松村 今のお話でいうと、男性の育児も私、関心があって研究領域に入っているんですが、下線部、引いてらっしゃる、夫も巻き込んだ方法だっていうのも、もしよければお話しただければ。

松村 この最後の。

丸山 これですか。

松村 男性学とかって、最近でこそ注目されていますけど、昔から貴団体やってるんだなと思って。

丸山 やってました。

松村 これはどういう。

丸山 女性がどんどん社会進出というか、社会活動をすると、夫とのコミュニケーションが取りにくくなって、夫は会社内のコミュニケーションはあるけど、社会でのコミュニケーションが少ない、男の人にも私たちが学んでいることを、一緒に学び社会課題を知ってほしいということからスタートしました。勉強会をすると、人が集まって、北生涯学習センターを会場にスタートさせたんです。大阪はその頃、男性学が積極的で。

松村 関西のほうが割とそうかもしれないですね。

丸山 そう。関西の人たちに来てもらい、講師になってもらって、私たちが活動していることを、男性社会にも分かってもらうために、生涯学習センターの予算取っていただき、講座をしました。

松村 今は時代が追い付いてきたというか、パパ講座も盛況だって伺いますよね。

丸山 そう。私は、5年、10年先が見えてくるっていうか想像できるんですよ。だからこそ、走っちゃうこともあるので、理解してもらえないこともあるんだけど。そういう意味では、理解してくれる人が周りにいっぱいいてくれてよかったなと思っています。

松村 最後のまとめの3行が素晴らしいので、この部分はせっかくなので、文章に書いてくださってはいるんですが、インタビューにも入れたいので。

丸山 今、言いますか。

松村 はい。

丸山 自分の子育ての経験の中で、子育て中であつたらいいなって感じたことを、仲間と学びながら形にしてきました。まめっこの活動の中から得た経験をもとに、人と人をつなげる場を持って、子育てが楽しいという街を目指してきました。自分自身の生き方をたくさんの方から学びました。私らしい人生を歩んでいます。

松村 ありがとうございます。最初に名古屋、全然知らない所に越してこられて、疎

外観とか孤立感とかを抱えていた日々から、今この、すごくファミリーヒストリーじゃないけど、私としては、すごい物語だなと思って伺ってきました。

**丸山** 次の世代の人たちには、今はいばらの道かもしれないけど、それを花畑にするような、前向きな気持ちと夢を持ってやってもらえると、「街は変わっていくよ」って応援します。

**松村** 丸山さんのこれまでの歩みが、本当にそうなるっていうことを確信させるような内容でした。

その点で言うと、ネットワーク。国レベル、全国もそうだし、名古屋市もそうだし、東海地方でも。同じ志を持つ様々な人たちが、お互いを支え合い、情報を共有する場が、本当に重要ですね。

**丸山** そうですね。だから、子育てひろば全国連絡協議会が開く実践交流全国セミナーは、14年間熱量が変わらないのですよ。

**松村** それもすごいですね。

**丸山** そこが私、すごいなって。世代間交代してるんですよ。

**松村** 衰えず。

**丸山** 衰えず。

**松村** それ、すごいですね。

**丸山** あの熱量を変えないっていうとこ

ろが、すごいなって思ってます。それだけきっと、自分事でもあり、子どもや孫の未来のためでもあり、街のためだから頑張れるんだよね。次の世代が生まれてくるから、バトンタッチしていくからその熱量も手渡しされているのかなって、思ってます。

**松村** すごく素晴らしいお話でした。

**丸山** いいえ、どういたしまして。こんなお話でよかったんでしょうか。

**松村** 大変貴重なお話でした。ありがとうございます。



(了)

# 児童養護施設の子どもに寄り添って

笹橋芳孝さん

(元名古屋市児童養護連絡協議会会長、元名古屋市民間  
児童入所施設連絡協議会会長)

## <プロフィール>

# 籠橋芳孝さん

昭和30年、岐阜県生まれ。大学卒業後、昭和47年に社会福祉法人和進奉仕会和進館児童ホームに就職、児童指導員として働く。平成7年にホーム長に就任。平成10年に全国児童養護施設協議会協議員、平成12年に愛知県社会福祉協議会児童ホーム部会副部長、平成13年に名古屋市児童養護連絡協議会副会長、名古屋市社会福祉協議会評議員、平成17年に名古屋市民間児童入所施設連絡協議会会長に就任。平成24年に和進館児童ホームホーム長を退任。和進館保育園園長に就任し、現在に至る。社会的養護、児童養護分野での大きな功績が評価され、これまでに様々な表彰（愛知県知事、全国養護施設協議会、名古屋市長、全国社会福祉協議会、厚生労働大臣）を受けている。



インタビュー日時：2024年12月11日  
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 では、籠橋さん、どうぞよろしくお願ひします。

籠橋 よろしくお願ひします。

松村 籠橋さん、非常に名古屋市の社会的養護の分野でご活躍なさっておられましたけれども、今回のインタビューの趣旨がその公的文書には残っていないような、籠橋さん個人のこれまでの思いだとか、葛藤だとか、もしくは今後、後に続く職員たちへのメッセージっていうところで順番にお伺ひしていきたいというふうに思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

籠橋 お願ひします。

松村 初めに、プロフィール的なところを教えてくださいませんか。

籠橋 私は同朋大学という社会福祉学科を卒業しました、47年に。卒業するに当たって、児童養護施設があるということを知りまして、そこへ行ったんです。ボランティアとして。そうしたところ、子どもたちが、次はいつ来るのって。又、施設長さんは、「職員が2年間勤めて辞めていく人が多い」と嘆かれていた。

松村 そんなんですか。

籠橋 はい。というのはやはり、もう住み込みが皆、条件です。それで48時間どころか、何時間働いたでしょうか。休み

はほとんどないというような状況でした。それでも私は養護施設のほうに住み込みで、児童指導員として入ったわけです。

**松村** 和進館児童ホームですかね。

**籠橋** 児童養護施設は、児童福祉法第一種事業で国から頂ける措置費で運営されていますが、非常に少なく、食べるものも十分に与えてもらえず、処遇に関しても十分ではなかったのです。私たちの給料も3万、4万という時代でした。職員もなかなか仕事をできない状況でした。

子どもたちは親元から離れて生活していますが、現在のような虐待ではなく、親の貧困、親のサラ金とか、養育放棄で子どもたちもすさんでいた時代でした。児童福祉というのは、1947年（昭和23年）ぐらいから始まりますので建物も古くなってきており、いろいろな箇所の修繕が必要ですが、業者に依頼することもできず、たえずトンカチとのこぎりを持って修理していた日々を思い出します。

**松村** その当時、入っている子どもたちってというのは、今、おっしゃったように貧困とか、親のサラ金とかで、養育困難な子どもたちが入ってくるケースが多かったんですか。

**籠橋** そうです。養育という困難のような、親がいないところもありましたし。

**松村** 乳幼児から、もう預けられるというか。

**籠橋** そうです。2歳から18歳まで。でしたけど、大体、15歳で巣立っていく。いかざるを得ない状態でした。



**松村** 多くの子どもたちは、もう高校には進学せずに中卒で働くってところですか。

**籠橋** 措置費というのは高校進学までは見てくれなかったんです。公立ならばいいが、私立はお金がかかりすぎるから、駄目と。入所してくる子どもたちは学習能力が十分ついていない子どもが多かったです。家庭にいる時、学習できる環境が十分でなく、親の状況を窺いながら生活していたようです。施設に入所しても、生活の立て直しが優先で学習指導まで手が届かない状況で、学校へ行ってもお客さまですね。つらい時代だったと思います。

やはりその子どもたちには高校進学だけはさせたいと、私ども名古屋市の児童養護連絡協議会では、アフターケアの問題、子どもたちが施設から出てからどうなるのか？ やはり学習の機会を設けなければ、進学もさせてあげなければいけ

ないと話し合い、大学進学や高校進学の話をしてきました。

松村 どんなことを議論したんですか。

籠橋 やはり中学生のことですね。特に自立が難しいということで、子どもたちが、やはり15歳で社会へ出ていっても無理です。それも住み込みが条件になってくるんです。

松村 工事現場とか、そういう関係が多い感じですか。

籠橋 工場現場は、児童福祉法で禁止されていますので、そういうところではない職種を選んでいました。住み込みですから、子どもたちが希望する職種には就くことが難しいのです。15歳でアパート借りるにしても保証人もない、お金もない、親もあてにできない子どもがアパートを借りることはできません。又、借りたとしても子どもたちがそこに溜まって、騒いだりするようなケースもあったんです。そのようなことも含めて、15の春は、難しい時代でした。それから徐々に、高校進学というのもできるようになってきました。今ではもう、高校進学のみならず、大学進学というものもできるようになってきました。児童福祉法も18歳から22歳までと変化してきています。

松村 ここに至るまでは、本当に長い葛藤があったってことですか。

籠橋 長かったです。私が入ったのが昭和47年ですけど。50年から非常にこの児

童福祉というのが社会的に必要なだということになってきたんです。

松村 50年というのは、児童福祉法ですか。

籠橋 児童福祉法の改正があったりしたんです。そのときに措置費というのですが、それが非常に低くて、大体、3年持てばいいところで。3年以上になると、賃金が上乘せになるから、施設が持ち出しになるんです。

松村 職員さんの給料に措置費が充てられていたけど、それがすごく低かったと。



籠橋 そうです。みんな辞めていく時代もありましたけど。だけどだんだんと良くなってきて、それまで本当にボーナスも、私、児童指導員1人、保育士が8人でやってきたんですけど。

松村 45人を見るために。

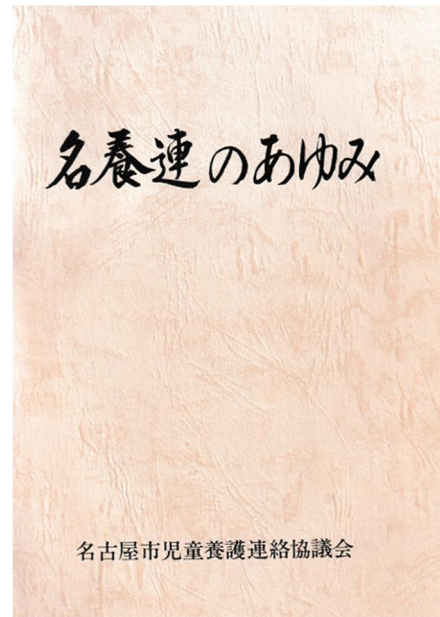
籠橋 そうです。24時間です。365日。

松村 休みなく。

籠橋 ということやってきました。措置費の人件費は、公立施設では公務員、民間施設は公務員とは違うとのことで、差がありました。ボーナスも現場の保育士さんには支給できても、私と施設長は、1~2カ月遅れて支給されました。措置費の人件費単価が低いため、県の社会福祉協議会からお金を借りて支給してもらい、その借入れ金額は月々の措置費から少しずつ返金していくと時代でした。

松村 少しぶしつけな質問を許してほしいんですが、そういう状況で籠橋さん自身も周りから、持って2年って言われた中で、すぐに辞めようとかっていうふうに思われなかったのはなぜなんですか。

籠橋 やはり子どもたちが、先生いてっということ。やっぱり一緒に生活すれば、かわいいもので。いうことで、一緒にいろいろやっていたんです。これもそうですけど。



松村 ホーム長の籠橋さんは時間を見つけては施設内の修繕に取り組んできた、と記録に残っているんですね。建物自体が老朽化して、修繕とかをしなければならぬような所に集団生活をしていたという。

籠橋 そうです。それも1部屋に10人、20人寝るんです。

松村 今でこそ小規模化とか言われてますけど、それぐらいの人数だったですね。

籠橋 そうです。

松村 1部屋だと、分からないですけど、あまりプライバシーとかって、もう全然ないですね。

籠橋 もう、そんなん、全然ないです。仲が悪いとやっぱり、そこでは子どもはまたつらい思いして。施設へ来て良かつ



たっていうより、つらい思いをした子ども中にはいたわけですよ。

**松村** そうですよ。今、おっしゃったような、そのお金も十分でない、職員もいない中、大変なこと、たくさんあったんじゃないでしょうか。

**籠橋** ありました。子どもたちもいろいろあるものですから、夜、抜け出たり、喫煙で補導されたりするような子も結構、いて。それも夜中に警察から呼び出しがあるんです。それも取り下げに行かなきゃいかんし。

**松村** 昭和40年代、50年代、いじめとか校内暴力とかシンナーとか、そういうこともあった時代ですか。

**籠橋** そうです。

**松村** そういうトラブルとかがあったときには、職員さんが深夜でも出て。

**籠橋** 親ですから、親代わりですから。措置権者というか。親ですから。当然、行かなきゃいかん。

**松村** それは大変でしたよね。

**籠橋** ですが、子どもですから、失敗するのは仕方ないと。失敗を繰り返して大人になっていくんだという信念でやってきましたから。そういう子どもと付き合いえば、いつか自立するだろうという思いで付き合い合っていましたから、子どもたちには。

そんな時代があって、私もこれ、いろんな所でいろいろ書いておるんですけど、養護施設だけが独自で一生懸命やっても何ともならんもんですから。私はいろんな方に協力していただく。それは実際に見ていただかないと、人は助けられません。私ども、なるべくボランティアとしてたくさんの人を入れ込んでいます。ボランティアというか、僕はサポーターと呼んでおるんです。というのはサッカーでもサポーターありますね。出ておれば、それなりに応援してくれるんです。頑張っておるときは応援してくれるんですけど、頑張らなければ、横向いてしまうということで、そういう言葉自体も加味しながら、施設の職員にはサポーターと。おまえたち、雑談したりなんかしとると、みんな、ボランティアの人、サポーターの人がもう横向いちゃうよと。だから一生懸命やって、それでもきんことはお願いすると。行政に対してもお願いしていくんだという姿勢を持っていました。

**松村** その地域の方たちがサポーターとして来るってお話だと思っただけ。これもまた変な質問かもしれませんが、その当時、今以上に児童養護施設の子どもたちに対する偏見だとか、そういう見方もあったかもしれないと思っただけ。どう地域の方たちにその児童養護施設に協力していただいたり、理解を得る上で、何か工夫したこと、心掛けたことありますから、他に。

籠橋 地域の役員になったり、小学校のPTAの会長をやったり、いろんなことをやりました。

松村 もう籠橋さん自身が。

籠橋 はい。

松村 施設員をしながら、自らの地域で、そういう要職にも就いて。

籠橋 そうです。何しろ、私は施設を理解してもら。それでできないことはいろんな方にお願ひする。ある1コマですけど、55年ぐらいいかな、セラピストという職種が付いたんです。だけどセラピストを受けるにしても、子どもたちがセラピーを受ける部屋がないんです。大人数の部屋しかない。食堂しかない。そんな所で子どもが本当に自分の気持ちを打ち明けられるかということで、やっぱり1部屋欲しい。子どもが本当にじっくり相談をできるような雰囲気というのは、ちゅうことで。実はここに書いてあるように、私はアメリカのほうへ研修に行かせてもらったんです。その縁で、知り合った人が、日本へ来たときに籠橋さん、日本で名古屋でビジネスマンが何か社会貢献できんかというようなことを言うけど、どうだということで、今の国際学園、名古屋NISというんですけど、その職員と仲良くなりまして。アメリカのほうの人たちも名古屋に来るビジネスマンと親交を持ちまして。アメリカはある従業員が寄付すると、企業が同等の額を付けて寄付するというのが寄付のルールなんです。飛行機のボーイングが、い

いよということで、金を集めてくれました、ログハウスを造った。セラピー専用の。

松村 和進館のところに。

籠橋 はい。造って、子どもが少しでも心開けるように。そのセラピーの部屋を造るにしても、ログハウスを造ったんです。木で。それも業者に頼めば簡単なんですけど。それもみんなでやろうということで、大学生やら、ボーイングの職員やら、アメリカのそのボランティアの人たちが集まって、造り上げてくれたものです。いろんな人がそういう形で施設の子どもたちを応援してくれる、いうようなことで、社会的なものを持ち込んでいったんです。

松村 社会的ないろんな理解とか、協力。

籠橋 そうです。

松村 寄付とかですね。

籠橋 はい。その辺の協力と寄付がないとやっていけない時代でしたから。特にその辺を強調して動いていた時代でした。

松村 話それるかもしれないんですけど、児童養護施設によってはその運営方針とかによっては、あまりそういう、当時、積極的に外にその理解とか寄付とかっていうのを働き掛けないところもあったと思うんですけど。結構、籠橋さん自

身の中では最初からそういう外部からのその力というものを重視されていたということですね。

籠橋 はい、そうです。

松村 自分たちだけでは限界があるという。

籠橋 はい。私は何しろ、子どもたちのプライバシーの問題はあれですけど、見せるところはどんどん見せて、私たちはこうしているというところを社会的にアピールしないと、やはり児童養護というのは認めてもらえない。

これ、児童養護施設になったのは、昭和40年代かな。それまでは養護施設だったんです。

松村 養護施設。児童が付いてなかった。

籠橋 はい。養護施設というと、障害を持った子どもさんが、というようなことで大変ですねというようなこと。それで児童を付けて、児童養護施設になったんです。

松村 それは名古屋市だけでなく、もう児童福祉法でそうなった。

籠橋 そう。

松村 地域に開かれたというか、籠橋さんおっしゃったように、その児童養護施設は知らない人は一体、何してるんだろうみたいな、そういうところあります

ね。見せられるところは見せる、というスタンスを重視されてこられたんですね。

籠橋 そうです。はい。それでだんだんと子どもたちが大部屋から小さな所へということで、ちょうど私が何年だったかな、あれ。養護施設のほうも、これ、見ていただくと古い建物なんです。ですので、ちょうど平成元年に小規模をつくりました。それも国としては地域に小規模をつくってくれということでしたんですけど。地域にはなかなかそれだけの子どもを収容する所がないもんですから。その建物の中に、5つのブロック、6人ずつ。あと、15人が乳幼児のブロックで、小規模を造りました。

そのときに子どもだけが生活するっちゅうのはあれだから、うちは特養もやっていますので。年寄りと子どもと触れ合うっちゅうのもできんか、ということで。ここに2階に特養、29名の特養をつくって。

松村 同じ建物の中に。

籠橋 そうです。平成元年に造りました。今も地域のほうに小規模をつくろうという発想で動いております、法人として。

松村 特養と一緒にというのは、あまり私は聞いたことがなかったんですけど。そこも狙いとしては、さっき、おっしゃったようにいろんな人との触れ合いとかを重視したということですか。

籠橋 そうです。

松村 社会性だとか、コミュニケーションの機会とかっていうのを。

籠橋 監査で怒られるんですけど、「籠橋さん、看板は出さないで」って言われるんですけど。喫茶店。年寄りが上から降りてきて、コーヒー飲んだりするような、コーナーいうのを造ったんです。監査で、籠橋さん、看板出してもらったら、ちょっといかんよ、税金引っ掛かる。また措置費の中では困るからっちゃうことで。看板も出さないで、結局、地域の方もお茶飲みに見えるんです。コーヒー1杯、200円ですから。

松村 でも、そこで地域の方がそこにやって来られて、また児童養護施設のことも知るし、触れ合ったりとかする。

籠橋 そうです。私たちの生活の中で動きも見ていただけますから。できないことは、そうじでも手伝おうとか、いろんなコミュニティーが伸びていくんです。

松村 そこは将来的にその子たちが育つから、その地域の中で暮らしていく上ではすごく生きてくるところですか。

籠橋 そうです。コミュニティーっていうのは、大事で。子どもたちの帰る場所で。うちでは毎年、1月2日、けやきの会という会をつくって、卒園した子どもが帰ってきます。

松村 今もずっとそれはされている。

籠橋 今もやっています。

松村 卒業生、たくさんいらっしゃるんじゃないですか。

籠橋 おります。ですけど、来れない子は自立してやっているだろうし。来る子は、それなりにと思ってます。この辺も、それもやり始めたのが結局、子どもが卒園して、就職する。帰る場所がない。私の自宅のほうへ来とったんです、子どもが。先生、お茶漬けでもいいから食べさせて。うちの女房が何か作って、食べとったんです。それが1人、2人、これが5人、10人になってきて、もううちでは見れん。施設で見なきゃいかんということで、もう施設のほうで対応できるように変えていったんです。いろんなそういう思いはあります。

松村 また後で戻るかもですけど、先に進まさせていただくと、その児童養護施設を取り巻く環境って、本当にここ、籠橋さんが就職されてからものすごく変わってきたと思うんですけど。どういうふうに変わってきたっていう認識だとか、その要因としてどんなことがあるのか教えていただいてもよろしいですか。籠橋さん個人が感じていらっしゃる思いで結構です。

籠橋 やっぱり国の施策というのは非常に低かったということですね。社会福祉法人ですから、もう民間なんです。個人営業の施設なんです。国の費用がなけれ

ば、なかなか運営は難しいということ  
で。その辺も厳しい時代だったろうと思  
います。それがだんだんこの児童福  
祉、特に虐待という問題が出てきてか  
ら、国が手を付けていただくようになって  
きておりますので。その辺が大きなあ  
れかな。

子どもたちも人権を守らなきゃいかん  
というようなことも変わってきておりま  
すので。子どもたちも割と近代化された  
建物の中で生活しているというのかな。

**松村** その子どもたちが入ってくる要因  
としては、最初、おっしゃったように戦  
後と、もちろん、戦災孤児からスタート  
し。その後、一人親とかが多かったと思  
う、養育できないとか。その後、虐待と  
かっていうのはいつ頃から入ってくる、  
背景として増えたような印象をお持ちで  
すか。

**籠橋** 虐待という言葉自体がなかったん  
です、私たちの当初は。50年代入ってか  
ら、虐待という言葉が出てきたんです。

**松村** てことは、児童相談所の一時保護  
だとか、里親児童養護施設の措置ってい  
うこと自体が、以前、あまりなかったと  
いうことですか。

**籠橋** いや、結構、ありました。ですが  
、やっぱり養護施設、教護院というの  
があつて。子どもたちも社会的にも厳し  
い状況というのかな。親があつても、面  
倒してもらえん、ほったらかしである  
し。嫌なことで子どもも結構、すさんで  
いた子が多かったです。

**松村** そもそも入所する場合には、どう  
いうプロセスというか、流れで和進館に  
行き着く子が多いんですか。

**籠橋** まず児童相談所が保護して、児童  
相談所からこれだけの施設がありますの  
で、空いている施設へ割り振るんです。

**松村** また後で、戻るかもですけども、  
今、一つ目と二つ目の質問を主に聞  
いたんですが。活動を進める中での手応  
え、やりがい、反対に苦労したところ、  
思い付くまま、ざっくばらんに教えてい  
ただけると。順不同で教えていただけ  
るとありがたいです。印象的なエピソード  
とかもあれば、ぜひ、それも教えてもら  
えれば。

**籠橋** 私がそういういろんな社会的な資  
源というか、そういうのを取り入れよう  
ということであると。私たちのしている  
ことを見ていただかなければならないと  
いうことで、やっていました。ですが  
、いろんな方々が支援してくださるよ  
うになってきたんです。今も、名養連と  
いう組織ですけど、若い職員がよその職  
員に会うと、籠橋さん、金もうけが上手  
だと。それといろいろ、子どもたちも行  
事つくったり、つくってあげたり、ドラ  
ゴンズのナゴヤドームで野球の大会をや  
らしたり。それとフットサルでもマリ  
ーナのほうで毎年、やるようになってま  
す。いろんな方が私のしていること、し  
たいこと、協力して下さったというこ  
とで非常にありがたいんです。この海  
の家一つにしてもいろんな人が協力してく

ださって。私も海の家やるだけになれば、あれですけど。子どもたちに何かやらしたりということで、地引き網をやる。30万かかるっちゅうんです。結局、人数が多いですから、何回もやるんで、30万かかる。どうする。名古屋市は、そんな補助金出せんとなると、30万どこかから集めてこなきゃいけない。いうことで金もうけが上手だって、うわさなんです。

**松村** いや。寄付はどういう所からいただくことが多いんですか。

**籠橋** 個人だったり、企業だったりです。

**松村** そういうところの働き掛けも籠橋さんですか。

**籠橋** そうです。やって、人脈というか、いろんな所で。ライオンズクラブとかロータリークラブも行きまして、そこでもいろいろお話しして。なるべく施設の子ども、施設にいたからできるんだと。家庭にいたらできんことも施設にいたからできるんだという、そういうことを子どもたちにもさせてあげたいという思いなんです。

**松村** 最近でこそ、何かいろんな社会経験の重要性、体験格差みたいなことを言われてますけど、その当時からいろんな社会経験を積ませたいという思いが、籠橋さん、おありだったんですね。

**籠橋** あったですね。

**松村** それはなぜなんですか。

**籠橋** 私たちの時代は、もうみんな、我慢する時代でしたけど。それに伴い、施設へ来て、親の愛情を注ぎ切れない子どもたちですから。何らかの形で施設にいて、「ああ…」というより、「施設だけ楽しい所だ」っていう、ちょっとした優越感を持てるようにしたい。みんな劣等感ばかりで。ある年頃になると子どもたちは自転車を買ってもらって、いろいろ乗るんですけど。施設の子は、その当初は自転車もそんな1人一つずつないもんですから。どこかへ行くには施設の子は後ろから走っていく。一般の子は自転車でということ。

**松村** 友達と遊びに行くにしても。

**籠橋** そんなギャップがあったわけですから。少しでも何か楽しいことをさせてあげたいというのが思いです。こういう、海の家も、そのひとつ。



「海の家」50周年にあたって

名古屋市児童養護連絡協議会  
会長 籠橋 芳孝

名古屋市児童養護連絡協議会（名養連）は、児童福祉行政事務が地方自治法の改正により、愛知県から名古屋市へ移譲され、昭和31年に創設された。創設当時の児童収容施設は、児童養護施設をはじめ乳児院など、いわゆる養護に欠ける児童を対象とした施設が大半でしたが、時代の流れと共に施設も大きく変わってきました。又、施設加入も知的障害児施設、知的障害者授産施設等と増加し、多種多様な対応が求められてきました。

創設当時は、どちらかといえば施設職員の親睦や入所児童の行事を主体とした活動でしたが、昨今では、児童育成事業や施設職員の研修を中心とした事業内容へと、その活動は質、量ともに大変充実したものとなっています。このような中、名養連の事業の1つである「海の家」が開催50周年を迎える事ができました。昭和46年までは、児童養護施設の学齢児童を中心に愛知県知多半島野間海岸の旅館を利用し、「海の家」を開催していました。その時は船で野間に入った事、お米を持参していた事等、今では想像もできない「海の家」であったが、きれいな海、自然環境の地を求め、昭和47年より愛知県知多半島山海岸へ移動した。宿も旅館から民宿を利用することになり、3軒の民宿と契約し、心温まる理解のもとに、家庭的な雰囲気の中、海水浴を楽しんでいます。

「海の家」の50周年を回顧検討し、今後もこの「海の家」事業が、子どもたちにとって楽しい思い出の1ページとなるよう一層の努力と、皆様方のご支援を賜り、児童福祉の推進を図ると共に、名養連の事業が福祉活動の大きなウェーブの原動力になることを期待したい。

松村 海の家。興味深いですね。

籠橋 長年続けば、子どもたちは施設にいたとき、ここ、連れてきてくれた、第二のふるさと、そういうものにならんかというような思いでやってきたんです。

松村 本当、ユニークな取り組みというか、あまり全国的に聞かないんですけど。こういういろんな社会経験、確かに普通の家庭では、あまり、むしろ、やらないかもしれないようないろんな経験も積ませたいという。

籠橋 そうです。

松村 これは単独ではなくて、連合でやっているんですよね。籠橋さん、この会長でいらしたんですか。

籠橋 はい、会長をやっておりました。

松村 そうですね。

籠橋 会長も、名古屋市児童養護連絡協議会と名古屋市民間児童入所施設連絡協議会というのがあって。会長が同じだったんです。会長が1人で二つ、掛け持ちやとったんですけど。だけどそんな二つもやるとのおかしいということで、どっちかにしろっちゅうことで。私のときから、そうやって1人、どちらかが会長、2人おるわけです。

松村 すみません、この、名古屋市児童養護連絡協議会と、名古屋市民間児童入所施設連絡協議会の違いって何なんですか。

籠橋 名古屋市児童養護連絡協議会は、名古屋市の全ての児童養護施設が加入していますが、名古屋市民間児童入所施設連絡協議会は名古屋市の公立施設は加入していません。これは、予算要望の時だけの違いです。名古屋市の公立施設は措置費が公務員待遇ですが、民間児童入所施設は措置費が民間であるがゆえに格差が生じてしまいます。児童福祉に携わる職員としても同じ業務をしても差があることに不満も生じており、双方の協議会を通して、名古屋市の児童福祉の向上につながっていけば良いのです。

松村 数としては民間のほうが多いんですね。

籠橋 多いです。

松村 それは名古屋市だけ？ 一般的にそうなんですか。

籠橋 一般的にもそうです。全国的にもそうです。児童福祉法の中で、結局、児童養護というのは第一種事業なんです、社会福祉の中で。本来は国がやらなきゃいかん事業なんですけど、国がこれだけの施設を作ってやっていけません。特に民間に委ねるという形ですから。どこの都道府県においても民間の施設が多いです。そこへ公費が一応、導入されている。生活費、職員の賃金、事務費等。

松村 分かりました、ありがとうございます。そういうことなんですね。承知しました。続いて、本当に長年、取組を続けてこられたなかで、手応えとか、やりがいをお教えいただけますか。

籠橋 私がやってきた中で、子どもたちが今も、卒業して、年に1度、集まるんですけど。やっぱりつらい思いをした子どもたちが自分のふるさとへ帰ってくる。自分一人じゃなくして、彼氏を連れてくる。結婚するよ、子どもが生まれたよっていうふうで、もう帰ってくる時がやっぱり一番、この子を支援できたんだ、ということですね。

松村 その子たちが自分で家庭を持ったりだとか、パートナーを見つけたりしたっていうときですかね。

籠橋 そのときでしょうね、一番、あれが。

松村 そこに至るまでは、多分、いろんな変遷があり、それをご覧になってきた

からこそ、そのとき何かほっとするっていうか。あるわけですね。

籠橋 そうです。親、木の上に立って見ると、書くんですけど。そこまではならんにしても、それらしきところまで持ってこれたというのは、私ども、児童福祉に携わった者については、一応、目的を達せられたのかなっていうふうに思います。

松村 その自立とかの関係でいうと、最近、いろんなその18歳で自立するのはちょっと無理っていうか。ちょっとずつ、確かに昔と比べれば伸びてはいるけれども、やっぱり依然として、大学進学率もそうですけど、ちょっと難しい状況にあるっていうご認識ですかね。

籠橋 そうです。私がやっているところではなるべく、大学に行かせると。もう高校で就職するっちゃうのは全国的にもまだ少ないんです。

松村 3割も行かないぐらいです、今。

籠橋 せめて大学行かせて、学歴だけでも付けさせることによって、何とか給料ももらえるだろうし、いうことで。それとか自動車の免許証を取らせる。それによって子どもが落ち着くんです。免許証を取ることによって。それまで本当にあちこち飛び回っていた子が免許証を持ったが故に落ち着いたっちゃうケースも結構、あります。



松村 それは免許証を取ることでどうなったんですか。

籠橋 だから免許を取ることによって、自分自身の責任感とかいうのも出てくるんじゃないですか。

松村 その一人前じゃないけど、なんか一人立ち。

籠橋 そうです。そういうものも資格として持ってもらうことによって、仕事があれば、運転手という仕事も出てくるだろうし。

松村 そうですよ。

籠橋 正直に、子どもが何らかの資格で食べていけるようなものになるといいなと思って。あとは親もない、兄弟もない、ないない尽くしの子どもですから。

松村 身寄りもない子どもたち。

籠橋 だからせめてそんなものも持たせてあげたいというのもずっと思っていたわけですから。

松村 本当に籠橋さんとしては、自分の子どものようなイメージだったんですか。

籠橋 そうです。私も、例えば、今度京都へ行くच्छゅうとなると、電話しますと、来てくれます。

松村 各地に子どもたちというか、卒業生がいるわけですね。

籠橋 はい。そう。



松村 今でも親交がある人も。

籠橋 あります。

松村 それは嬉しいですね。時代によって、子どもたちもいろいろ変化すると思うのですが、子どもたちとの関係づくりの仕方とかが変わったりとかっていうのは、ありますか？

籠橋 子どもというのは何かあったら喜んで飛び込んでくるんですけど。女の子、こんなんしたら、もうセクハラだのって、何とかいうことで、かえって子どもとの関係च्छゅうのが難しいच्छゅうのこと言ってます。

松村 今、確かに、その点、かなりそういう雰囲気になりつつありますね。

籠橋 人間関係がこれからどうなっていくのか、心配な点もありますけど。だけど、あくまで子どもは失敗して大きくな

るんだというところですよ。私たち職員もそうですけど、入ったばかりで全てできんもんだから。職員にしても、失敗しながらプロになっていくんで。

うちも新人研修というのを法人でやるんですけど、最初、入って、もう、金の卵で来てもらっておるんで、ひよこなんだから、最初からそんなもん、何もできっこないから、失敗を恐れずにやって。失敗はこちらの責任で取るから、頑張ってるってやってよっていうことで。子どもにとっても失敗することで、次へ成長していくと思いますので。そんな目で見えます。

それによって、あまり腹も立たんです。同じ給料もらっとるからちゅうて、相手も不満があるだろうし。だから私、保育園へ行っとるんですけど、もう定年になったんですけど、保育園に行っと思って、「なんでできんの？」なんて言っとるんですけど、「おまえさん、この子がまだできんのは当たり前だし、これで明日できることになるかも分からんし。私たちはだんだんできることが少なくなってくるんだけど、子どもはできることが増えていくんだから。見れば失敗して、成長していくんだから、もうちょっとそれで見たら？ 腹立たんよ」ちゅうて言うんです。

**松村** 分かりました。籠橋さんのお話を伺っていると、和進館っていう、その一つの児童施設に対する思いだけじゃなくて、業界っていったら変かもしれないですけど、その児童養護施設全体に対する理解、社会からの理解だとか、寄付とか、そういう全体を底上げというか、何

かそういうところにも意識がすごく向いていらっしゃるのように感じるんですけど。そこは何かご自身で心掛けていらっしゃるとか、あるんですか。

**籠橋** 私の時代はいろいろ助けていただく時代で、いろんな形で地域社会に対してアピールしました。ですけど、今では、措置費の単価も上がってきています。職員も増えていきますね。給料も上がってます。ですけど、やはり今までそれでいろいろな制度の中で措置費という国からの支援金が少なかったわけで。私はいろいろ皆さんに理解していただく、いうのが多かったんですけど。いや、今度は反対に社会施設であるから、地域に対してできること、これをしていかなきゃいかん。

**松村** 例えばどんなことですか。

**籠橋** 子育て支援とかですね。それこそ、子どもが親から離れなきゃいかん。その前に何か予防的なものができないか。もう最悪の状態になっちゃってから施設に来ますので。その前に施設が1泊させようかとか。ショート、短期でもいいから利用してもらおうとか。

**松村** ショートステイとかが増えたりってことですかね、今の話でいうと。

**籠橋** いうのも増やしていく。それとか子育て相談とか。セラピーとか。それとか自立してできない子どもたちをどこかで見るとか。というような施設ちゅうのは必要であると思う。

松村 児童養護施設が中心となって、地域の中での子育てを支援していく、と。そこは大きな転換点のような気がするんですけど。いつ頃からそういう感じなんですか。

籠橋 私ども、今、保育園なんですけど。今、去年、一昨年からかな、セラピーを入れました。これはまだ国が認めてくれてません。だけど保育園でもどうですかね、なかなか子ども言うこと聞かんとかいうことで、親はいっぱいなんです。生活もあるので、パートで働かなきゃ、時間で持てかなきゃいかんとかいうようなことで、親もいっぱいいっぱい。たまにはこういう子、どうしたらいいかとか、困るとるけどどうなんだろうとか、そういうことでちょっとアドバイスすることによってほっとされる家庭もあるんです。そんなことをこれからはこの児童福祉の中では、今まで世話になったんだから、これからの時代は社会に対して恩返しするというか。社会貢献ができるようなスタンスも社会の中の1コマというか、利用できるようなものにしていく必要があると思います。

松村 今、おっしゃったその狭い意味での児童養護施設、和進館だけではなく、法人として保育園も含めて、その地域の子育ての恩返しってということですか。

籠橋 そうです。

松村 分かりました。それは大切なことですね。

籠橋 もう、私どもも一応、うちの法人としては理事で残っておるんですけど。よその法人に対しても私も理事で行ったりして、いろいろチェックしたり、予防的にこういうのをお願いするとか、この辺はおかしいぞというような形でやります。ある養護施設の理事やっておるんですけど、どうなんだろう、進学できる子は少ない、どうなんだ、というような形でもうちょっと自立に向けて頑張ってもらわなきゃいかんちゅうような形です。

松村 分かりました。今、手応え、やりがい。苦勞って何か、今、おっしゃったこと以外に何かありますか。印象的な苦勞とか。

籠橋 今までですか。

松村 はい。

籠橋 やっぱり人の問題です。今と同じ。

松村 職員のマンパワーとかってという意味ですか。

籠橋 そうです。それから今、うちでもそうですけど小規模になると、保育士さんというか、ケアワーカーが家庭の主婦、また主夫、夫で、料理も作らななきゃいかん、洗濯もやらななきゃいかんようにしたんです。そうなってくると、なかなか、難しい人もあります。

松村 今、本当に日本全体が人手不足と  
かいらわれている中で、そういう。

籠橋 そういう人たちもやりがいのある  
ようなものにしていかなきゃいかんのだ  
けど、若い人たち、うちのほうでもいろ  
いろそういう経験がない方も多いよう  
で。

松村 少し配慮とかが要る、虐待経験と  
かがある子どもへの接し方だと、また普  
通のただの子育てしてました、だけの主  
婦だけだと、ちょっと違うようなところ  
もあったりしますね。

籠橋 違う。

松村 一定の研修だとかをしてやる感じ  
なんですか。

籠橋 だけど研修といっても、机上論で  
なかなか身に付かんです。現場に長いこ  
と勤めてなんぼちゅう事案と思いま  
す。先ほど言ったように、もう経験がも  
のをいいますから。本当にロボットじゃ  
ないですから、なかなか思うようにいか  
んし。そんないったら、かえって虐待が  
心配されます。だけど子どもは失敗して  
も大きくなっていくし。職員とて、失敗  
して一人前、プロフェッショナルになっ  
ていくんだというふうには思っています  
ので。

松村 子どもだけじゃなくて、職員に対  
してもその失敗を人は繰り返してどん  
どん大きくなっていくっていう。

籠橋 そうです。

松村 そういう大きな視点で見ていらっ  
しゃるんですね。

籠橋 そうしていかないと、なかなか。  
先ほど、取り組んできた中で、私も修繕  
なんかちゅうて言うんですけど、若い  
職員は見てますから。

松村 その姿をまた見てて。そうか。

籠橋 だからもったいない、子どもにあ  
め玉をもっと食べさせて、あれだったら  
自分でできることはやろうよって言え  
ば、職員もその辺で。今、もう、私、辞  
めて、他の後輩が本部長をやってますけ  
ど。結局、それも今では、修理などをす  
るようになったそうです。

松村 話それるかもですけども、児童養  
護施設って、その施設の維持とかも含め  
て、本当にいい意味での手作り感って  
いうか、例えば病院とかだと別にお医者  
さんとか看護師がまさか修繕とかしない  
じゃないですか。児童養護施設は自分た  
ちの家と、ホームなんですかね。

籠橋 そうです。

松村 そういうのも含めて。

籠橋 やっぱ人間として生きていくた  
めに必要なことですから。環境整備も  
自分たちでやる。人がやってくれるわけ  
じゃないし。

松村 でもその中だからこそ、一体感じゃないけど、なんかみんなで協力してやっていこうっていうのは生まれたりとかするんですかね。

籠橋 そうですね。

松村 お互いに信頼したりとか。

籠橋 そういう中で、いろいろ覚えていくんじゃないですか。仮に電気のコンセント、今、もうほとんどプラスチックでなっているんですけど。そこの所がよく壊れるんです、たまに。だけど私たちはプラグを切って、プラグを買ってきてプラスマイナス付けて、やり直すんです。

松村 そこから。自分たちで本当に。

籠橋 はい。

松村 その様子をまた、子どもたちも見ているわけですね。

籠橋 見てるし、その辺、知恵付いて、自分が家庭を持ったときに、籠橋さんやとったから、こうやったら直せるとか。

松村 そういう、本当に生きるすべというか。

籠橋 そう、そういうのも私たちが先に生まれた人間だったら、教えていくところはある。もう私たちも最近、こういうパソコンなんかは駄目ですけど。古いものは。保育園でもそうですけど、園長先

生、壊れましたって持ってくる。職員が付いてきて、「謝りなさい」、言うけど。子どもが遊んで壊れたんだから、このあれだからちゅうことで修理できる。1日預かる。次の日、直して、持ってきた子にどうぞ、大事に使ってね、というようなことでやっています。

松村 分かりました。続いて、抽象的で恐縮なんですけど、行政や社会に要望、期待したいことというところで。社会的養護の文脈ですとか、今の法人からの視点でも結構ですけども。これまで、ぜひ、籠橋さん自身の経験や思いを踏まえて、行政や社会に要望、期待したいことを教えていただけますか。行政との関係は、結構、円滑だったんですか。名古屋市とは。

籠橋 名古屋市においては、割と児童養護については努力していただいておりますので。賃金は上がってきておるし。ただ、やっぱり職員の配置基準の見直しちゅうのは必要だろうと思います。それによって職員のほうも業務分担できる部分も結構、ありますので。

松村 余裕が出てきたりとか。

籠橋 そうです。それになると、お互いに児童の自立というか、支援に直接、充てる時間が増えれば、それだけ良くなるんじゃないかなと思っています。

松村 分かりました。最後の質問です。名古屋市で現在、またはこれから子育て支援、児童養護施設もそうですし、保育

園とか幼稚園もそうなんですけど、そういう方、若い後進に向けて、メッセージやエールをいただけますでしょうか。

**籠橋** 何しろ、有言実行というか。子どもたちがある程度、こういうふうにした、ああいうふうにしたと言え、必ずそれはしてあげるっちゅう。職員配置の問題もあるんですけど。私たちは常に社会のニーズに応じて前進しなきゃいかんと。それが私たちに与えられた職務であると思うんです。今日より明日、ということ、1歩でも2歩でも前に進んでいかなきゃいかん。これが社会が求めらるる姿だろうと。後戻りはしてはいかんということですね。でないと、社会で、措置というか、税金をもらっている以上、税金の使い方はどうなのかって問われるようなことにもなりかねるので。あそこなら、あそこの養護施設というか、名古屋の児童福祉は素晴らしいものだというためには、みんなが1歩でも2歩でも良くするように、力を合わせてやってもらうというのが必要かと思うんです。

**松村** 分かりました。本当に貴重なお話、ありがとうございました。



(了)